

# 20世紀における和装本装訂名称研究の展開

—和本の装訂呼称に関する—考察—

山 中 康 行

## 論 文 要 旨

### この課題を取り上げた理由と目的

和本の装訂名称の用語には、粘葉装、綴葉装、列帖装、大和綴、結び綴等がある。しかし、同じ装訂<sup>1)</sup>の和本が人により、異なる装訂名称で呼ばれたり、異なる装訂の和本が同じ装訂名称で呼ばれるという、「同名異装、異名同装」の論争<sup>2)</sup>が、昭和初期から現在まで混乱が続いているので、これまでの混乱の状況と原因を解明し、混乱を解決するため、1900年から2006年までの間に、発行又は再版された単行本及び雑誌論文から、粘葉装、綴葉装、列帖装、大和綴、結び綴の説明の部分を抽出した。そして、和本の標準的な装訂方法を、外形の図版と装訂方法ともに示すことにより各人の説明に対応する装訂形態の図を時系列的にまとめ、一覧表に整理し、混乱の原因と問題点を集約し、解決策として各装訂に対して現在どのような装訂名称が相応しいかを提案した。和装資料の形態と装訂の名称について、これまでどのように呼ばれてきたかをたどり、同名異装、異名同装の混乱が生じた原因を考察することは書誌学上意義深いものがある。和装資料の名称はこれまで、①歴史文献にその根拠を求める方法と、②その形態から名称を解明する方法とがなされてきた。しかしそのいずれもが装訂名称の説明には不十分・不適切であり、不十分な説明が混乱を一層増す結果となった。本稿では、諸説を検証し、書き表し方、読み方についても言及し、製作の流れと使用材料による新たな観点を付加した装訂名称を提唱するものである。

### 研究の背景

和本の装訂名称の混乱—同名異装（同名異種）、異名同装（異名同種）問題の存在（特に粘葉、綴葉、列状、大和の装訂名称の混乱）。

### 研究の目的

同名異装、異名同装問題の混乱の問題を整理し、似つかわしい装訂名称の提案。

### 研究の方法

和装資料の装訂名称を外形の形態からのみの判断ではなく、個々の和装資料の装訂過程（製作プロセス）を説明し、20世紀に公表された各氏の著書を時代順に説明記述を逐一検討し、先

行研究・学説の不備、不適切な箇所を指摘し、説明のあいまいさからくる同名異装、異名同装問題、異称、別称の問題を検証。

## 用語の定義（和装資料の装訂用語の定義）案

和装資料の装訂方法を製作工程からの流れを示し、個別の和装資料の形態にふさわしい名称を提案。

## 目 次

### I. 序論—和装資料の装訂名称について—

1. 和装資料の装訂名称の種類（種別）
2. 和装資料の装訂の流れ（製作工程）
3. 和本の制作工程（装訂方法）の概略

### II. 和装資料の名称諸説（先行各論の考察）

1. 和田維四朗『訪書餘録』
2. 吉澤義則「和漢書の装潢について」
3. 田中敬『粘葉考』
4. 日本書誌学会制定術語
5. 上田徳三郎『製本乃輯』
6. 長澤規矩也『書誌学序説』
7. 川瀬一馬『日本書誌学概説—増訂版—』
8. 橋本不美男『原典をめざして—古典文学のための書誌—』
9. 山岸徳平『書誌学序説』
10. 池上幸二郎・倉田文夫『本の作り方』
11. 遠藤諦之輔『古文書補修六十年』
12. 藤井隆『日本古典書誌学総説』
13. 中野三敏『書誌学談義—江戸の版本—』
14. 櫛笥節男『書庫渉獵』
15. 廣庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』
16. 中藤靖之『古文書の補修と取り扱い』
17. 藤本孝一『日本の美術9』
18. 杉浦克己『改訂版書誌学』
19. 藤森馨「古典籍装訂用語の整理に関する試論」
20. 吉野敏武『古典籍の装幀と造本』
21. 堀川貴司『書誌学入門—古典を見る・知る・読む—』

Ⅲ. 同名異装、異名同装—問題点の集約・分析—

1. 同名異装、異名同装の混乱の現状
2. 用語の定義の集約
  - 1) そうてい
  - 2) 装と綴
  - 3) 複数表記の名称
  - 4) 類似表記の名称
  - 5) 類似音声の名称
  - 6) 同字異音の名称
  - 7) 同音異字の名称
  - 8) 同音複数表記の名称
3. 同名異装、異名同装の分析
  - 1) 同名異装、異名同装名称の根拠の問題
    - ① 文献を根拠とする見解
    - ② 名称の根拠を字義（字源）に基づく説
      - (1) 粘葉装の根拠
    - ③ 資料の形態を根拠とする見解
      - (1) 胡（蝴）蝶装の名称根拠
      - (2) 綴葉装の名称根拠
      - (3) 列帖装の名称根拠
      - (4) 大和綴の名称根拠
      - (5) 結び綴の名称根拠
      - (6) 読ませかたの問題
4. 同名異装、異名同装の考察
  - 1) 文献を名称の根拠とする見解の考察
    - ① 文献数の問題
    - ② 和本と唐本の装訂名称の区別
    - ③ 文献の製作年代の検討
    - ④ 現装と原装の検討
  - 2) 各装訂名称の根拠の考察
    - ① 胡（蝴）蝶装の名称
    - ② 列帖装の名称
    - ③ 綴葉装の名称
    - ④ 大和綴の名称
    - ⑤ 結び綴・リボン綴の名称
    - ⑥ 大福帳の名称

⑦ 複合装訂の名称 (装訂3 結び綴、大和綴の装綴について)

5. 説明の不備による混乱

- 1) 仮綴じ・下綴じ・本綴じの区分
- 2) 不十分な装訂方法の説明
- 3) 不適切な図版と説明文
- 4) 再現不可能な装訂方法の説明
- 5) 読み方を示していない説明
- 6) 用語使用上の問題

IV. 和装資料装訂名称付与の私案

1. 現代の和本の装訂名称について提案

- 1) 用語「そうてい」の使用漢字
- 2) 和本と唐本の区別
- 3) 時代区別
- 4) 不使用名称
- 5) 綴葉装の使用禁止
- 6) 装と綴の区別使用
- 7) 標記の統一
- 8) 新用語の定義
- 9) 図版サンプルの説明文について

V. 個別の和装資料に付される装訂名称の説明文の私案

1. 「装」と「綴」の組合せ表記
2. 個別の和本の装訂名称の解説文への提案

VI. おわりに

1. 公的機関の見解

- 1) 国立国文学研究所の定義
- 2) 国立国会図書館の定義

2. 今後の課題

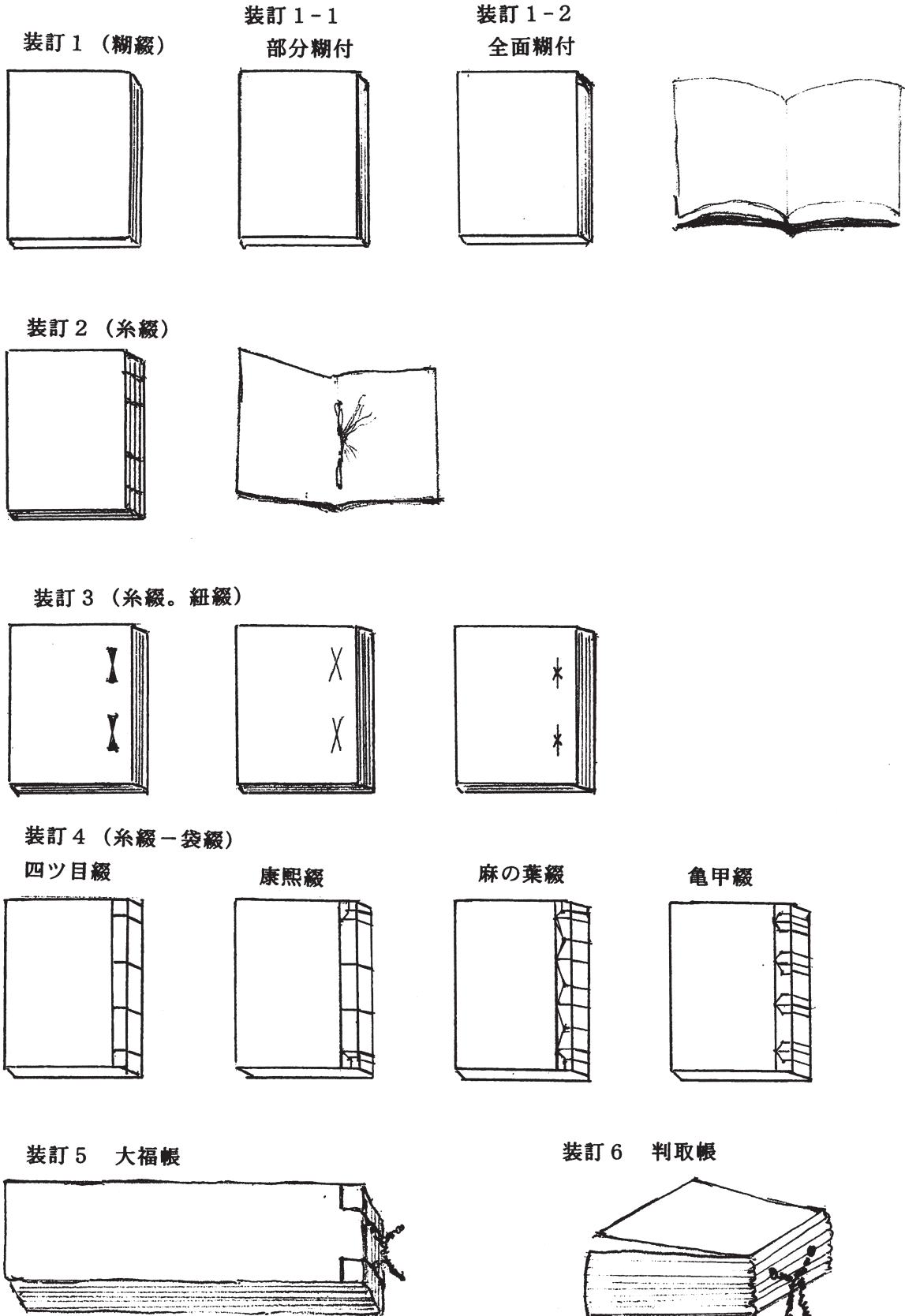
## I. 序論—和装資料装訂の名称について—

和本の装訂名称に使用される用語には、粘葉装、綴葉装、列帖装、大和綴、結び綴等がある。しかし、各人各様の記述がされ、筆者により、同じ装訂<sup>1)</sup>の和本が異なる装訂名称で呼ばれたり、異なる装訂の和本が同じ装訂名称で呼ばれるという、「同名異装、異名同装」の論争<sup>2)</sup>が、昭和初期から現在まで続き混乱している。そこで、最初に和本（和装資料）の装訂方法を説明<sup>3)</sup>し、その上でこれまでの混乱の状況を時代順に個々にとりあげまとめ、つぎに混乱してきた原因を追究し、その解決案を1900年から2006年までに発行又は再版された単行本及び雑誌論文<sup>4)</sup>から、粘葉装、綴葉装、列帖装、大和綴、結び綴の説明の部分を抽出し、一方で和本の標準的な装訂方法を、外形の図版と装訂方法ともに示すことにより各人の説明に対応する装訂形態の図を時系列的にまとめ、一覧表に整理し、混乱の原因と問題点を集約し、解決策として各装訂に対して現在どのような装訂名称が相応しいかを提案する。

### 1. 和装資料の装訂名称の種類（種別）

和装資料の装訂名称の説明に使用されている用語を列挙すると、仮綴じ、本綴じ、紙縫り綴じ、糸綴じ、線装本、四ツ目綴じ、粘葉綴、綴葉綴、列帖綴、大和綴、胡蝶綴、結び綴じ、袋綴じ、(魚鱗綴)、和装資料には、大福帳（綴）、判取帳（綴）などがある。粘葉装、綴葉装、列帖装、大和綴、結び綴、大福帳、判取帳として例示される和装資料の外装を示したものが表1である。ここでいう和装資料とは、和本と和装の帳面を指す。(アンダーラインは筆者が記入)

表1 和本の外形 (装訂図)

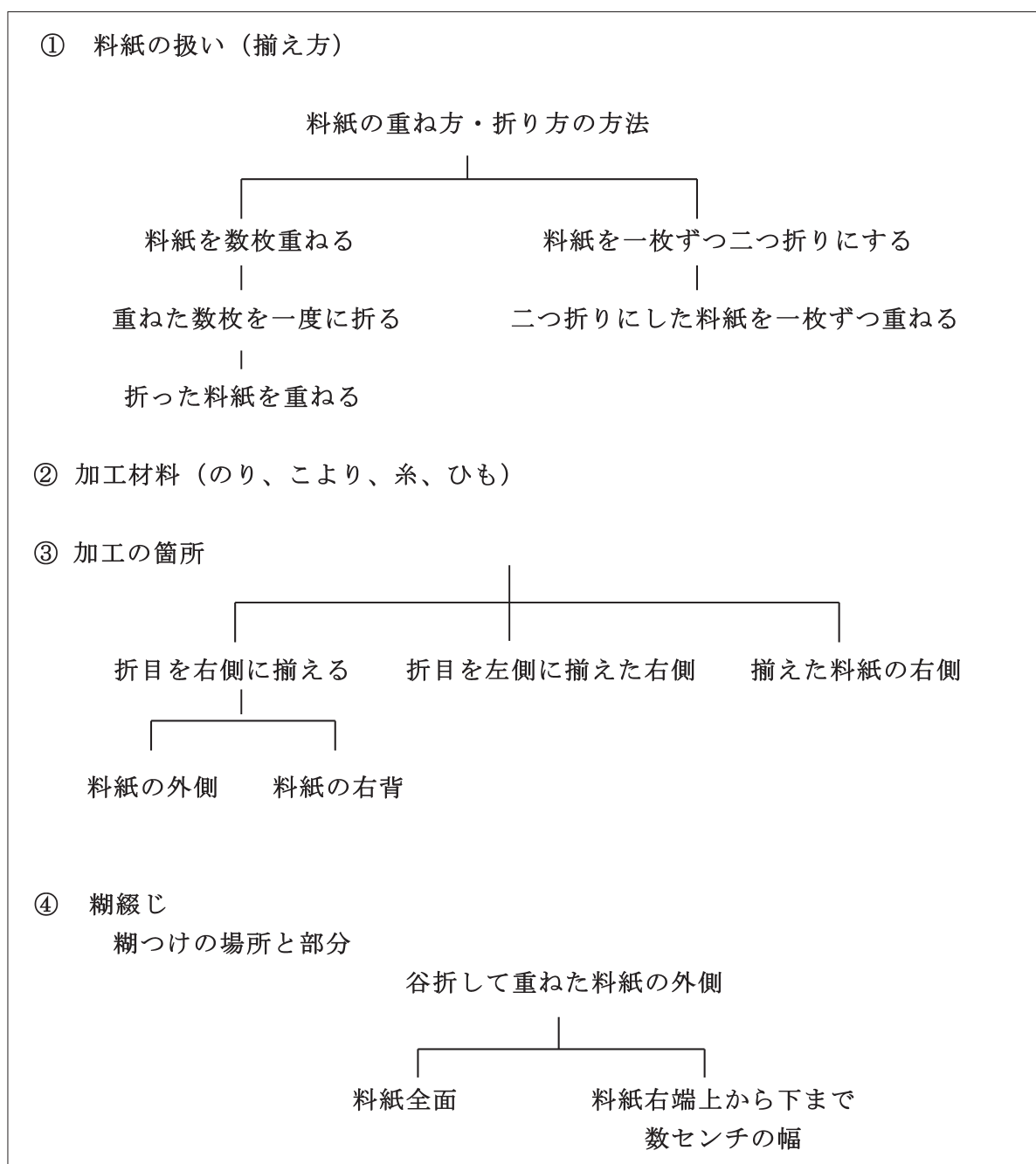


(本稿では、装訂1から3について論じるが、比較・検討のため装訂4から装訂6も示した。)

2. 和装資料の装訂の流れ（製作工程）

一冊の和装資料を作るには、いくつかの製作の工程があり、その工程途中の資料に装訂名称が付けられている場合もある。その工程の流れを、①料紙の扱い ②加工材料 ③加工箇所 にわけ概略を示すと次のようになる<sup>3)</sup>。

表2 装訂工程（手順）





### 3. 和本の制作工程（装訂方法）の概略

表1の装訂1～6に示した外装の和本の製作工程は以下の手順でつくられる。和本の装訂を、加工材料（糊、糸、紐）と料紙の加工方法（折り方、重ね方、糸の綴じ方）により区別して説明する（筆者定義）。表1に示した和本の装訂製作工程は概ね次のような手順でつくられる。基本となる料紙の加工法、使用材料、加工位置は次のようになる<sup>3)</sup>。各装訂とも表紙の説明は省略している。装訂2の場合の表紙の付け方に特徴のある和本が多く見られる。

装訂1：料紙を一枚ずつ、料紙の長いほうの辺の中央から二つ折りにして、その折目を右側に揃え、各料紙の外側どうし（山折の部分）を折目にそっての数センチ（5、6ミリから約1センチ）の幅で上から下まで糊付けをして次々に貼りあわせて冊子にする装訂方法。外側全面に糊づけするものもある。（糊付け部分には 1. 数センチの幅 2. 3～4ミリの幅 3. 背 4. 折目に近い部分 5. 折目の外側 6. 非書写面を全面の別がある。）

装訂2：料紙を複数枚重ねてから料紙の長いほうの辺の寸法の中央から二つ折りにして、それをいくつか重ねた後で、折目を右側に揃え、折目の背のところ（山折部分）に刃物で切れ目（穴）を四箇所あけ、糸で綴じる装訂方法。なかに多くの糸が残っているのが特徴である。

装訂3：料紙を重ね、（重ね方は、折らずに一枚ずつ重ねてもよいし、一枚ずつ料紙の中央から折った料紙を重ねてもよい。このとき折目が左右どちらにきてもよい。）表紙の右側の端・上・下から数センチのところに穴（二つ、四つ、八つの場合がある）をあけて、数本の糸または紐等で綴じる装訂方法。外側に結び目が出ており、なかに房の如くしている、装飾的なものがある。

装訂4：料紙を一枚ずつ、長い方の辺の真ん中で二つ折りしたものを、折り目を左に揃えて重ね合わせたものの右側を糸でとじる装訂方法を袋綴じといい、綴じ穴が4つのものを四ツ目綴じという。和本の多くはこの装訂で作られている。

装訂5：料紙を一枚ずつ、短いほうの辺を真中で二つ折りしたものを複数枚重ね、折り目を手前にして重ね、もう一度長い方の辺を真ん中で二つ折りにしたものを、複数つくり、真中にくる折り目の背に二つの穴をあけ（折目をさけてとじる）糸または紐で綴じる。そして、真中の折り帖を挟んで、表紙になる前後の折り帖に4箇所に穴をあけ中綴りする装訂（方法）。

装訂6：料紙の処理は装訂5とおなじであるが、綴じ方が図4と異なる装訂（方法）。（判取帳）料紙の長さが図5とくらべ短い。

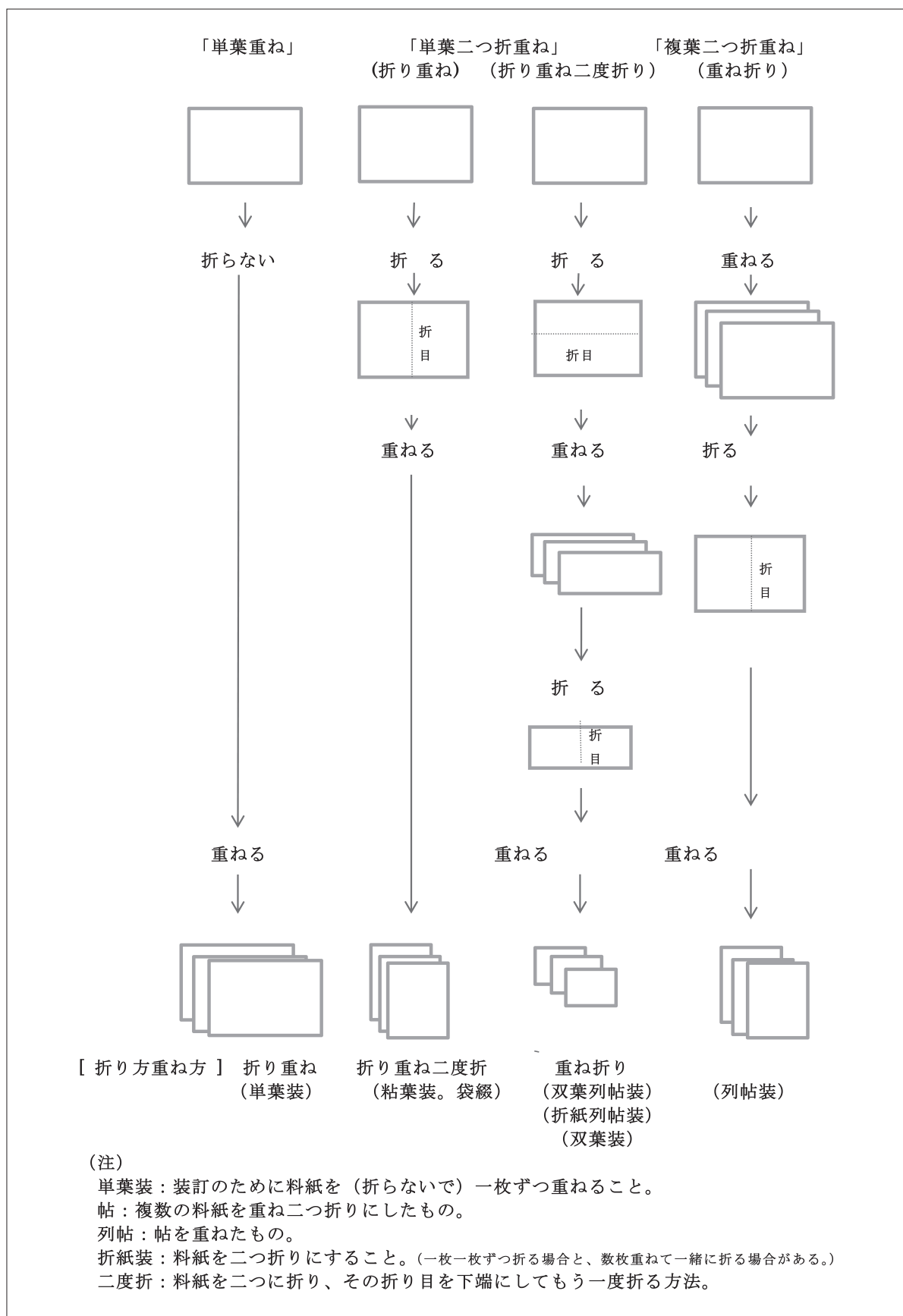
装訂に使用される「材料」と「装訂名称」の関係を表3、料紙の扱いを表4に示した。



表 3

使用材料	使用材料による 綴の名称	装訂名称	綴の形態 (外形)
糊	糊 綴	粘 葉 装	装 訂 1
紙縫り	紙縫綴	本 綴 仮 綴 下 綴	
糸	糸 綴	線 装 本 四ツ目綴 列 帖 装 綴 葉 装	装 訂 4 装 訂 4 装 訂 2 装 訂 2
紐 (糸を束にして 使用することも ある。)	紐 綴	大 和 綴 結 び 綴 大 福 帳 綴 判 取 帖 掛 取 り 帳 綴	装 訂 3 装 訂 3 装 訂 5 装 訂 6 (装訂 5)

表4 料紙の扱い (料紙の折り方・重ね方)



## Ⅱ. 和本の装訂名称に関する諸説

20世紀（1925～2006）に公表された和装資料名称に関する文献<sup>4)</sup>から、各氏の「粘葉装」、  
「胡蝶装」、「綴葉装」、「大和綴」、「結び綴」等の装訂方法の説明を年代順にとりあげ、表1の  
各装訂図と照合し論証を試みる。比較検討に必要なため、これ以外の装訂名称の袋とじ、四ツ  
目綴じ、大福帳、判取り帳などもとりあげた。

### 1. 和田維四郎<sup>5)</sup>

和田維四郎の『訪書余録』によれば、装訂は次のように説明がされている。

書籍の原始的形状は卷子なりしか、卷子は卷舒に便ならざるにより

イ、冊子      ロ、摺本   折本

の二種を作るに至れり、此中、冊子は普通の閲讀に供せらるる書籍に持ひられ、折本は展  
讀に便なるの點に於て多く經卷に用ひらるることとなれり、宗版の經史、佛典を見ること  
漸く繁きに及びて、我國の印刷業復興し、書籍の装幀も亦彼に學び、冊子、折本は爰に其  
常形となりて現今に及へり、然れども古風を欽ふの人は猶卷子の装幀を捨てず、儒、釋の  
二典に此装を用ふるもの尠からず、而して冊子に在りては猶左の区分あり。

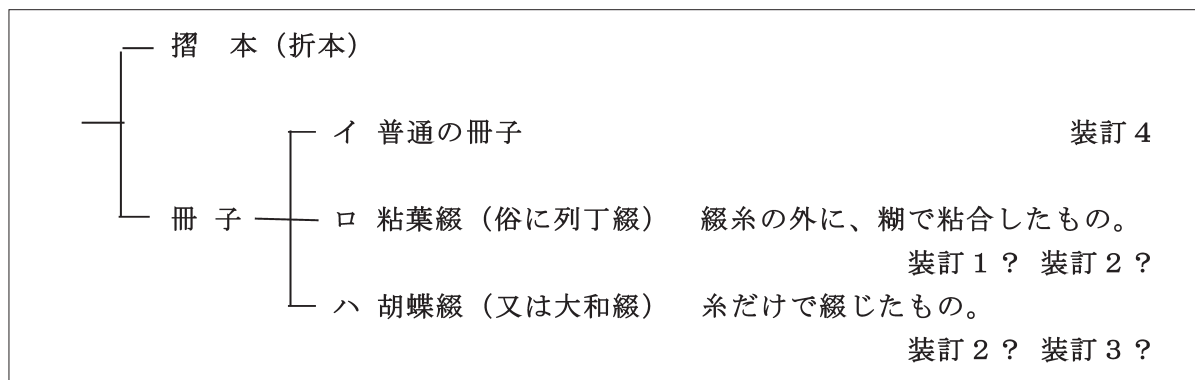
イ、一面にのみ印刷し之を二つ折とし、糸にて綴りたるもの      普通の冊子

此種のものに於いては其折目に標題又は丁數を記せるもの多し、之を版心又は俗に柱といふ  
ロ、厚紙を用ひて両面摺とし綴じ糸の外に尚糊を用ひ粘合せるもの   粘葉綴   俗に列丁綴  
といふ

ハ、粘葉綴と同様なれど、糊を用ひず、単に糸のみにて綴りたるもの   胡蝶綴   又は大和  
綴といふ

往時の佛書中高野版には粘葉綴が多く、歌集には大和綴を用振ること多し以上記せる所  
の外冊子の一種とも看るべき横に長く綴りたる帳あり、奈良朝の頃より用ひられたるもの  
にして多く日常の記録を記するに用ひられたり。

これを表にして示すと次のようになる。



装訂材料(糊・糸)による区別で、装訂方法には言及していない。「普通の冊子」とあるのは、「袋綴、四つ目綴本」を指すものであろう。粘葉綴に「綴糸の外に尚糊を用いる」とあるので、どのような装訂なのか推定できない。また、「粘葉綴」を「俗に列丁綴」として同じ装訂のものと定義している。糸による装訂(方法)で胡蝶装は大和綴と同じ装訂のものとしている。綴じ方の説明がないためどのような外形なのか決めることができない。この和田の説明について、山岸徳平は、「書誌学序説」でつぎのように述べている<sup>6)</sup>。

この説明のうち、粘葉に「綴糸の外に糊」とあるのは、粘葉装がまだ本当に領解せられていない証拠である。粘葉装に糸を加えたものが、もしあるとすれば、それは、粘が弱ったか、きかなくなって、紙がばらばらになりかけた時に便宜上、糸を用いて綴じたのである。本当の粘葉装は、絶対に糸を用いない。

山岸が指摘したように、「和田は、「元装は粘葉装(装訂1)であったものを後年糊の劣化のため、料紙が乱れたので糸で綴じなおした。」状態の和本をもとに説明したための誤りと推測する。ハの胡蝶装(又は大和綴)を糸だけで綴じたものとしているので、この説明では、装訂2なのか、装訂3なのかそれとも装訂2・3を含めたものか、それ以外の装訂なのか判別がつかない。

## 2. 吉澤義則<sup>7)</sup>

吉澤によれば、次のように述べている。

「粘葉は支那では又蝴蝶装とも呼び<sup>8)</sup>。「粘葉即ち蝴蝶装は、一種の糊を用ひて、紙の折目の処を外側で一枚々相接縫して一冊となし、表紙を付けたものである。(中略)粘葉はデツチョウと読む。我が國では之を訛ってレツチョウと云ひ、列帖の文字を当ててゐる。我が國の所謂列帖には二種類ある。

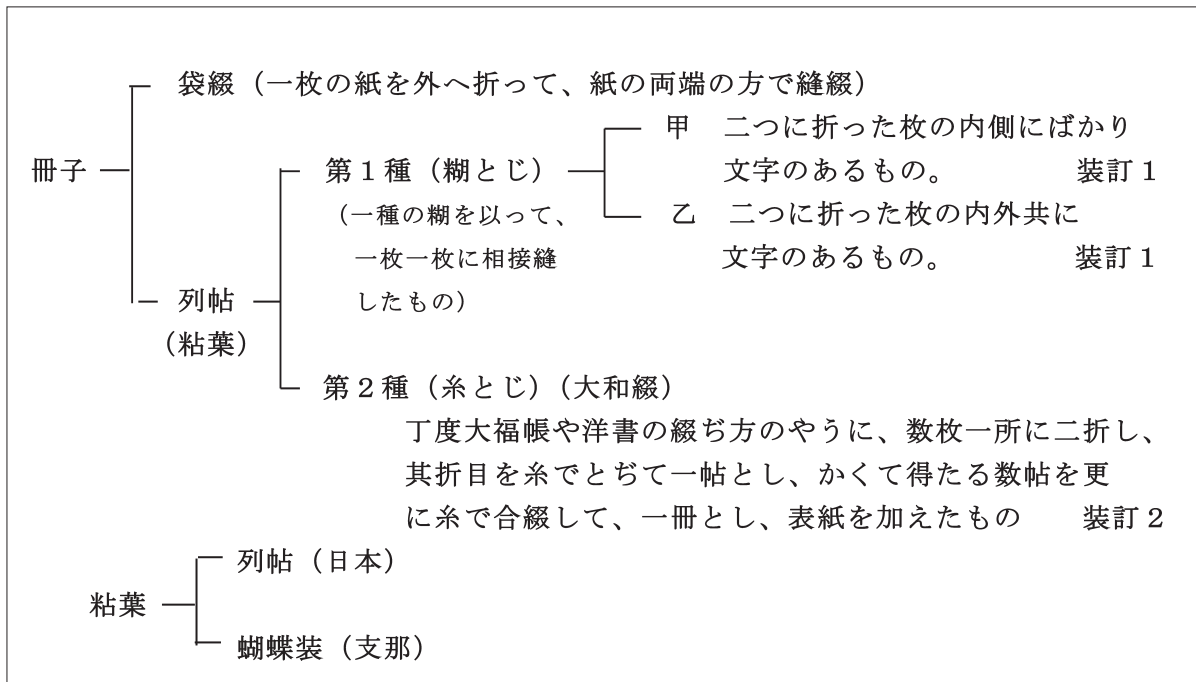
- 一、支那に於けると同じく、一種の糊を以って一枚々に相接縫したもの。
- 二、丁度大福帳や洋書の綴ぢ方のやうに、數枚一所に二折し、其折目を糸でとぢて一帖とし、かくて得たる數帖を更に糸で合綴して一冊とし、表紙を加えたもの。

第一種は更に次の二種に分けられる、

- 甲、二つに折った枚の内面ばかり文字のあるもの。
- 乙、二つに折った枚の内外ともに文字のあるもの<sup>9)</sup>。

列帖第二種は大和綴といふ、(中略)其の名を大和綴といふこと、和歌國文に關する書物に限られて漢書佛書には持ち用ひられぬ事、及び其の工案の性質から考へて、王朝時代に於ける大宮人が、第一種の列帖から案出した装潢では無からうかと思ふ<sup>10)</sup>。一枚の紙を内に折って、その折目の方で縫綴したのが、粘葉で、これを外へ折って、紙の両端で縫綴したのが袋冊子である<sup>11)</sup>。

これを表にすれば次のようになる。



吉澤は、唐本の装訂名称と日本の装訂名称に区別をつけ、「摺本」・「粘葉」を中国の呼び方、「折本」・「列帖」を日本の呼び方としている。糊綴も糸綴もともに列帖（粘葉＝蝴蝶装）といい、大和綴はその下位区分に置いている。大和綴の名称を、「王朝時代に於ける大宮人が、第一種の列帖から案出した装潢ではなからうかと思う<sup>12)</sup>」とあり日本で考案されたものであるとしている。表1の装訂2に該当する。説明文から推定すると、この「列帖」は紙の折り方と重ね方からの名称である。第2種は「丁度大福帳や洋書の綴ぢ方のやうに<sup>13)</sup>、とあるが、料紙の折り方と重ね方は同じであるが、大福帳（装訂4）の綴じ方とは明らかに異なる。洋書の綴じ方にも種々あり、どの綴じ方を指すのか不明である。しかし、加工位置を折目とし、糸綴としているので装訂2の装訂のことと判断できる。なお、装訂3に該当する装訂の説明はない。

### 3. 田中 敬<sup>14)</sup>

田中は次のように述べている。

〔粘葉〕紙を一枚毎に本文を内にして両折し、その折目の外面に二三分の廣さに糊をつけて次第に重ね合はせたもので、(中略)空白面と文字面とが交互に来たり、(中略)二枚あけては文字を読みまた二枚あけては文字を読むように出来て居る。(中略)写本になると必ずしも文字が内面のみにあるとは限らない<sup>15)</sup>。

〔大和綴〕紙を数枚重ね一緒に二折して一折帖となし、斯くして得たる折帖数帖を更に糸で合綴して一冊に仕上げたものを大和綴といひ、吉澤博士が列帖第二種として分類して居られるものである<sup>16)</sup>。「其の名を大和綴といふこと国歌国文に関する書物に限られて漢書仏書には用ひられぬ事及び其の考案の性質から考へて王朝時代に於ける大宮人が第一種の列帖から案出した装潢ではなからうかと思ふ。昔は知らず今日に於いては日本にも支那に

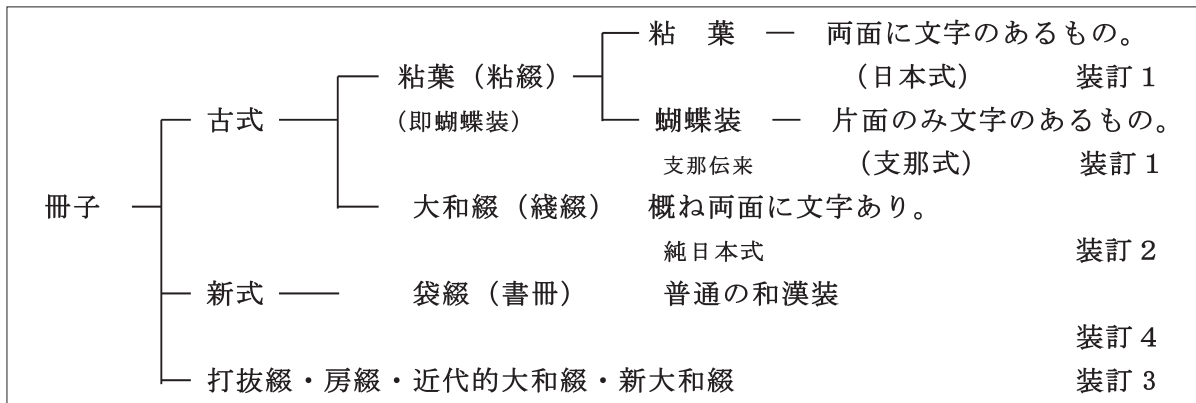
も此の種の属する漢書は見当たらない<sup>10)</sup>』といふことである。この「和歌国文に関する書物に限られて」の語を厳密な意味で用ふるのは稍穩当を欠く嫌が内ではないが、概して此の方面の書物に多いこと、並びに漢籍に此の装潢が適用されて居ないことだけは断言して差支なからう<sup>17)</sup>。蝴蝶装の名稱は支那傳來のものであり、且つそれは粘葉の別名に外ならざること、之に反して大和綴は純日本式のもので蝴蝶装とは全然異なるものであることが判明したであらうと思ふ。今之を最も簡明な形で表示すると、即ち

粘葉 (即蝴蝶装)	糊	粘綴	——	支那傳來
大和綴	絲	綫綴	——	純日本式

となるのであって、現時多數の人士によつて誤用されて居る蝴蝶装又は蝴蝶綴の語は、其の實大和綴を指せるのが多いのであるから、其等は訂正せれるべきであると信ずる<sup>18)</sup>。粘葉の中で粘葉と蝴蝶装とを区別することは全く私の一私案であつて、斯く区別することの当否に就いては更に篤と考へて見たいと思ふが、今は姑く便宜に従つて此の区分を立て置く。列帖の文字を粘葉の代用として用ひられたこともあるが、粘葉の音の単なる訛傳ならばそんな宛字を用ひる必要は毫もない。帖を列ねる意味で大和綴のみを指すものとするならば一理はあり、私も旧著「図書学概論」に於ては列帖を此の意義にのみ限定して用ひたいと述べて置いたのであるが、併しながら、国音の近き所から粘葉と混同する虞れがあるから、寧ろそんな紛らわしい語は用ひない方が良からうと思ふ<sup>19)</sup>。粘葉又は蝴蝶装から区別していふ大和綴の特色は、絲を以つて数個の折帖を連綴する点にあること上に屢々論じた所であるが、この大和綴には更に其の綴方に特徴がある<sup>20)</sup>。大和綴の名稱は其の正に復し、打抜綴は他の名稱で呼ぶことにしたいと思ふ。房を外に露はして飾りとするのが此の綴方の主眼点であるから房綴などどんなものであらうか。(中略) 近代的大和綴とか、新大和綴とか、其の他適當の語を冠して本来の大和綴と判然區別のつくようにすることが必要であると思ふ<sup>21)</sup>。

田中敬は、「蝴蝶装の名稱は支那傳來のものであり、且つそれは粘葉の別名に外ならざること、之に反して大和綴は純日本式のもので蝴蝶装とは全然異なるものである<sup>22)</sup>。」と述べ、図2の装訂を、純日本式の装訂なので、大和綴であるとしている。糸綴と對比させた「粘葉」と下位区分の「粘葉」の関係が分かりにくい。料紙の使用面により装訂名を区別しているが、装訂方法にはなんら関係がないので、装訂名称として使用するには問題がある。以上を一覧表にすると次のようになる。

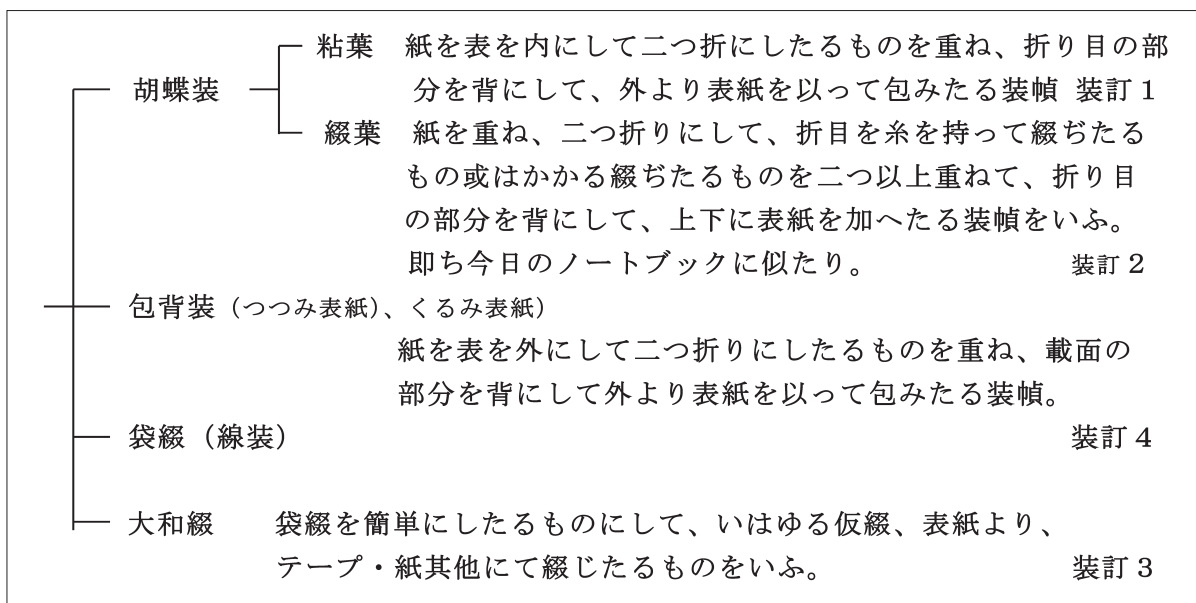




「凡例」に「上巻は大和綴、下巻の末の方は純然たる蝴蝶装である」とあり、田中の大和綴は装訂 2 に、蝴蝶装 (片面のみ文字) は装訂 1 に該当する。実物標本を示していることにより、他者の著作が、言葉と図による説明でははっきりしないところもあるが、その不備をこの書物は補っている。蝴蝶装は粘葉の異名とし、唐本の記述にその根拠を求めて論を展開している。最後に日本式 (和本) と支那式 (唐本) とを区別しているののでわかりやすい。装訂 3 の装訂について、打抜綴・房綴・近代的大和綴・新大和綴として、装訂 2 と区別することも提案している。しかし、「関西地方の商家に備付けてあった大福帳は全く此の綴方であった<sup>23)</sup>」とあるのが、料紙の折り方重ね方は同じであるが、綴方は異なるので、同一の装訂ではない。

#### 4. 日本書誌学会制定術語<sup>24)</sup>

本制定用語によると、総称して「蝴蝶装」と言ひ、糊で附けるのを「粘葉 (デツテフ)」と言ひ、糸を使ったものを「綴葉 (テツテフ)」と言ふ<sup>25)</sup>。広義の場合には「蝴蝶装」、狭義の場合には糊を附したものは、「粘葉」、糸を使ったものは「綴葉」それから別に「大和綴」を考える<sup>26)</sup>。「胡蝶装」と「蝴蝶装」の使用が混在している。一覧表にしたのが、下表である。





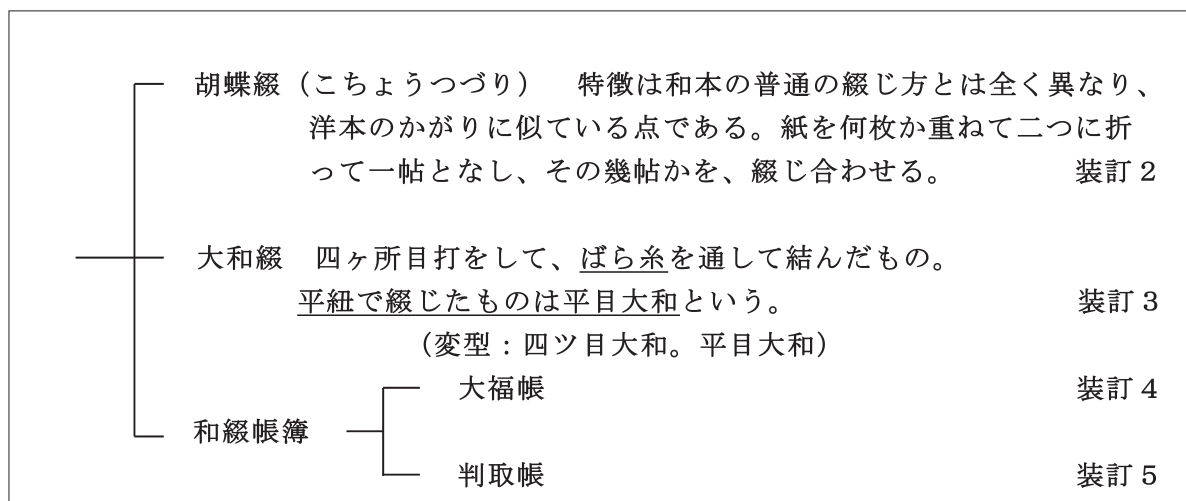
「綴葉」の用語は新造語である<sup>27)</sup>。「綴」の字の使用についての根拠は示されていない。読み方を「綴葉」を「テツテフ」と決めている。しかし「綴」の音には「てい」があり、「ていよう」とすれば、その後の誤用を防げたのではないか。また、「綴」はとじるという意味を持つ一般用語であるので、特定の装訂名称に使用するのはふさわしくない。四ツ目綴じと比較して説明しているためか、大和綴を「袋綴を簡単にしたものにして」とあり、袋綴の装訂に限定して使用される（確かに多くの装訂3の装綴の料紙のあつかいは袋綴であるが）ように説明があるが、ここでいう大和綴は料紙の折り方と綴じる箇所が決まっているだけであるので袋綴に限定されない。大和綴の説明に装訂の途中の綴方（仮綴）と本綴（完成品）としての大和綴とを区別していないのも問題である。装飾的な綴じ方について言及していない。粘葉と包背装の説明では、紙を二つ折りする際、紙の表を内にするか外にするかの区別の説明しかしていない。専門分野の用語（専門家向けの）制定ためか、前提とされる用語の説明が省略されているので、定義のあいまいさを避けがたい。「折目を糸を以て綴じたる<sup>28)</sup>」とあるが、綴じ方に言及していない。「今日のノートブックに似たり<sup>29)</sup>」とあるが、加工箇所の折目と加工材料糸を使用するのは同じであっても、かがり方が異なる。類似のノートブックのかがりは糸が両端に及ぶ。この「ノートブック」の用語が後の説明に安易に使用され誤解を生む一原因となったと考えらる。

## 5. 上田徳三郎<sup>30)</sup>

上田によれば、

胡蝶綴（コテフツヅリ）この綴じ方は、現在では殆んど行われぬ珍しいものであるが、自分の見習い時代には、胡蝶綴（こちょうつづり）と言って、ちょいちょい手がけたものである。この名前については、学者の方で色々説があるようであるが、ここでは自分の教わったままに呼んでおく。胡蝶綴の特徴は、和本の普通の綴じ方と全く異なり、洋本のかかりに似ている点である。即ち、紙を何枚か重ねて二つに折って一帖となし、その幾帖かを、図のような方法で綴じ合わせるのである。図のように首尾の一帖に、布を巻いて表紙とした古い本をよく見かけるが自分の若い頃手がけたものは、首尾に、中味と同じ紙、または変わり紙を一枚だけ二つ折りしたものを持って行って表紙とし紅白の綴じ糸を使って、初めの処に必ず、図のような蝶々むすびをしたもので当時は、この蝶々むすびから胡蝶の名があるのかと思っていたくらいである。その後、色々古い本を見た処では、この蝶々はないのと、あるのとある<sup>31)</sup>。大和綴（又は単に大和）というのは、図のように四ヶ所目打ちをして、ばら糸を通して結んだものである。四つ目大和という変わり型もあり、平紐で綴じたものは平目（ひらめ）大和という<sup>32)</sup>。大福帳 和綴帳簿には、いわゆる大福帳、判取帳の二様式がある<sup>33)</sup>。

以上を表にしたのが次の表である。



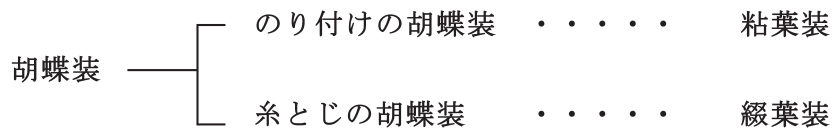
この書籍は装訂方法が図入りで詳細な説明がされている。1941当時、和本の製本職人が使用していた装訂用語と装訂方法の一端を知ることができる。大和綴も「四つ目大和」という変わり型の図示もある。胡蝶綴を「こてふつづり」とよみを付している。「考証によれば大和綴(とじ)」なり<sup>34)</sup>。粘葉(でってふ)又胡蝶装については、田中敬の「粘葉考」をそのまま踏襲している<sup>35)</sup>。上田は、「くさり(和装合本形式)」や「大福帳」・「判取帳」の帳面の綴じ方にも言及している<sup>36)</sup>。他の文献で、装訂2の装訂の例に「大福帳」・「判取帳」を上げている場合もあるが、料紙の重ね方は同じでも、綴じ方が異なることがこの図で明らかにすることができる。また、胡蝶綴の読み方をコテフツヅリとしている。「つづり」としているのは上田だけである。他には見られない。

## 6. 長澤規矩也<sup>38)</sup>

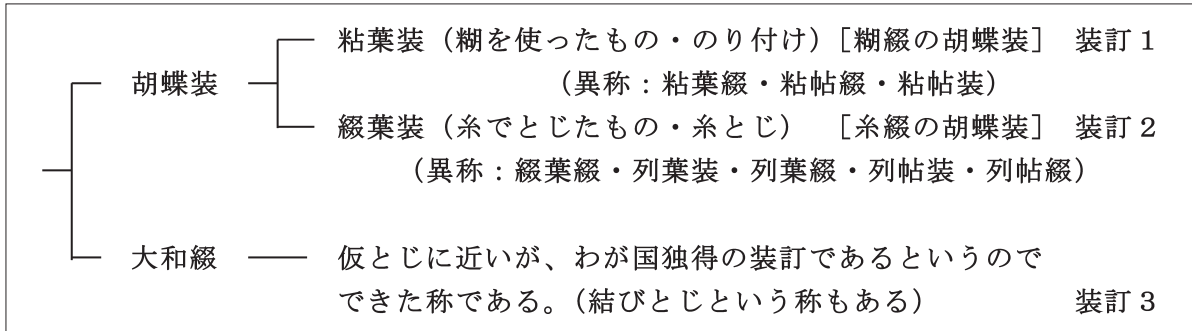
長澤によれば

蝴蝶装とは、本文用紙を中表に二つ折にしたものを重ね、折りめの外に糊を付け、書物の二倍強(紙の一倍強)の大いさの厚紙の表紙を二つ折にした、その背の部分の内側に、折った本文の折目を糊付けにしたものである。(中略)一枚ずつ開ければ、ちょうど蝴蝶のひるがえるようであるから蝴蝶装とよび、蝶装本とも粘葉ともよばれる<sup>39)</sup>。平安後期ごろから、紙を数葉重ねて二つ折りにし、折りめを糸でとじ、あるいはかようとじたものを重ね、折りめの部分を背にして、前後に表紙を加えたわが国独自の二種の蝴蝶装を生じた。古人は前二種との間になんらの区別をしないで、蝴蝶装・粘葉・鉄杖閉などよんだが、われわれはこれを綴葉装または、列葉装とよんで区別する<sup>40)</sup>。蝴蝶装は胡蝶装とも書き、蝴蝶綴(胡蝶綴)・蝶装・蝶装本ともいう。(中略)従来、鉄杖閉・粘葉・粘帖・粘牒(でつちょう)などとも称せられたが、蝴蝶装に、上記のように、糊を使ったものと、わが国特有のノートブック式のものがあり、総称と特称とを同一称呼でよぶのは紛らわしいから、先年、日本書誌学会で熟語を制定したとき、胡蝶装を総称とし、糊を使ったものを粘葉装、糸でとじたものを綴葉装とよぶこととした。粘葉装の異称を粘葉綴・粘帖綴・

粘帖装とし、綴葉装の異称は綴葉綴・列葉装・列葉綴・列帖装・列帖綴とした<sup>41)</sup>。本文用紙の書写面あるいは印刷面を中表に折ったものを積み重ね、折り目から表紙でくるみ、その際、折り目と表紙との間をのりづけにしたもの<sup>42)</sup>。胡蝶装の一種である綴葉装（列帖装）を示したもので、この装訂は、粘葉のように一枚ずつではなく、数枚を重ねて糸でくり、それを重ねて、上下に表紙を加えたものである<sup>43)</sup>。普通の胡蝶装は、紙を中表に折り、これを重ねて、折り目をそろえて、折り目の外にのりをつけ、厚手の紙を表紙にして、背からくるむようにする。（中略）用紙を何物か重ね、これをいく重ねかにして、糸でとじる。これを綴葉装又は列帖装とよぶ。近代のノートブックの下とじと同じようなことになる。これに対して、普通の胡蝶装を、わが国での旧称のように粘葉装とよび、胡蝶装を、粘葉装と綴葉装との総称とすると、広狭両義の呼称が整然となる<sup>44)</sup>。帖装本は卷子本に比べて、開いてみるには、はるかに便利であるが、折ったまま長くおいておくと折り目切れがする。そこで、どうせ切れるものなら、いっそ、初めから切って置いたらと言う考えが出てくるのは当然である。しかし、ただ切っただけでは本文がバラバラになってしまうので、背からくるんだ表紙の背部の内面に、本文ののど —とじ目に近い方の余白— の部分の折り目をのり付けにした装訂、言い換えれば、変形の旋風葉の外側の折り目を切り離れた形の装訂が胡蝶装である。さらに見方を一変し、（胡蝶装を）造本の課程過程から見ると、本文を中表に折り、これを重ねて、その背の部分を、外からくるんだ表紙の内面にのり付けにしたものである<sup>45)</sup>。（綴葉装）我国の歌集や物語の伝授書には、本分を一枚一枚折らずに、数枚ずつ重ね、今日の普通のノートブックのように、一括ずつ糸でかがり、数括をつづり合わせる、一種の胡蝶装が多い。この場合、表紙は前後別々で、背からくるんではない。この装訂を我々は綴葉装とよぶが、国文の人たちの中には、列帖装又は列葉装と呼ぶ人がある。この場合用紙は厚く、両面に書かれたり、刷られたりしている。列帖を粘葉（デッチョウ）のなまりと解く人もある。綴葉装に対し、のり付けの胡蝶装は我国では粘葉装とよばれることが多い。粘葉装は「デッチョウ」と読む。この場合も用紙が厚いので、両面に書写文は印刷される。しかし、総称と、その中に含まれる一部分の呼称が同一であることはまぎらわしいので、私は、粘葉装と綴葉装を分け、この二つの総称を胡蝶装とよぶことにしている<sup>46)</sup>。大和とじは仮とじに近いが、わが国独得の装訂であるというのでできた称である。包背装や線装本の下とじのままに近いともいえる。そういう意味では、シナにも全然ないとはいえない。表紙の上からテープやひもなどでとじ結んだもので結びとじという称もある<sup>47)</sup>。大和綴とは表紙の上から、テープやひもなどでとじたもので、結び綴じともいう<sup>48)</sup>。本邦に発達した大和綴（結び綴）を示す。下とじした上に、数本の糸を合わせたり、テープなどでとじて前表紙で結ぶ<sup>49)</sup>。大和とじ（結びとじ）包背装や線装本の下とじのままのような装訂で、それだけなら清代にもあるが、わが国では、ひもや数本の糸を使って、特殊の装訂にしているので、この称が出た。明治・大正期には、写真帖によく採用された装訂である<sup>50)</sup>。



以上をまとめると下記のようなになる。



日本書誌学会の決定に従った見解。種々の異称にも言及している。「装」と「綴」の名称が混在している。長澤は「この装訂を我々（書誌学者）は綴葉装とよぶが、国文の人たちの中には、列帖装又は列葉装とよぶ人がある。この場合用紙は厚く、両面に書かれたり、刷られたりしている<sup>51)</sup>。大和とじの名称の根拠を「わが国独得の装訂であるというのでできた称である<sup>52)</sup>。」としている。また、「結びとじ」の名称を大和とじの別称としてとりあげている。「大和とじ」と「とじ」を仮名表記している<sup>53)</sup> <sup>54)</sup>。これに対し、『書誌学序説』では、大和綴、結び綴<sup>55)</sup>と書き、『図解図書学 図書学参考図録入門編』でも、大和綴（結び綴）と表記している<sup>56)</sup>。同じ人でも、このように表記が異なる。

## 7. 川瀬一馬<sup>57)</sup>

川瀬一馬著『日本書誌学概説』によれば、

粘葉装は、料紙を半折して、之を重ね合わせ、各紙の折目の外側の部分を粘（のり）付けにし、其れに表紙を加えたものであって、表紙の加へ方も旋風様とおなじである。即ち、旋風様の料紙の小口を切り放すと粘葉装の形となる。（其の広げた形が、蝴蝶の風に翻る如くであるといふので『蝴（胡）蝶装』ともいふ。）但し、粘葉は料紙の表裏共に文字を認めるのが常であるから、通例旋風葉よりも料紙が厚手である。（中略）之に「列帖」等の文字を用ひるのは、粘葉の宛字もしくは転訛である。（中略）綴ち糸を用ひない粘付けのみの装訂である<sup>58)</sup>。我が国に於いて粘葉装から工夫せられた『綴葉装』と称する一種の糸綴ちの装訂がある。即ち若干の料紙を重ねて半折一括りとし、数括りを重ね合わせて表紙を添へ、糸でかぶったもので、（中略）古人はこの綴ち方を粘葉装と区別せずに『鉄杖閉（てつちょうとち）』等と呼んでゐるが、事実別称が無くては不具合であるから、今茲には、さきに日本書誌学会で筆者（川瀬）等が考案した新造語『綴葉装』を用いる事とした<sup>59)</sup>。『大和綴』も亦、其の名称の語る如くに、我が国で工夫せられた装訂で、料紙の



重ね方は、綴葉の様にしたものもあるが、通例は袋綴と同様な重ね方をして、紙捻等で下綴ちを行った上に、前後に表紙を添えて、右端を二箇所結び綴ちにしたものである<sup>60)</sup>。

『日本書誌学用語辞典<sup>61)</sup>』によれば

粘葉装（でつちょうそう）：料紙を半折して重ね合わせ、各紙の折り目の外側を粘（のり）付けにしそれに表紙を加えたもので、その表紙の加え方は、前後を続けて一枚で包んだものもあり、又、背のみ別紙（或るは絹）で包み、前後各別に表紙を加えたものもある。これは平安朝以来、帖装としては最も多く行われている装訂で、発達の順序から言えば、旋風葉（せんふうよう）から転じたものである。即ち、旋風葉の毎折の折目を切り離すと粘葉装の形となる。これは折帖なる旋風葉とは違い、紙の表裏に文字を認めることができて好都合である。従って粘葉装は旋風葉よりも料紙が厚手である。恐らく粘葉は表裏ともに書写することができる料紙の利用度と、継ぎ紙の煩わしさ等のため旋風葉から工夫せられたものであろう<sup>62)</sup>。

[綴葉装]：これは粘葉装（でつちょうそう）から我が国で工夫した装訂で若干の料紙を重ね合わせて半折一括りとし、数括りを重ねて、これに表紙を添え、糸でかがったもので、そのかがり糸の結びのたれを多量に内部のかがり止めの部分に残しているのが特徴である。西洋式のノートブックと似た綴じ方である。表紙は最初の括りの表側と、最後の括りの裏側とに若干折り曲げて添附し、その僅少の折目を本文の括りに綴じ込んである。古人はこの綴じ方を粘葉装と区別して「鉄杖閉（てつちょうとじ）」と呼んでいるが、事実別称がなくては不具合であるから、昭和の初年、日本書誌学会で、筆者等が考案した新造語「綴葉装」を用いることにしたのである。（中略）なお又、古く「列帖（れつちょう）」と称する語が見えるが、これは「粘葉」の転訛かとも考えられ、或いは今ここに言う糸綴じの装訂を、帖（料紙を折り重ねたものを帖と見て）を列ねてある形と称したのかもしれないと思う。さすれば、本来、この「列帖」も適当な称呼と言い得る<sup>63)</sup>。

[むすび綴]：大和綴と同じ。「大和綴」を見よ<sup>64)</sup>。

[大和綴]：唐綴（袋綴）の対。わが国で始められた装訂の一様式で、料紙を綴葉装のように重ねて綴じているものもあるが、通例は袋綴と同様な重ね方をして、紙捻（こより）等で下綴ちを行った上に、前後に表紙を添えて、右端を二箇所、結び綴ちにしたものである。この綴じ方は簡便にできるので今でも身の書き物などを綴じる際、リボンなどを用いて装訂している<sup>65)</sup>。

表にまとめると次のようになる。

粘葉装	料紙を半折して、之を重ね合わせ、各紙の折目の外側の部分を粘（のり）付けにし、其れに表紙を加えたもの。 「蝴（胡）蝶装」ともいう。	装訂 1
綴葉装	若干の料紙を重ね合わせて半折一括りとし、数括りを重ねて、之に表紙を添へ、糸でかぎつたもので、かぎりの糸の結び目を多量に括りの中に残してあるのが常である。	装訂 2
大和綴	古く結び綴ともいふ。其の名称の語る如く、我が国で工夫せられた装訂で、料紙の重ね方は、綴葉の様にしたものもあるが、通例は袋綴と同様な重ね方をして、紙捻等で下綴ちを行った上に、前後に表紙を添えて、右端を式箇処結び綴じにしたもの。	装訂 3

川瀬は大和綴の別称を「結び綴」としている。そして、料紙の重ね方にこだわらず、糸の掛けかたを問題にしている。「むすび綴じにしたもの」なる記述が、どのような結びかたなのか具体的にわからない。結ぶという動詞に綴じという名詞をつけて、一般の用語として使用している。粘葉の説明に、「料紙を半折して、之を重ね合わせ、各紙の折目の外側の部分を粘（のり）付けにし、其れに表紙を加えたもの。」とあるが、折目の外側のどれくらいの部分の糊付けするのかわかっている。大和（綴）について、料紙の重ね方について複数あることをいっている。つまり、料紙を重ねて折ったものと、折ってから重ねたものがあることをいっている。

## 8. 橋本不美男<sup>66)</sup>

橋本によれば

粘葉装（でつちょうそう）：旋風仕立にいたって、はじめて紙を連続するほかに、背を固定するために糊を使用した。しかしながら、旋風葉一帖の書籍ははじめからおわりまで本紙が連続している。この左側の小口（こぐち）の、袋になっているところを切り落とせば、完全な“冊子本”となるわけである。すなわち、“粘葉装”と呼ばれる装幀であり、糊付けによる装幀の完成した形態ともいえよう<sup>67)</sup>。はじめての“冊子本”（さつしぼん）が粘葉装である。（中略）この“粘”は“黏”の通字であり、ねばる・のり・つぐなどという意味をもつ。“葉”は前述したように、紙を意味する。すなわち、字義からいっても、紙を糊で綴じた装幀という意味である。もともと粘・黏の音は、“デン・ネン”であり、葉の“エフ”と熟して、デンエフ・デツテフと発音表記されたのであろう。通行かなづいかいではデツチョウと表記される。綴じ方は簡単である。中国書籍の製本でいうと、書写され、あるいは印刷された紙面を内側にして、紙をたてに真二つに折る。その折った紙の外側、すなわち中国産の紙は薄様であるから（片面書写・印刷）

書写・印刷されてない方の、折り目にそって約一センチ幅ぐらいに糊づけをし、つぎつぎに重ねていくとこの装幀になる。(中略) この粘葉装を展読すると、平面に開けられる見開き(一枚の紙の表)と、糊しろの部分約一センチ弱が見開きの中央にたち、左右のページが開かれた部分(紙の裏と裏とをはりあわせた箇所)とが交互にくりかえされるわけである。これを中国の粘葉装でみると、平面の見開きの箇所、すなわち一枚の紙の表の部分に書写・印刷された本文があり、次の中央からつけ出たつぎあわせた見開きの箇所は、両面とも白紙となるわけである(この白紙の部分が、“折本”“旋風装”の場合の裏に該当する)。従って、丁をくるごとに、書写・印刷面とが、交互に出てくることになる。ところが国産の紙(紙屋紙など)は、原料の関係で厚薄両用に漉ける。高麗(こま)の紙(朝鮮産)も同じであった。(中略) 外国産・国産の厚薄色とりどりの紙を使って作品を書き、これを粘葉装に仕立てると、両面書写・片面書写があいまじり、ページをくっていくと、見開き書写の所、見開き白紙の所、右側白紙、左側白紙とバラエティーに富んだページ展開がくりひろげられる<sup>68)</sup>。『通雅<sup>69)</sup>』によると「粘葉 謂蝴蝶装」と記している。『通雅』だけではなく、『疑耀』巻五など、明代の漢籍によると、粘葉装は“蝴蝶装”と一般に呼ばれていたようだ、これは、粘葉装を一枚ずつあけていくと、丁度、胡蝶が羽根をひらいたようになるからであろう。とくに、接続部の両面白紙の部分は、中央にうきあがった部分をふくめて、白い胡蝶がとまっているような状態に見える<sup>70)</sup>。

列帖装(綴葉装): わが国独自の製本方法であり、しかも糸綴じの“冊子本”の始めと思われる。(中略) 数枚の紙を重ねて、それに縦に二つ折りにし(これを一帖と見よう。粘葉装は一枚ずつ折る)、この幾折か(数帖を)をお互いに糸で接続して(粘葉装は糊で)、表紙をつけ、一冊の冊子にしたてる装幀法である<sup>71)</sup>。この列帖装も、山岸徳平博士が提唱されたテクニカル・タームであり<sup>72)</sup>、これと同じ概念を規定する日本書誌学会の用語である綴葉装とともに、一般に周知固定されてはいない<sup>73)</sup>。

大和綴: 組紐あるいは数本よりあわせた糸を綴じ糸とし、表紙の右側に綴じ糸があらわれる装幀、現存の書籍としては、蓬左文庫臓河内本『源氏物語』のような体裁のものを“大和綴”とみることにしたい。この場合は、粘葉装・列帖装・袋綴の区別はなく、綴じられた上に表紙をつけ、表紙の右側約一センチぐらい内側のところを、立てに穴を二つずつ上下にあけ、紐とか、数本の糸とかで飾り綴じをしたものである<sup>74)</sup>。

以上を一覧表にすると、次のようになる。



粘葉装（糊綴じ）	紙面を内側にして、紙をたてに真二つに折る。その折った紙の外側、書写・印刷されてない方の、折り目にそって約一センチ幅ぐらいに糊づけをし、つぎつぎに重ねていくとこの装幀になる。	装訂 1
列帖装（綴葉装）（糸綴）	数枚の紙を重ねて、それに縦に二つ折りにし（これを一帖と見よう。粘葉装は一枚ずつ折る）、この幾折か（数帖を）をお互いに糸で接続して（粘葉装は糊で）、表紙をつけ、一冊の冊子にしたてる装幀法である。	装訂 2
大和綴	組紐あるいは数本よりあわせた糸を綴じ糸とし、表紙の右側に綴じ糸があらわれる装幀、綴じられた上に表紙をつけ、表紙の右側約一センチぐらい内側のところを、立てに穴を二つずつ上下にあけ、紐とか、数本の糸とかで飾り綴じをしたもの。	装訂 3

「たてに真二つ」、「縦に二つ折り」同じ方法に異なる表記のため混乱する。列帖装の糸の綴じ方について説明がない。大和綴の説明にある「飾り綴じをしたもの」の表現がどのようなものか説明がないため、示された図版で確認するにとどまる。装訂3の装訂（大和綴）について、「粘葉装・列帖装・袋綴の区別はなく、綴じられた上に表紙をつけ、表紙の右側約一センチぐらい内側のところを、立てに穴を二つずつ上下にあけ、紐とか、数本の糸とかで飾り綴じをしたものである。」とある。

## 9. 山岸徳平<sup>75)</sup>

山岸によれば

粘葉の粘は黏の俗字で、中国の音は泥炎反であるから「デン」である。「ねばりつく」とか「ねばりつける」の意味を持っている。葉（エフ→ヨウ）は木や草の葉であり、千載万葉の時には、世とか代の義であるが、書冊の場合には、紙の一葉二葉などと言って、一枚二枚と同義に用いられている。（中略）とにかく、「黏葉」即ち「粘葉」は「デンエフ」であるが、日本人には「デンエフ」から「デンテフ→デッコウ」と呼ばれるようになった。けれども粘葉とか黏葉の字面は、見慣れないから親しみにくい。またその音からも、或いは実物を殆ど目にしなかった人々の推測からも、誤解せられて、文字も粘葉としたり列葉としたり、列帖や列帳などと軽々しく使用せられたりもした。そんな点でその真相を一層不明確にしてしまった<sup>76)</sup>。粘葉装の発生は、折本から考えて行くと便利だと思う。折本の、背に相当する部分の折目の外側に一センチ程度に糊を付けて相互に密着させる。そうすれば、背の部分は固定して揺れ動くことがなくなり、全体は「袋綴り」、即ち広く用いられている木版本の装幀に類して来る。ただ「袋綴り」は、背に接近した端、即ち本では右端を、糸で綴るかまたは紐か何かで綴る。粘葉装は糸も紐を用いず、糊だけで相互を密着させる。更に、腹の部分に相当する折目をそれぞれ切開する。背部を密着させ腹部を切開し

た結果、出来上がった本を開いて見ると、文字の無い部分は白紙となっている。この白紙の部分が、折本時代の裏面にあたることは言うまでもない。折本時代の表、即ち文字の書いてある部分を開くと、蝴蝶が羽根を広げているような感じが与えられる<sup>77)</sup>。蝴蝶装とは粘葉装の別名であり、両者は異名同物なのである。とにかく、本を開けば蝴蝶が羽を広げたようになるが、背部は一枚一枚の紙を折って重ねてあるだけだから、各葉の折目がそろって重なって見える<sup>78)</sup>。実際に、この装幀の本をつくるには、版本でも写本でも、つぎの如き順序を取ればよい。まず、紙の文字のある部分を内側にして、一枚一枚を二つ折りにする。この二つ折りにしたものを、幾枚でも重ねて、糊で各葉の折目の両側半センチほどを密着させる。その結果は、今述べた折本の時の如くに、背の部分は、紙の各葉の折目が重なって一枚一枚見られる。腹の部分は、文字のある部分を、即ち紙の表に当たる部分を開けば、蝴蝶が羽を開いたようになる。紙の裏にあたる部分は、折本の腹部を切開した時のように、白紙となっている。これが粘葉装であり蝴蝶装なのである。後にはその裏面つまり白紙の部分にも、文字を書写したり印刷するものも出来た。紙を経済的に用いるためである。この蝴蝶の字面は、日本では蝴蝶も用いるが、一般には胡蝶装と書いている。「蝴」は胡の字でよかったのに、蝶が虫であったから誤った類推作用によって、胡に虫偏をつけたのである。故に、蝴の字は蝴蝶の時以外に、使い道の無い字である<sup>79)</sup>。胡蝶装は、粘葉装と同物異名である。けっして別種のものではない。故に胡蝶装は、いわゆる大和綴(綴帖装)とは、全然別である。大和綴にあっては、胡蝶装とはならない。胡蝶装はまた、決して糸を用いない。もし、糸を用いたものがあるとしても、それは原装ではない。装幀が損傷した場合、紙が離ればなれになったのを、後で糸で綴ったに過ぎないのである。けっして原装ではない<sup>80)</sup>。「大和綴」と言う場合の一つは、紐とかリボンのような物で、装飾的に、本の右側の端の部分を、中央で一ヶ所か、又はやや上の部分とやや下の部分との両箇所を綴じたものを言う。このリボンとか紐の類は、大体は装飾である。本当の綴じは、表と裏との表紙以外を(または巻首巻末の表紙も共に)別に丈夫にしっかりと「こより」とか「糸」で下綴じをする。この下綴じをしたものの、表(前)と裏(後)とに表紙を付け、リボンとか平紐などで、前記の如くに綴じる。これは「結び綴」とも言われるが、「大和綴」と一般に称せられている<sup>81)</sup>。漠然と「大和綴」と称せられている装幀の中には、大福帳式のものもある。この大福帳式のことを、日本書誌学会では、かつて、「綴葉装」と、命名して、前記の如く、リボンや紐の類で、装飾的な綴じ方をした大和綴と、区別したこともあった。(中略)それにしても、卷子本とか粘葉装とか胡蝶装と言う名称に対立して、大福帳式の装幀にも、何らかの名称があって然るべきと思う。わかりやすい名称としては、大福帳装などが最も適切かも知れない。(中略)紙の一帖一帖を綴ったものであり、また、各帖を並列して綴ったものであるから、「綴帖装」とか「列帖装」とでも称せられるべき装幀となる。「綴葉」と言うよりも「綴帖」もしくは「列帖」が、実際に即した名称であるかと思う。けれども、そのような名称は、まだ広く使用せられておらず、漠然と「大和綴」と言われていては、書誌学的に不便である。「綴帖」や「列帖」が使い慣

れなければ、わかり易いように、「大福帳装」と称してもよいかと思う。これを胡蝶装の如くにいいならわすのは、誤解なのであるから、それは修訂を要することである。さて、大福帳は日本独特のものであるから、いわゆる「大和綴」即ち「大福帳装」も日本で創意工夫せられた装幀と考えられる<sup>82)</sup>。

これ等を一覧表にすると次のようになる。

粘葉装（糊綴じ）	紙面を内側にして、紙をたてに真二つに折る。その折った紙の外側、書写・印刷されてない方の、折り目にそって約一センチ幅ぐらいに糊づけをし、つぎつぎに重ねていくとこの装幀になる。	装訂 1
列帖装（綴葉装）（糸綴）	数枚の紙を重ねて、それに縦に二つ折りにし（これを一帖と見よう。粘葉装は一枚ずつ折る）、この幾折か（数帖を）をお互いに糸で接続して（粘葉装は糊で）、表紙をつけ、一冊の冊子にしたてる装幀法である。	装訂 2
大和綴	組紐あるいは数本よりあわせた糸を綴じ糸とし、表紙の右側に綴じ糸があらわれる装幀、綴じられた上に表紙をつけ、表紙の右側約一センチぐらい内側のところを、立てに穴を二つずつ上下にあげ、紐とか、数本の糸とかで飾り綴じをしたもの。	装訂 3

山岸は、大福帳式の装訂を詳細に説明しているが、その説明から図2の装訂にはほかならない。「最後の帖に至って、その糸を内側にしっかりと結ぶ<sup>83)</sup>」このような装訂は装訂2以外にない。大福帳式の装訂なら、装訂5のように、糸は外で結ばれる。山岸は「大福帳式のを、日本書誌学会では、かつて「綴葉装」と命名して<sup>84)</sup>」とあるが、料紙の重ね方だけで命名しており、綴じ方については、言及していないので、山岸の説明は不十分である。綴葉装とは異なる綴じ方をする大福帖式の装訂方法を、日本書誌学会が綴葉装に含めた曖昧さを指摘し、綴帖装とは別に大福帖式を挙げている。「帖」と「葉」糸の掛けかた（綴じ方）の相違を示して、「大和綴」即ち「大福帳装」とあり、また、漠然と「大和綴」と称せられている装幀の中には、大福帖式のものもあると説明にはあるが、287頁の図版、図16では、表1装訂3・5・6が大和綴になっている。装訂2の図は掲載されていない。

#### 10. 池上幸二郎・倉田文夫<sup>85)</sup>

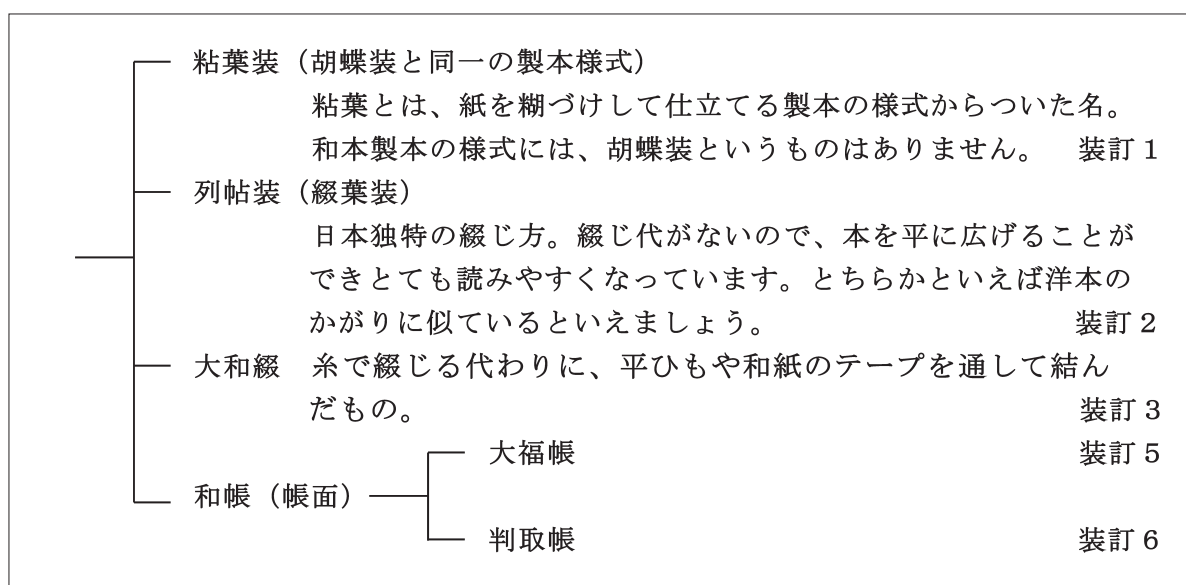
池上・倉田によれば、

粘葉装：粘葉装はまたの名を胡蝶装（こちょうそう）といって、卷子仕立から、帖仕立（ちょうじたて）に移行するときに行われた、製本様式の一つです。粘葉装の“粘”は、ねばる・のり・つなぐという意味をもち、“葉”は紙を意味するところから、紙を糊で綴じた装幀といえます。帖仕立の初めとして、また製本の簡易さもあって広く普及しました。平安・鎌倉・室町の各時代を通じて行われ、春日版高野版・比叡版・五山版など

の仏典の装幀に多く見られます。近年になっても粘葉装と胡蝶装が異なる製本様式だと思っている人もいますが、これはまったく同一の物です。粘葉とは、紙を糊づけして仕立てる、製本の様式からついた名であり、胡蝶装とは、製本された本の姿を蝶に見立ててつけた名でしょう。胡蝶装は糊牒装（こちょうそう）の誤りではないかと思えます。和本製本の様式には胡蝶装と言うものはありません。胡蝶はすなわち、粘葉装と思ってください<sup>86)</sup>。列帖装（綴葉装・てつちょうそう）日本独特の綴じ方で、平安時代に発達した。物語・謡本・歌集・刀剣書などに多く見られ、大変優雅で趣があります。綴じ代がないので、本を平らに広げることができ、とても読みやすくなっています。どちらかというと、洋本のかかりに似ているといえましょう。綴じ方については一本の針を使って綴じる場合と、二本の針を使って綴じる場合がありますが、私は、古書修理の経験から、一本の針で綴じています。これは過去何十年間に行った古書修理のすべてをこの方法で修理したからです<sup>87)</sup>。

大和綴：糸で綴じる代わりに、平ひもや和紙のテープを通して結んだの<sup>88)</sup>。

以上の説明を一覧表にすると次のようになる。



装訂工程が示されており、紙のそろえ方から、綴じ方まで詳細な装訂工程が説明と図・写真で解説されている。実際に和本の装訂を業とした人の説明なので、装訂工程が非常によくわかる、他氏の説明が文字だけや略図だけのため、隔靴搔痒の感がぬぐいきれないし、説明に従って装訂をしてみると、再現出来ないことがあり、疑問点も多かったがこの本ではそのようなことはない。大福帳、判取帳についても紙の折り方重ね方、綴じ方も詳細な図がある。これを見れば、粘葉装、列帖装（綴葉装）、大和綴、大福帳、判取帳の製作工程は一目瞭然である。大福帳と判取帳を帳面として扱って、本とは別の扱いをしているが和装資料の装訂という視点から同時に検討すべきことであると考えられる。



11. 遠藤諦之輔<sup>89)</sup>

遠藤によれば、

粘葉装：帖仕立の最初の形であり、中国より渡来した最初の装幀であると思います。この製本方法は、書誌学上では胡蝶装とも言われております<sup>90)</sup>。「粘葉装」とは中国から伝来した装幀方法で、和紙を使用する場合は白紙または料紙の両面に書写または印刷されたものを二つ折りにして重ね、折り目にそって三分（約1センチ）位糊付けをし、表紙を付けたものです<sup>91)</sup>。糊付部分が、蝶の羽を広げた形に見えることから「胡蝶装」と言われることもある<sup>92)</sup>。胡蝶装：これは綴葉装（てつよう）とも言われています<sup>93)</sup>。「胡蝶装」はこれも料紙の両面に書写または印刷されたものを、こちらは数枚（五枚位）重ねて二つ折りにして一帖とし、これを数帖重ね、折り目で糸で綴じる装幀方法を言います<sup>94)</sup>。それぞれの帖のいちばん内側になる部分は折り目まで開いて蝶が羽を広げた形に似、そうでない部分は羽を閉じた形に似ていることからつけられた名称<sup>95)</sup>。この「胡蝶装」という名のおこりは、それぞれの帖を二つおりにして綴じると、一番内側になる部分は折目まで開いて蝶が羽を広げた形に似、そうでない部分は羽を閉じた形に似ることからつけられたものです<sup>96)</sup>。大和綴：紙釘装につく装幀であり、最初は仮綴程度のものが室町時代頃より表紙を付け、後に厚紙を芯にした表紙を付けて綴じ上げたものである<sup>97)</sup>。本紙の中綴の状態は和綴の時と同じですが、本綴の場合は綴じる部分が多少広がっているのが特徴である。この大和綴の本綴は、組紐（平紐）か太白を数本使用して綴じる<sup>98)</sup>。表に示すと次のようになる。

—	粘葉装（書誌学上では胡蝶装とも言われる）	白紙又は料紙の両面に書写または印刷されてものを二つ折りにして重ね、折り目に沿って三分（約1センチ）位糊付けし、表紙をつけたもの。[糊綴じ]	装訂 1
	胡蝶装（綴葉装とも言われる）	料紙の両面に書写または印刷されたものを、こちらは数枚（五枚位）重ねて二つ折りにして一帖とし、これを数帖重ね、折り目で糸で綴じる装幀方法。[糸綴じ]	装訂 2
	大和綴	普通は、袋綴と同じようにつくった料紙を下綴した後、組紐か太白を数本使用して綴じる。[糸・平紐]	装訂 3

粘葉装、胡蝶装の綴じ方がそれぞれ、図で示されている<sup>99)</sup>。（粘葉装）「この製本方法は、書誌学上では胡蝶装ともいわれています。」とあり、著者（遠藤）の勤務した書陵部の職人の間で書誌学上とは装訂名称を異にしていることを述べている。大和綴、粘葉装、胡蝶装の名称の混乱について、「現在でも（古文書補修六十年の発行年1987年）でも、かように混乱は甚だしい状態なのです<sup>100)</sup>。」とある。1924（大正13）年から、宮内庁書陵部で「繕書手」として蔵書の補修に携わった37年を含め、60年以上和装本の装訂に携わった現場の職人が書いたもので説明が具体的でわかりやすい。

## 12. 藤井隆<sup>101)</sup>

藤井によれば

粘葉装 (デッチョウソウ) : 料紙を一枚一枚表を内側にして二つ折りにし、折目を揃えて、折目の外側を上から下まで、折目から五、六ミリの中で次々に糊付けして重ねたもので、表紙は、表 (前)、裏 (後) 一枚の表紙で包んだものと、表裏二枚の表紙のものとあり、表裏二枚の中にも、背のみ別の布や紙で包んだものがある。

粘葉装には、料紙の内側、即ち紙の表の面のみに字を書く内面書写と、料紙の表裏の両側に字を書く両面書写の二つの書写様式がある。粘葉装も中国で始められた装訂であって、一般的に、内面書写は料紙が余り厚くない場合で、料紙が厚い場合は両面書写したのであろう。(中略) 胡蝶と昔いっているのは、粘葉装のことなので、粘葉装を胡蝶装といっても正しいのであるが、古くから江戸時代などでも、胡蝶装は誤解、誤用されてきているので、今日では使用しないほうが良いと考える<sup>102)</sup>。

綴葉装 (テツジョウソウ) [列帖装 (レツジョウソウ)。綴帖装 (テルジョウソウ)] : 料紙を数枚から十枚程、一括して中央から二つ折りしたもの (これを一折という) を二折以上幾折か重ね (最低二折必要) 表裏それぞれの表紙を加えて、各折の折り目の外側から、三ミリ程刃物で切込んで (錐の丸い穴のものもあるが綴葉装は鳥の子のような厚手の斐紙が原則なので、本を開いた時、切込みの穴であると外側程大きく綴糸が動くことが可能で、開き易い為である) 穴を四つあけ (中略) 綴糸の長さを見計らい、糸の両端に針をつけ、上二つ下二つそれぞれ別の糸で、最初の第一折の内側から綴じ出し、第二折の対応する穴へ通し、第二折の内側で糸を擦り違わせて、逆の穴から糸を外側へ出し、対応する第三折の穴へ通す。(中略) 繰返して最終折の内側まで行き、二折の場合と同様にして飾り結びとする。この装訂は、当然両面書写となるので、料紙は鳥の子が普通である。鳥の子のような両面書写用の紙を作り出した日本独自の装訂で、平安時代中期から行われた。「綴葉装」の名は、昔この装訂を「鉄杖閉 (テツチョウトジ) と呼んでいた所から、長澤規矩也、川瀬一馬の両氏を中心に、昭和初年作られた新用語であるので、帖を列ねた形とみられる所から「列帖装」の用語を用いる人も多い。この装訂のことを従来、「胡蝶装」と呼んだ人が多く、未だにそう呼ぶ人があるが、(最近はさすがに余りいなくなった) 前項にも触れた通り、「胡蝶装」は「粘葉装」のことであるから誤りである<sup>103)</sup>。

装訂2の装訂のうち、料紙の処理の仕方で、双葉綴葉装という装訂2の変型についても説明をしている。

双葉綴葉装 : 「双葉列帖装」、「双葉綴帖装」ということも可能であろう。(中略) 普通の薄い楮紙などを料紙として、先ず一枚一枚を全部、表面が外側になるように、紙の縦の寸法の真中から、横に二つ折にする。後は折目を下方にするだけで、この二つ折になった紙 (折目で続いているが、それ以外は二枚一双葉—というわけである) 鳥の子の一枚と思って、普通の綴葉装の通りに扱えば良い<sup>104)</sup>。

袋帳綴：近世の商家の判取帳（受取帳）や大福帳に最も多いものである。この装訂を「判取帳」という人もあり、また「大福帳仕立」と言う人もある。だがこの装訂は判取帳だけでなく、大福帳も多いし、大福帳はまた後述の長帳綴も多いので、何れにしても、判取帳や大福帳は装訂の名としては不相当と考える。この装訂は「双葉綴葉装」と紙の扱いは全く同じで、綴じ方も殆んど同じであるが、書背の方の中央に、ぶら下げる為の紐を付ける。（中略）「双葉綴葉装」の少し変形したものといえよう<sup>105)</sup>。「大和綴」はその名の如く、日本独自の装訂で、料紙の扱いは「綴葉装」と同じものと、「袋綴」と同じものがあるが、何れかを問題にしない。とにかく、表と裏の二の表紙を加えて、右端（書背）から一、二センチの所に、縦に二つずつ計四つの穴をあけ、（二つの穴の間隔は自由で、一センチから数センチに及ぶ）上二つと下二つとを巾のある紐、或いは何本かの糸を合わせたもので、表表紙の方で結び、飾りになるように、少し余して結び切りにしたものである<sup>106)</sup>。

長帳綴：料紙を一枚一枚縦の寸法の真中から横に細長く二つ折りにしたものを折目を下方にして重ねて揃え、右端を「明朝綴」式に四つ目綴にしたものである。「袋綴」に近いが、折目を下にして、折目の反対側はなく、折目と直角の右の端を綴じるので、「双葉綴葉装」「袋帳装」同様、三角袋式となる<sup>107)</sup>。

表にまとめると次のようになる。

	粘葉装 (胡蝶装)	料紙を一枚一枚表を内側にして二つ折りにし、折り目を揃えて折り目の外側を上から下まで、折り目から五、六ミリの巾で次次に糊付けして重ねたもの。	装訂 1
	綴葉装 (列帖装) (綴帖装)	料紙を数枚から十枚程、一括して中央から二つ折りしたものを二折以上幾折か重ね、各折の折り目の外側から、三ミリ程刃物で切込んで穴を四つあけ、糸で綴じる。	装訂 2
	双葉綴葉装 袋帳綴 (判取帳、大福帳仕立)		装訂 4、装訂 5
	大和綴	そろえた料紙の右端一、二センチの所に、縦に二つずつ計四つの穴をあけ、上二つと下二つとを巾のある紐、あるいは何本かの糸を合わせたもので、表表紙の方で結び、飾りになるように少し余して結び切りにしたもの。	装訂 3
袋綴	一枚一枚の両氏を中央から表を外側にして縦に二つ折りしたものをかさねて、折り目と反対の紙の端に近い所を二か所下綴をしたものに、表紙を付したもの		

綴葉装の綴糸のかけ方の説明が、非常にわかりにくい。この説明では再現できない。説明に「三ミリ程刃物で切込んで（錐の丸い穴のものもあるが綴葉装は鳥の子のような厚手の斐紙が



原則なので、本を開いた時、切込みの穴であると外側程大きく綴糸が動くことが可能で、開き易い為である)」この記述は道理にかなっている。他の文献では「穴」になっているが、この説明は実態にそっている。「飾り結び」、「結び切り」という用語が使用されているが、辞書に見当たらない用語である。この用語を使用しているのは藤井だけであるので、定義をして使用すべきである。大和綴の名称の根拠を日本独自の装訂としている。「袋綴」のほかに「袋帳綴」の用語が使用されている<sup>108)</sup>。大福帳と判取帳の説明では、紙の取り扱いは正しいが、綴じ方が殆んど同じとしている点で、藤井の説明は、装訂5(判取帳)の装訂に該当し、装訂4(大福帳)の装訂とはあきらかに間違っている。また、長帳綴なる名称を提唱しているが、「長帳綴」がどういうものか説明が不十分であり、大福帳との区別が、「料紙の折り方が同一」であること、「糸の掛けかた(かがり方)が異なる」ことによるもので、装訂4に示す大福帳である。料紙の処理方法と糸・紐のかがり方(糸のかけかた)とを組み合わせた表記方法にすれば、説明も簡単になる。

### 13. 中野三敏<sup>109)</sup>

中野によれば

粘葉装(でつちょうそう):印刷または筆写した本文用紙の一枚一枚を字面を中心にして二つ折りにし、折り目の外側に糊をつけて貼り合わせ、表紙を糊付けする製本の方法<sup>110)</sup>。

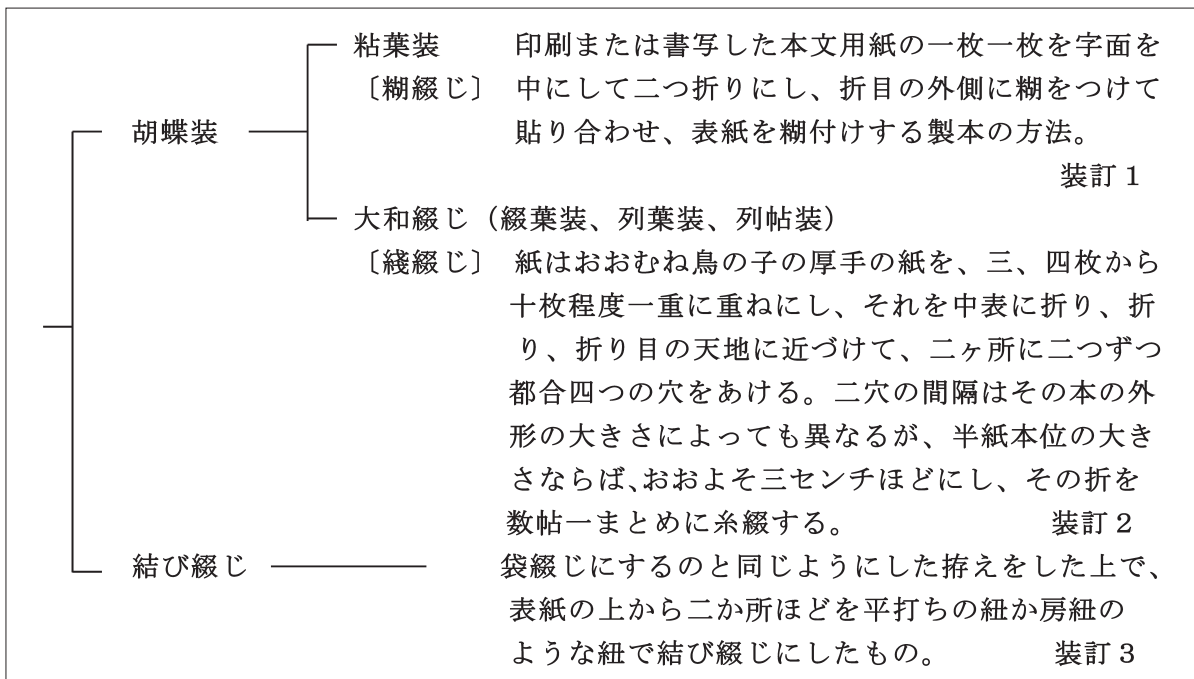
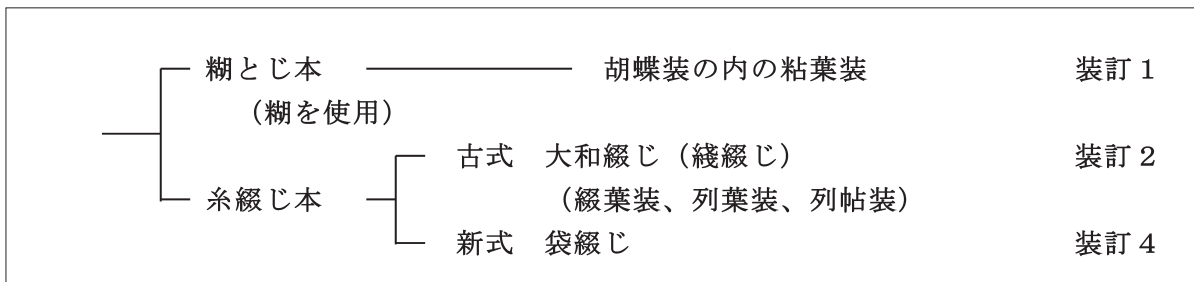
胡蝶装(こちょうそう):粘葉装と綴葉装(列帖装)との総称<sup>111)</sup>。

大和綴じ:この装訂に関しては、従来の解説類にかなりの混乱が見られる。まず、その呼称がまちまちで、「綴葉(てつちょう)装」「列葉(れつよう)装」「列帖装」等々さまざまな呼び方があり、そのため「胡蝶装」や「粘葉(でつちょう)装」など、全く種類の違う装訂法とも混同されているのが現状である。今拠るべき最良の成果は「胡蝶装と大和綴じ」の副題を持つ、田中敬氏の『粘葉考』(昭和七年・巖松堂古典部刊)の説であろう。そこで用いられた「大和綴じ」の呼称こそ、この装訂法に最もふさわしいものと思えるので、本稿ではその呼称に従い、以下、田中説に沿って記してみる。「紙を数枚重ね、いっしょに二折して一折帖(おりじょう)となし、斯くして得たる折帖数帖を、更に糸で合綴して一冊に仕上げたもの」というのが『粘葉考』の中で最も簡便に述べられた「大和綴じ」の解説部分の抜書きである。(中略)田中氏の説明は余りに簡略な部分を引用したので、若干わかり易く捕捉すると次の如くになろう。紙はおおむね鳥の子の厚手の紙を三、四枚から十枚程度一重ねにし、それを表に折り、折り目の天地に近づけて、二か所に二つずつ都合四つの穴をあける。(中略)その折を数帖一まとめに糸綴じをする。(中略)右の如きを「大和綴じ」と称するのは、この装訂法が、中国には絶えてみられないところからの呼称であり、きわめて妥当な称ではあるが、文献にこの呼称があらわれるのは、江戸中期の医官望月三英(明和六年没)の『三英随筆』に「大和とちと言書物有之、先は歌書古へ多く有、町人の覚帖も大和とち也」とあるのが初例であるらしい。「町人の覚帖」即ち大福帳も確かにこの綴じ方を用いるので、別に「大

福帳綴じ」の称もあるが、これでは俗に過ぎて、平安・鎌倉の歌書類の呼称にはふさわしくない。(中略)重ね折りせず、糊しか用いない「粘葉(でつちょう)装」と、音のうえて、まぎらわしい。(中略)私には「大和綴じ」の称が最もふさわしいように思う。但し、この後に述べる袋綴じの綴じ方の一つにも、従来「大和綴じ」と呼ばれる装飾的な糸のかけ方があり、恐らく山岸博士はこれとの混同を避けるためにおおむね漢籍に範を取る書誌学用語らしい別称を考えられたものであろうが、別称を考えるなら、むしろそれほど実例に出くわすことのない袋綴じの一種の方に別称を与えるべく、歌書・国文の書物にふさわしい「大和綴じ」の称は、我が国古典の代表的な装訂として残すべきであらう<sup>112)</sup>。

結び綴じ：袋綴じにするのと同じような下拵えをした上で、表紙の上から二か所ほどを平打ちの紐か房紐のような紐で結び綴じにしたもの。従来の書誌学用語で「大和綴じ」と称されていたものだが、本稿では前述の通り、列帖装(綴帖装)を「大和綴じ」と称すべく提唱したことゆえ、従来の「大和綴じ」をその俗称として用いられていた「結び綴じ」を称してみたものである<sup>113)</sup>。

これらを表にすると次のようになる。



装訂2については、田中敬「粘葉考」を踏襲した説明になっている。粘葉装を胡蝶装の下位の名称としている。結び綴じの説明は、「袋綴じにするのと同じようにした下拵えをした上で、表紙の上から二か所程を平打ちの紐か房紐のような紐で結び綴じにしたもの。従来の書誌学用語で「大和綴じ」と称されていたものだが、本稿では前述のとおり、列帖装（綴帖装）を「大和綴じ」と称すべく提唱したことゆえ、従来の「大和綴じ」をその俗称として用いられていた「結び綴じ」と称してみたものである<sup>113)</sup>。」とある。この装訂を大和綴じと称するのは、「この装訂法が、中国には絶えて見られないところからの呼称であり、きわめて妥当な称であるが、文献にこの呼称があらわれるのは、江戸時代中期である」と例を示している<sup>114)</sup>。歌書・国文の書物にふさわしい「大和綴じ」の称は、我が国古典の代表的な装幀として残すべきであろうとしている<sup>115)</sup>。結び綴じ（装訂3）について、料紙の処理を「袋綴じにするのと同じように」とある、また、使用材料を「紐」と限定しているが、料紙を袋綴じのようにはしない例や、使用材料も、ばら糸を使用している例もあるので、限定するには問題がある説明である。

#### 14. 櫛笥節男<sup>116) 117)</sup>

櫛笥は、

日本書誌学会は図2（本稿表1では装訂2に該当）の装訂名称について「新しい説が出ない限りは『綴葉装』を使用する」としているが、室町時代末期から江戸時代末期に至る史料から、大和綴が（図2）本稿の装訂（装訂2に該当）であると認識されていたことが明らかになった以上は、綴葉装という装訂名所を回避することを提言したい。また列帖装という名称も歴史的史料による裏付けはなく、吉澤氏の指摘のとおり粘葉装の転訛である可能性が高い<sup>118)</sup>。田中氏が列帖装と粘葉装は表音が近いところから混同する懸念があるとして、列帖装という装訂用語を使用すべきでないとする見解に賛同したい<sup>119)</sup>。」と述べている。

下図は、櫛笥が、吉澤・田中両氏に倣って所見を図にまとめたものである<sup>120) 121)</sup>。

┌──┐ ├──┐ ├──┐ └──┐	胡蝶装（糊綴・片面のみ文字）	櫛笥図3	・・・	装訂1-1	に該当
	粘葉装（糊綴）両面に文字あり）	櫛笥図3	・・・	装訂1-2	に該当
	結び綴（糸・組紐・紙縫綴）	櫛笥図1	・・・	装訂3	に該当
	大和綴（糸綴）	櫛笥図2	・・・	装訂2	に該当

「書庫渉獵」で櫛笥はつぎのように述べている。

粘葉装（胡蝶装）：冊子本の最初の装訂が粘葉装で、中国では蝴蝶装（我が国では、虫偏をとり胡蝶装と書く。）（中略）中国胡蝶装は我が国の粘葉装とは若干異なる。中国では印刷あるいは書写された料紙を文字面を内にして二つ折し、これを重ね、折目の部分を背にして、ここの外側を糊付する。したがって本を開くと文字面と裏面が交互に出てくる。この形が蝶が羽を広げたように見えるため胡蝶装と命名されたと言われている。一

方、我が国の粘葉装は、料紙に白界を施し、表と裏の両面に書写または印刷する。これを半折し、折り目の部分を背にして、ここの外側を糊付する<sup>122)</sup>。

大和綴：現在は列帖装（綴葉装）と呼称されている装訂。料紙（主に雁皮紙厚様）を数枚重ね、縦に半折して一括とし、これを数括重ね、背の上下それぞれ二箇所綴穴を穿ち、前後に表紙を付け綴じた装訂。この装訂は、我が国で粘葉装から工夫されて考案されたとする説、中国敦煌千仏洞から発見された書籍の中にこの装訂と似た装訂が存在するところから、中国で考案されたとする説があるが、現在のところ結論は出ていない<sup>123)</sup>。

結び綴：現在では大和綴と呼称されている装訂。料紙の折りに関係なく、即ち大和綴・粘葉装・袋綴のように折り、紙縫で下綴を行い、折った所を除いた三方を裁つ。表紙をそえて本の大きさに折り込み、表紙の右側に綴穴を上下に各二箇所開け、紐または数本の糸で飾り綴じにする<sup>124)</sup>。

櫛笥は歴史資料の検討結果から、日本書誌学会で制定した「綴葉装」の装訂名称の回避を提言している。つまり装訂2の装訂を「綴葉装」ではなく「大和綴」の名称こそ相応しい<sup>125)</sup>。としている。

これを一覧表にすると下記のようになる。

胡蝶装	糊綴・片面にのみ文字。中国では蝴蝶装という。料紙を半折し、折り目の部分を背にして、ここの外側を糊付する。 装訂 1-1
粘葉装	糊綴・両面に文字あり。料紙を半折し、折り目の部分を背にして、ここの外側を糊付する。 装訂 1-2
大和綴	現在では列帖装（綴葉装）と呼称されている装訂。料紙を数枚重ね、縦に半折して一括とし、これを数括重ね、背の上下それぞれ二箇所綴穴を穿ち、前後に表紙を付け綴じた装訂。 装訂 2
結び綴	現在では大和綴と呼称されている装訂。料紙の折りに関係なく、紙縫で下綴を行い表紙の右側に綴穴を上下各二箇所開け、紐または数本の糸で飾り綴じをする。 装訂 3

櫛笥は、装訂（図1）の名称を、中国では蝴蝶装とって、片面のみ使用。日本では両面に文字ありと唐本と和本を別けて説明している。「この形が蝶が羽を広げたように見えるため胡蝶装と命名されたと言われている。」として、この装訂の中国名を胡蝶装としている。

#### 15. 廣庭基介、長友千代治<sup>126)</sup>

廣庭基介、長友千代治によれば、

粘葉装は厚い用紙の一枚に書写したり印刷したものを、文字のない面を外側にして、中央で二つ折りにし、この折り目を何枚も並べ重ねて、折り目の外側で糊付けして接着させ、これに表紙をつけて冊子本に仕立てたものである。したがって、完全に開く見開きと、糊代の分が開かない見開きとが、一つおきに交互する。（中略）表紙は包背装で全体を一枚



の紙で包んだものと、背だけを狭い紙で包んだものがある。その開いた形の連想から、中国では胡蝶装ともいう。ただし、わが国でいう胡蝶装は後述のように、線装本の綴葉(てっちょう)をいうので注意を要する。(中略)しかし粘葉装については、未だにいろいろな異説もある。紙と紙を糊でくっつけるのであるが、それが紙面全体をくっつけるのか、のどの部分だけをくっつけるのか、それもはっきりしない。現存の書物には両面見られるのである。江戸時代には、「粘葉は胡蝶装也」(『好古小録・下』)という、中国での理解もそのまま行われていた<sup>127)</sup>。

綴葉装(てっちょう)：日本では、粘葉装とは別に何枚もの紙を一枚ずつでなく、何枚もいっしょに折ったものを二くくり以上、何くくりかを糸で綴じ合わせる、今のノートブックのような綴じ方の胡蝶装が出現した。この場合、糸の綴じの結びの垂れが最後のくくりの内部に残っているのが特色である。これは綴葉装(てっちょうそう)と呼ばれ、列葉装(れっちょうそう)という人たちもいる<sup>128)</sup>。

大和綴：仮綴じの一種でもあるが、日本ではそれを本綴(ほんかがり)として使用している場合があり、日本独特の装訂法である。線装本の下綴と同じともいえる。線装を本格的に行う前に、開けた穴に紙のこよりで予備的に、各丁がずれないように括っておくのを下綴というが、これは上部下部の二ヶ所綴じても、古くは一ヶ所を一穴一本の紙縫りで綴じていて、成立年代の推測もできる。大和綴は結び綴ともいう。大和綴の実物でもっとも良く見られるのは、明治、大正期の名所案内や、寺社などの写真帳、博覧会の出品目録などで、平紐や太紐で綴じている<sup>129)</sup>。

以上の説明を表にすると下記のようなになる<sup>130)</sup>。

粘葉装〔糊装〕	厚い用紙の一枚に書写したり印刷したものを、文字のない面を外側にして、中央で二つ折りにし、この折り目を何枚も並べ重ねて、折り目の外側で糊付けして密着させ、これに表紙をつけて冊子体に仕立てたものである。装訂 1
綴葉装(胡蝶装・列葉装・列帖装)〔線装〕	何枚もの紙を一枚ずつでなく、何枚も一所に折ったものを二くくり以上、何くくりかを糸で綴じあわせる、今のノートブックのような綴じ方の胡蝶装。この場合、糸の綴じの結び目の垂れが最後のくくりの内部に残っているのが特色である。装訂 2
大和綴(結び綴)〔平紐、太紐〕	仮綴の一種でもあるが、日本ではそれを本綴として使用している場合があり、日本独特の装訂法である。線装本の下綴と同じともいえる。上部下部の二か所綴じる。装訂 3

「胡蝶装」の名称について、中国の胡蝶装は糊綴じ(装訂1)、日本の胡蝶装は糸綴じ(装訂

2) であるとして、唐本の装訂名称と和本の装訂名称の違いをはっきりと区別して説明している。大和綴を「仮綴の一種」「線装本の下綴じと同じ」としているが、糸・紐等の装飾的に使用されている説明が不足している。また、「ノートブックのような綴じ方」という表現は、料紙の重ね方、折り方はおなじでも、糸のかがり方はかなり異なるので適切な説明とはいえない。「紙面全体をくっつけるのか、のどの部分だけをくっつけるのか、それもはっきりしない。」とあるが、唐本と和本の区別等について述べられていない。

16. 中藤靖之<sup>131)</sup>

中藤によれば、

粘葉装：紙を縦に半折りして、一折ずつ折り目の外側に糊を付けて表紙をつけたものである。見開きに一丁おきに糊づけがあり、糊代分だけ開かない。そのため、平らな面と浮き上がった面とが交互になる。表紙は、本文の料紙をそのまま表紙としたもの、一枚の表紙で表から裏まで包んだもの、表裏に一枚ずつつけたもの、その背を裂などで包んだものなど各種ある<sup>132)</sup>。

綴葉装：紙を数枚重ね、縦に半折して数折りを重ね、折り目に上二つ、下二つの四ヶ所に切り込みを入れて表紙をつけ、糸で綴じ合わせたもの。洋本と同じ開き方をする。綴じ方は二本の糸と四本の針で綴じ合わせる<sup>133)</sup>。

大和綴：表紙の背に近い部分に、平目打で上二つ、下二つの四ヶ所の穴をあけ、平紐などで綴じたものである<sup>134)</sup>。

長帳綴：これは紙を横に細長く二つ折りしたものを、折り山を下にして重ね、右端とじたものである。綴穴は、二つのものや四つのものがあり、折り山をしたにして書く。表紙は料紙共紙で、紙捻で綴られたものがほとんどで、その表紙には、仮綴装にみられる料紙を二枚重ねて折り、表紙として厚くしたものも多い<sup>135)</sup>。

表にまとめると次のようになる。

粘葉装〔糊〕	紙を縦に半折りして、一折ずつ折り目の外側に糊を付けて表紙をつけたものである	装訂 1
綴葉装〔糸〕	紙を数枚重ね、縦に半折して数折りを重ね、折り目に上二つ、下二つの四ヶ所に切り込みを入れて表紙をつけ、糸で綴じ合わせたもの	装訂 2
長帳綴〔糸〕	紙を横に細長く二つ折りしたものを、折り山を下にして重ね、右端をとじたものである	装訂 4
大和綴〔平紐〕	表紙の背に近い部分に、平目打で上二つ、下二つの四ヶ所に穴をあけ、平紐などで綴じたものである	装訂 3

長帳綴は料紙の重ね方は装訂 2 のようであるが、綴じ方について説明がないので不明。

17. 藤本孝一<sup>136)</sup>

藤本は、装訂の用語について、「(装訂)は「装」＝「形」と、「訂」＝綴じ方」が合わさった語彙である。例えば「綴葉装」は紙が折られた姿＝「装」と、それを糸で「綴」じる仕方が一緒になって表現されている<sup>137)</sup>。」と定義している。その概略は次の通りである。

装訂用語—装と綴

装(姿)装訂用語から解説する。

1. 綴葉装(てっちょうそう) —決められた読みより、「てつようそう」と文字通り訓じた方が、粘葉装と区別できていると思っている。紙を束ねて左右の真中から折った姿。
2. 粘葉装(でっちょうそう) —一枚の紙を真中から縦に折り、折りの外側に約五から十mm程に糊代幅を持って重ねた姿<sup>138)</sup>。
6. 列状装(れつじょうそう) —紙を一枚一枚重ねたもの。列状とは、一枚一枚を重ねた状態をいう。今までの書誌学で、一枚一枚重ねた状態を呼ぶ用語はみあたらない。(中略)「列」は、列ねるとか、並ぶ意味—丁—丁が列なることを指している。このことから一枚重ねの装訂を「列状(れつじょう)装」ということにする<sup>139)</sup>。

綴：紙を綴じるには、糸または紐・紙縫で綴じるか、糊付けする方法がある。装訂方法から分類すると、

- a. 綴—糸で綴じる。
  1. 綴葉綴—折目に四つの穴を開けて、糸を通して綴じる。
  2. 大和綴—綴側に二～四ほどの通し穴をあけ、紙縫や糸・紐で結ぶ。
- b. 粘葉綴—糊付けで綴じる。糊綴<sup>140)</sup>。

装訂方法

大和綴は、普通は二つ穴で一か所で結ぶか、四つの穴をあけて二か所で結ぶかである。前表紙で結ぶのが多いが、後表紙で結ぶこともある<sup>141)</sup>。

大和綴を装訂の種類と組み合わせると、大まかに次のようになる。

- 〈綴葉装大和綴〉紙を重ね折利した括を重ねる綴葉装を大和綴にする。
- 〈粘葉装大和綴〉一枚を半分に折り、折りの背のところで糊附する粘葉装を大和綴にする。
- 〈列状装大和綴〉一枚ごとに重ねた列状装を大和綴にする。
- 〈折紙装大和綴〉重ねた折紙を大和綴にする。
- 〈折紙綴葉装大和綴〉折紙を重ね折りした括を重ね、大和綴にする。
- 〈折紙装大和綴〉折本の折谷のところを大和綴とする。
- 〈袋綴装大和綴〉袋綴装に大和綴をする。多くの写本に用いられている。

大和綴はどの時代にもあり、どんな装訂でも利用できる<sup>142)</sup>。

これ等の説明を表にすると次のようになる<sup>143)</sup>。



装 \ 綴	綴葉綴	粘葉綴	大和綴
粘葉装		粘葉装 (粘葉綴)	粘葉装 大和綴
綴葉装	綴葉装 (綴葉綴)		綴葉装 大和綴
列状装		列状装 粘葉装	列状装 大和綴
折紙列状装	折紙列状装 綴葉綴		折紙列状装 大和綴
折紙綴葉装	折紙綴葉装 (綴葉綴)		折紙綴葉装 大和綴

綴葉装・粘葉装・(中略)の中には綴じの意味が含まれているため、単独でも用いる。大和綴は綴じ方で装ではない。それ以外は、「綴葉装大和綴」のように組み合わせる。また、用語にしなくても「綴葉装で大和綴になっている」と説明できる<sup>144)</sup>。

大和綴：綴側に二～四ほどの通し穴をあけ、紙縫や糸・紐で結ぶ<sup>145)</sup>。大和綴は、普通は二つ穴で一か所で結ぶか、四つ穴をあけて二か所で結ぶかである。前表紙で結ぶものが多いが、後表紙で結ぶこともある<sup>146)</sup>。

列状装(れつじょうそう)：紙を一枚一枚重ねたもの。列状とは、一枚一枚重ねた状態をいう。今までの書誌学で、一枚一枚重ねた本の状態を呼ぶ用語はみあたらない。「れつじょう」の音は、綴葉装の古語である「列帖装」と間違えやすいが、あえて、「列状」の字を当てた。(中略)「列」は、列ねるとか、並ぶ意味で一丁一丁が列なることを指している。これらのことから一枚重ねの装訂を「列状装」ということにする<sup>147)</sup>。

<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="font-size: 2em; margin-right: 10px;">{</div> <div style="margin-right: 10px;">粘葉装</div> <div style="margin-right: 10px;">綴葉装</div> <div>大和綴</div> </div>	一枚の紙を真中から縦に折り、折りの外側に約五から十 mm 程に糊代幅を持って重ねた姿。糊付けで綴じる。 装訂 1
	折目に四つの穴を開けて、糸を通して綴じる。紙を束ねて左右の真中から折った姿。 装訂 2
	綴側に二～四ほどの通し穴をあけ、紙縫や糸・紐で結ぶ。普通は二つ穴で一か所で結ぶか、四つ穴をあけて二か所で結ぶかである。前表紙で結ぶものが多いが、後表紙で結ぶこともある。 装訂 3

藤本は「大和綴を装訂の種類と組み合わせると、大和綴はどの時代にもあり、どんな装訂でも利用できる<sup>148)</sup>。こと明らかにした。藤本は「書誌学会が決めた用語は、それを遵守すべきと言う立場にたつ<sup>149)</sup>。」また、これまで「一紙を一枚一枚重ねたもの」をあらわす用語がなかったので、「列状装」と言う用語を提唱している。大和綴については、他の装訂をしたうえにさらに装訂できるものであることを示している。料紙の折り方、重ね方に関わらず、最終的な外形からの名称(藤本のいう、綴である)としている。藤本氏は、「装」と「訂」に分けその組併せにより装訂名称を説明している。これまでになかった、新しい見解である。藤本説をとれば個々の和本にほどこされた装訂名称がはっきり書き表すことができる。例えば、「綴葉装で大和綴になっている<sup>150)</sup>」といった複数の装訂方法を含んだ説明が出来る。これまでの、説明がこれまでの諸説について、不備な点を指摘している。装訂方法の説明と図・写真で例示されている。これまでの説明では、個々の和本の装訂名が曖昧な表現がされてきている。たとえば、1冊の和本は、料紙を折、重ね、仮綴じをし、表紙を付け、綴じるという工程をとる。つまり1冊の和本には、複数の装訂方法がなされている、それにも拘わらず、一つの装訂名の説明に使用されているから、誤解を生むもととなった。この原因を除去し解消できる説明である。

#### 18. 杉浦克己<sup>151)</sup>

本書は放送大学の教材である。

杉浦によれば

粘帖装：料紙を半分に折ってその内側の面に書写し(書いた後に折ることもある)、順に重ねて前後の料紙の外側の面どうしを全面に糊付けして重ねたもの(略)、料紙の裏全体を糊付けするため片面のみの書写しか使えない。(中略)また、両面書記の場合などに、半分に折った料紙の外側の面の折山の辺の端半～一センチメートル幅に糊を付け、順に貼り合わせて重ねた綴じ方もあり、これを特に胡蝶装と呼ぶこともある。「料紙の内側にあたる面は完全に開くことができるが、貼り合わせた外側の面は糊代の分だけ開くことができず、この様子を羽を広げた蝶にたとえて胡蝶装の称がある<sup>152)</sup>。」「胡蝶装」の称は次に述べる綴葉装の別称とする考え方もある<sup>153)</sup>。

綴葉装(列帖装)：料紙数枚を重ねて折り、小冊子状にしたものを一括りとし、これを数段重ねて折山の部分に小刀で切目を入れ、ここから細糸を通して隣のように全体を綴じたものを綴葉装(列帖装、襲ね綴じ、などとも)いう<sup>154)</sup>。

大和綴じ：料紙を重ねて穴を空け、細紐を通してとじたもの。一般には二箇所穴で綴じるが、四箇所の場合もあり、これを特に四つ目大和と呼ぶこともある。あるいは他の方法を併用したり、あるいは他の方法で綴じた上に表紙を加える場合に用いたりする。(略)紙縫等による仮綴じにも用いられる。(中略)通例では表紙の側で結ぶことが多い。次に挙げる袋綴じでは、糸を背と上下の小口に回して綴じるが、大和綴じでは小口に回さない<sup>155)</sup>。

以上を一覧表にすると次のようになる。

粘帖装	前後の料紙の外側の面どうしを全面に糊付けして重ねたもの	装訂 1 - 1
	胡蝶装 料紙の外側の面の折山の辺の端半～一センチメートル幅に糊を付け、順に貼り合わせて重ねた綴じ方	装訂 1 - 2
綴葉装 (列帖装・襲ね綴じ)	料紙数枚を重ねて折り、小冊子状にしたものを一括りとし、これを数段重ねて折山の部分に小刀で切目を入れ、ここから細糸を通して隣るように全体を綴じたもの。	装訂 2
大和綴じ	料紙を重ねて穴を空け、細紐を通してとじたもの。一般には二箇所穴で綴じるが、四箇所の場合もあり、これを特に四つ目大和と呼ぶこともある。あるいは他の方法を併用したり、あるいは他の方法で綴じた上に表紙を加える場合に用いたりする。紙縫等による仮綴じにも用いられる。通例では表紙の側で結ぶことが多い。袋綴じでは、糸を背と上下の小口に回して綴じるが、大和綴じでは小口に回さない。	装訂 3

装訂 1 - 1 を「粘帖装」といい、装訂 1 - 2 を胡蝶装としている。綴葉装の別称とする考え方のあることも紹介している。著者(杉浦)に問い合わせたところ「粘帖装」の語は、「中国の書籍装丁を表す用語として比較的ポピュラーであり、我邦での用例もさほど希有なものではないと理解しております<sup>156)</sup>。」と回答があった。しかし、筆者は外では使用されている例を見つけることはできていない。中国の本の装訂ではポピュラーなのか。本文の前後の関係では、和本の装訂について述べている所なので、「粘帖装」は適切ではなく「粘葉装」とであると判断する。また「帖」を使用しているのは、杉浦と長澤<sup>157)</sup> だけである。放送大学の教材であるだけに影響を憂慮する。杉浦は「粘帖装」・「襲ね綴じ(かさねとじ)」という他では使用されていない用語を定義、説明をせずに使用している。

#### 19. 藤森 馨<sup>158)</sup>

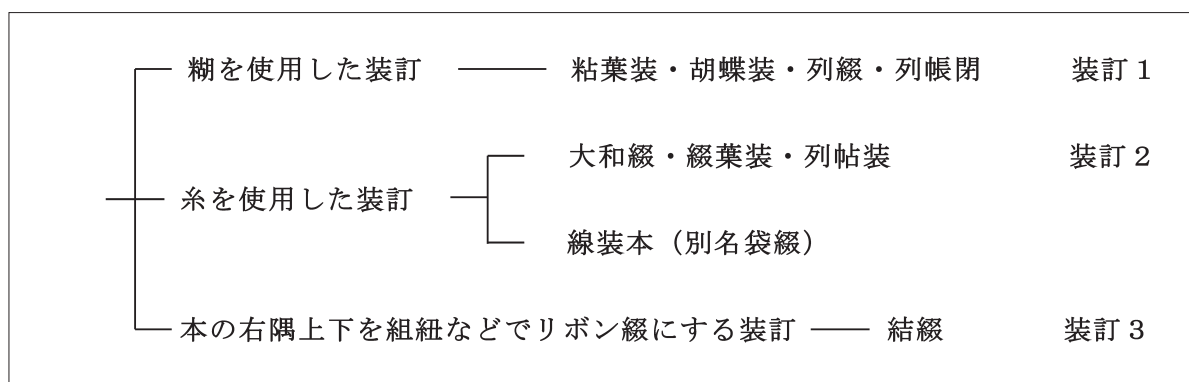
藤森によれば

粘葉装：糊を使用した装訂は一般に粘葉装と呼ばれる。中国では一枚の料紙の表面のみに印刷し、それらを谷折りにして重ねそろえ、次々に糊で粘着してある。粘着方法は、中国伝来の物は書背を、日本の物は外側 3～10ミリぐらいの幅で糊が付けられている。(中略)つまり、粘葉装は中国名を胡蝶装といい、日本では別名列綴ともいったということになる。(中略)糊を用いたいわゆる粘葉装の装訂名称は、粘葉装・胡蝶装・列綴・列帳閉以上があるということになる<sup>159)</sup>。

綴葉装・大和綴・列帖装：大和綴（表紙の右隅用下2か所をリボン結びにした結綴ではない）・綴葉装・列帖装と呼称される装訂で仕上げられた図書は、中国でも発見されており、唐代から五代頃には、大陸に存在していたことが確認されている。其の装訂の特徴は、料紙を何枚か重ねて一帖とし、これを重ねたまま二つ折りにして帖葉を作り、この帖葉の内面の中心に上下2箇所穴を開けて糸を通し、さらに帖葉数括りを重ね合わせて糸で綴じたところにある。糸は全て内側で処理されているため、表紙上には見えない点の特徴で、書背から見ると、あたかも粘葉数括りが重なっているように見える。（中略）なお、こうした装訂を「胡蝶装」と呼称する向きもあるが、後にやや詳しくふれるように胡蝶装は粘葉装の中国名であるから、誤認と考えられる<sup>160)</sup>。

結綴（むすびとじ）：いわゆる本の右隅上下にリボン結びでとじたものを大和綴というのは、1934年に日本書誌学会が用語として定めて以降である。それまでは、これを大和綴といったか、否かは定かではない。しかしながら今日では大和綴という装訂用語は通用しており（中略）本の右端上下を組紐などでリボン綴にする用語は、結綴・大和綴と称呼されることがあることをここでは確認するが、こうした装訂は上記のように歴史的には「結綴」と称した方がよいように思われる<sup>161)</sup>。

以上を表にすると次のようになる。



（装訂の中国名・日本名を一緒に説明をしているので和本の説明のみを抽出した）。

「リボン結びでとじたものを大和綴というのは、1934年に日本書誌学会が用語として定めて以降である<sup>162)</sup>。」とあるが、リボン綴じという用語は使用されていない。藤森の拡大解釈である。「リボン結び」・「リボン綴」用語の定義することなく使用されている。貝原益軒著『和漢名数』（1695年刊）に「紫糸ムスビトヂ」という記述があるのを根拠にして「江戸時代には、こうした装訂は「ムスビトヂ」と称されていたことになり<sup>163)</sup>」とあるが、この一例を以って、この装訂（装訂3）が江戸時代、ムスビトヂと呼ばれていたと断定するのは無理がある。

## 20. 吉野敏武<sup>164)</sup>

吉野によれば、

粘葉装は、中国では胡蝶装（こちょうそう）、蝶装（ちょうそう）とも称されている。我が国の粘葉装は両面書写が主であり、この装幀形態の大半のものは書写前には糊綴じせず、糊綴じ部分に丁付けをして書写されている。これは、糊綴じ前に書写する丁を間違えないようにしたものだろう。近世の両面印刷の経典を見ても、糊綴じ部分に丁付けが印刷されている。このようなことから、この装幀は、書写されてから製本されたものと断定しともよい<sup>165)</sup>。この装幀のものには糸綴じのものがなく、丁を糊で貼り込んだ糊綴じ方法が取られている。糸綴じされているものでも、糊綴じが剥がれて後世に糸で綴じされたものが多い。このように糊離れが起こるため、粘葉装が多いのは中世までである。近世になると、印刷された経典に糊綴じが見られる<sup>166)</sup>。大和綴、この装幀は、書誌学会や書誌学書では列帖装（れつちょうそう）、綴葉装（てつようそう）と称されている。中国にもこの装幀に類似したものがあることはあるが、綴じ部分が我が国のような状態ではなく、括り穴全部に糸が通されたノート綴のような形をしている。我が国のものは独自の綴じ方をしており、綴じ終わりの結び目に装飾的な結び方がなされているものが多い<sup>167)</sup>。

線装本袋綴：我が国では和本といい、袋綴、和綴などと称されている。中国では唐本といわれ、唐綴、明朝綴（明時代にできた綴じ方）、康熙綴（康熙年間にできた綴じ方）などと称されているが、中国の書誌学界では、糸が線となっているところから線装本という名称が付いている。この装幀は、和漢籍ともに本誌が袋状になっているところから、ただ単に袋綴とか唐綴などというより「線装本」に続けて袋綴、和綴、唐綴といった綴じ方を称した方が判りやすく、名称で我が国の物か漢籍かも判断できるため、「線装本袋綴」としている<sup>168)</sup>。

以上の説明を表にすると次のようになる。

—	粘葉装	二つ折りにした本紙の折目外側を糊で綴じる。 (中国では胡蝶装、蝶装との称されている。)	装訂 1
	大和綴	(書誌学会、書誌学書では列帖装、綴葉装と称されている。) 数枚の料紙を一括利にして二つ折りに折り畳み、重ね背の 上下二ヶ所ずつに綴穴となる切れ目をいれ、細糸数本を使っ て綴じることが多く (略)	装訂 2
	線装本袋綴		装訂 4

\* 装訂 3 については記述がない。



21. 堀川貴司<sup>169)</sup>

和装本に関する内容をまとめると次のようになる<sup>170)</sup>。

粘葉装	紙を谷折りし、折り目付近に糊を付けて繋げていきます。旋風葉を折り目ですべて切り離したらこの形になります。見た目から胡蝶装ともいいます。通常、糊代を一センチメートル近く取っているため、糊付のため完全に開かないところと、谷折りしてある折り目まで完全に開くところが交互に出現します。多くは厚手の料紙で両面使用。唐本やそれを模したものは片面使用。 装訂 1
列帖装	綴葉装とも。数枚の紙をまとめて谷折したもの（この一束を折または括りと呼ぶ）の折り目部分に穴を開け、糸で綴り、更に折同士を糸で綴り合わせていったもの。日本固有の装訂と言われていましたが、中国に古い遺品があります。主として鳥の子紙・両面使用。 装訂 2
折紙列帖装	列帖装の類似の装訂。両面書写できない薄手の紙を横長に二つ折りし、折り目を下にして、後は列帖装と同様の手順で装訂したもの。江戸時代の帳簿類などに見られます。
長帳綴	折紙列帖と同様、横長に二つ折りし、折り目を下にして重ね、そのまま右端を下綴した袋綴。大福帳やメモ帳などの横長の写本に用いられる。
大和綴	紙縫綴と同じやり方ですが、表紙を付け、紙縫の代わりに美しい糸や紐を用いた装飾的な装訂。 装訂 3
単葉装	紙を折らずに一枚のまま重ねて紙縫で綴じたもの。両面使用。厚手料紙を用いた仏教関係の書物などに稀に見られます。
袋綴	山折りした紙の折り目と反対の側を綴じる。まず折り重ねた紙の右端上下ニカ所に二つずつ穴を開け、紙縫を通して結び（これを下綴と呼ぶ）、本体を安定させてから表紙を糸でかがる。片面使用。

「粘葉装」の別称を「胡蝶装」、「列帖装」の別称を「綴葉装」としている。「大和綴」については、「美しい糸や紐を用いた装飾的な装訂」とだけ説明をしている。「結綴」については記述がない。堀川は、「紙を折らずに一枚のまま重ねて紙縫で綴じたもの。」を「単葉装」としている。

### Ⅲ. 同名異装、異名同装—問題点の集約・分析—

和本の装訂名称とその表記法について、その根拠、同名異装、異名同装、異称、別称、同音異字、読み方の問題（表記のゆれの問題点）を著作物21（『訪書余録（1925）』から『書誌学入門（堀川貴司）』）件を個々に俎上にあげ、和本の装訂名称が混乱してきた状況と原因を指摘し、各氏の記述に不十分な説明を著者が、序論で定義した装訂方法を根拠にして個々に論述した。

#### 1. 同名異装、異名同装の混乱の現状

別称、異称、通説の混乱状況を一覧表にしたのが次の表である。

表5 表1の装訂1から装訂3の装訂名称とその表記について各説(装訂名称のばらつき状況)

	装 訂 名 称 ・ 表 記 法
装訂1	粘葉 粘葉綴 粘葉装 列丁 列帖（粘葉）の第1種（糊とじ） 粘帖装 蝴蝶装 胡蝶装 糊牒装 粘帖綴 列綴
装訂1(1)	両面に文字のあるもの 列帖 第1種 甲 粘葉 粘葉（糊綴）のうち、両面に文字のあるもの（日本式）
装訂1(2)	片面のみ文字のあるもの 列帖 第1種 乙 蝴蝶装 粘葉（糊綴）のうち片面にのみ文字のあるもの（支那式）
装訂2	蝴蝶綴 胡蝶装 列帖装 綴葉 綴葉装 綴帖装 襲ね綴じ 大和綴 列帖装 列葉装 列葉綴 大福帳装 綴帖装 房綴
装訂1と 装訂2の総称	胡蝶装 蝴蝶装
装訂3	大和綴 大和綴じ 大和とじ 結綴 結び綴 結び綴じ 結びとじ むすび綴 打抜綴 近代的大和 新大和綴

装訂1には、糊で張り付ける位置・箇所三様ある。①背の折り目の部分 ②背の折目に近い部分つまり、折目の外側 数センチ幅で上から下まで ③非書写面を全面糊付

次に和本の装訂名称について各氏の説明をまとめ、粘葉装・胡蝶装・大和綴の名と「表1の各装訂」と対応させると、次のようになる。

表6

粘葉装	① 装訂1の名称 ② 装訂1と装訂2の総称
胡蝶装	① 装訂1の名称 ② 装訂2の名称 ③ 装訂1と装訂2の総称
大和綴	① 装訂2の名称 ② 装訂3の名称

## 2. 用語の乱の集約

1) 「そうてい」と発音される用語に「装訂、装幀、装綴、装釘、装丁」の複数の表記がある。

2) 「装」と「綴」の両方が使用されている。

①粘葉装、粘葉綴 ②綴葉装、綴葉綴 ③列葉装、列葉綴 ④胡蝶装、胡蝶綴

3) 複数表記の名称 (同一の装訂方法に複数の表記ある。)

①粘葉、粘葉装、粘葉綴じ ②大和綴、大和綴じ、やまととじ ③結び綴じ、結綴、結びとじ

4) 類似表記の名称

粘葉装、粘帖装、列状装、列帖装

5) 類似音声の名称

でっちょう、てっちょう、てつようそう、ていようそう、れっちょうそう、れつじようそう

6) 同字異音の名称 (一つの用語に複数の読み方。)

「綴葉装」の読み方は、てつようそう、てっちょうそう、ていようそう

7) 同音異字の名称 (同じ読み方の複数の用語。)

①発音：レツジョウソウ 表記：「列帖装」、「列状装」

②発音：デツジョウ 表記：「粘葉」、「粘帖 (杉浦)」

③発音：コチョウソウ 表記：「胡蝶装」、「蝴蝶装」、「糊牒装」

8) 同音複数表記の名称

①発音：ムシビトジ 表記：「結綴」、「結び綴」、「結び綴じ」、「結びとじ」

②発音：ヤマトトジ 表記：「大和綴」、「大和綴じ」

③発音：ツヅリ 表記：「つづり」、「綴り」

④発音：トジ 標記：「とじ」・「綴じ」と書く。

## 3. 同名異装、異名同装の分析

とりあげた用語の乱れを分析すると次のようになる。

## 1) 同名異装、異名同装名称の根拠の問題

### ① 文献を根拠とする見解

中国の文献：装訂名称の根拠としてとりあげられた中国の文献は、つぎのとおりである。

『通雅』方以智(明)<sup>171)</sup>『王氏談録』王洙(明)<sup>172)</sup>『書林清話』<sup>173)</sup>『烈女傳跋』阮福(清代)<sup>174)</sup>『疑燿』卷五 張萱(明)<sup>175)</sup>『書林清話』葉德輝(清末～明國)<sup>176)</sup>

日本の文献：和本の装訂名称の検討に用いられた日本の文献は、次のとおりである。

『三英随筆<sup>177)</sup>』『好古抄録 下<sup>178)</sup>』『好古小録雑考 第二十二<sup>179)</sup>』『駿府政事録<sup>180)</sup>』  
『寒檠鏤綴<sup>181)</sup>』『近聞寓筆卷三<sup>182)</sup>』『難波江<sup>183)</sup>』『米菴墨談』続編三<sup>184)</sup>『守武千句<sup>185)</sup>』  
『和漢名数<sup>186)</sup>』

### ② 名称の根拠を字義（字源）に基づく説

#### (1) 粘葉装の名称根拠

- ・粘葉の粘は黏の俗字で、中国の音は泥炎反であるから「デン」である。「ねばりつく」とか「ねばりつける」の意味を持っている<sup>187)</sup>。
- ・粘葉装の粘はねばる・のり・つなぐという意味をもち、葉は紙を意味するところから、紙を糊で綴じた装幀と言えます<sup>188)</sup>。
- ・粘葉とは、紙を糊づけして仕立てる製本の様式からついた名<sup>189)</sup>。
- ・粘は黏の通字であり、ねばる・のり・つなぐなどという意味をもつ。葉は前述したように、紙を意味する。すなわち、字義からいっても、紙を糊で綴じた装幀という意味である<sup>190)</sup>。

### ③ 資料の形態を根拠とする見解

#### (1) 胡（蝴）蝶装の名称根拠

##### ア) 表1の装訂1の装訂名を胡（蝴）蝶装とする根拠

- ・一枚ずつ開ければ、ちょうど胡蝶のひるがえるようであるから胡蝶装とよび、胡蝶本とも粘葉ともよばれる<sup>191)</sup>。
- ・其の広げた形が、胡蝶のように翻るごとくであるというので胡（蝴）蝶装ともいふ<sup>192)</sup>。
- ・文字の書いてある部分を開くと、胡蝶が羽根を広げているような感じが与えられる。その故で、通雅卷三十二の器用部には「粘葉、謂胡蝶装」と述べた。胡蝶装とは粘葉装の別名であり、両者は異名同物なのである<sup>193)</sup>。
- ・胡蝶装とは、製本された本の姿を蝶に見立ててつけた名でしょう<sup>194)</sup>。
- ・一枚ずつをあけていくと、丁度、胡蝶が羽をひらいたようになるからであろう、とくに、連節部の両面白紙の部分は、中央にうきあがった部分をふくめて、白い胡蝶がとまっているような状態に見える<sup>195)</sup>。
- ・糊付部分が、蝶の羽を広げた形に見えることから「胡蝶装」と言われることもある<sup>196)</sup>。
- ・この形が蝶が羽を広げたように見えるため胡蝶装と命名されたと言われている<sup>197)</sup>。

- ・その開いた形の連想から、中国では胡蝶装ともいう。ただし、わが国でいう胡蝶装は後述のように、線装本の綴葉をいうので注意を要する<sup>198)</sup>。
  - ・江戸時代には、「粘葉は胡蝶装也」(『好古小録・下』)という、中国での理解もそのまま行われていた<sup>199)</sup>。
  - ・料紙の内側にあたる面は完全に開くことができるが、貼り合わせた外側の面は糊代の分だけ開くことができず、この様子を羽を広げた蝶にたとえて胡蝶装の称がある<sup>200)</sup>。
- イ) 装訂2の名称を胡(蝴)蝶装とする根拠
- ・それぞれの帖を二つ折して綴じると、一番内側になる部分は折り目までひらいて蝶が羽を広げた形に似、そうでない部分は羽を綴じた形に似るところから付けられたものです<sup>201)</sup>。
  - ・胡蝶装の称は次に述べる綴葉装の別称とする考え方もある<sup>202)</sup>。
- ウ) 装訂1と装訂2を胡蝶装とする根拠
- ・粘葉装と綴葉装を分け、この二つの総称を胡蝶装と呼ぶことにしている<sup>203)</sup>。
  - ・「普通の胡蝶装を、わが国では旧称のように粘葉装と呼び、胡蝶装を、粘葉装と綴葉装との総称とすると、広狭両義の呼称が整然となる<sup>204)</sup>。
  - ・蝶が羽を広げた形に似、羽を綴じた形に似ることから(この混乱は書誌学の先生が、どちらも蝶が羽を広げたところのようにみえるから、胡蝶装と言われますとおしゃったことから起こったようです)<sup>205)</sup>。

(2) 綴葉装の名称根拠

「綴葉」の名称は1939(昭和14)年に日本書誌学会で制定した新造語である。昔この装訂を「古人はこの綴じ方を粘葉装と区別して、鉄杖閉(テツチョウトジ)と呼んでいた所から、長澤規矩也、川瀬一馬の両氏を中心に、昭和初年作られた新用語である<sup>206)</sup>。

(3) 列帖装の名称根拠

- ・粘葉はデツチョウと読む、我が国ではこれを訛ってレツチョウと云ひ、列帖の文字を当ててある<sup>207)</sup>。
- ・列帖を粘葉の訛りと解く人もいる<sup>208)</sup>
- ・「列帖」等の文字を用ひるのは、粘葉の宛字もしくは転訛である<sup>209)</sup>
- ・粘葉の転訛とも考えられ<sup>210)</sup>
- ・帖を列ねる、というところからの命名を、帖(料紙を複数枚重ねてから二つ折りにしたもの)を列(つら)ね綴じた装訂と解釈すれば、実態にそっている<sup>211)</sup>。
- ・帖を列ねた形とみられる所から「列帖装」の用語を用いる人も多い<sup>212)</sup>。
- ・古く「列帖」と称する語が見えるがこれは「粘葉」の転化とも考えられ<sup>213)</sup>
- ・列を列ねる意味で大和綴[装訂2]のみを指すものならば一理あり<sup>214)</sup>
- ・一帖一帖を綴ったものであり、また、各帖を並列して綴ったものであるから、「綴



葉装」とか「列帖装」とでも称せられるべき装幀となる<sup>215)</sup>。

- ・この列帖装も、山岸徳平博士が提唱されたテクニカル・タームであり<sup>216)</sup>
- ・列帖装という名称も歴史的史料による裏付けはなく、吉澤氏の指摘のとおり、粘葉装の転化である可能性は高い<sup>217)</sup>
- ・この装訂（装訂2）は、我が国で粘葉装から工夫されて考案されたとする説、中国敦煌千仏洞唐発見された書籍の中にこの装訂と似た装訂が存在するところから、中国で考案されたとする説があるが、現在のところ結論は出ていない<sup>218)</sup>。

#### (4) 大和綴の名称の根拠

##### ア) 装訂2を大和綴とする根拠

- ・和歌国文に関する書物に限られて漢書仏書には用ひられぬ事及び其の考案の性質から考へて王朝時代に於いて第一種の列帖から案出した装幀ではなからうかと思ふ。昔は知らず今日に於いては日本にも支那にも此の種の属する漢書は見当たらない<sup>219)</sup>。
- ・「和歌国文に関する書物に限られて漢書仏書には用ひられぬ事及び其の考案の性質から考へて王朝時代に於いて第一種の列帖から案出した装幀ではなからうかと思ふ。昔は知らず今日に於いては日本にも支那にも此の種の属する漢書は見当たらない」といふことである<sup>220)</sup>。
- ・文献にこの呼称（大和綴じ）があらわれるのは、江戸中期の医官望月三英の『三英随筆』に「大和とちと言書物有之、先は歌書古へ多く有、町人の覚帖も大和とち也」とあるのが初例であるらしい<sup>221)</sup>。
- ・「大和綴じ」と称するのは、この装訂法が、中国には絶えてみられないところからの呼称であり、きわめて妥当な称ではある<sup>222)</sup>。

##### イ) 装訂3を大和綴とする根拠

- ・仮とじに近いが、わが国独得の装訂であるというのでできた称である<sup>223)</sup>。
- ・其の名の名称の示す如く、我が国で工夫せられた装訂で<sup>224)</sup>
- ・わが国ではじめられた装訂の一様式<sup>225)</sup>
- ・仮綴じ野一種でもあるが、日本ではそれを本綴（ほんかがり）として使用している場合があり、日本独特の装訂法である。線装本の下綴と同じともいえる<sup>226)</sup>。
- ・包背装や線装本の下とじのままのような装訂で、それだけなら清代にもあるが。わが国では、ひもや数本の太糸を使って、特殊の装訂にしているので、この称が出た。明治・大正期には、写真帖によく採用された装訂である<sup>227)</sup>。
- ・大和綴じと称するのは、この装訂が、中国には絶えて見られないところからの呼称であり、極めて妥当な称である<sup>228)</sup>。
- ・大和綴はその名の如く、日本独自の装訂<sup>229)</sup>。

#### (5) 結び綴の名称根拠

装訂3の名称を結び綴とする根拠。調査をした文献で「むすびとじ」の根拠につい

て記述されたものはない。

(6) 読ませかたの問題

類似表記や類似音声、同字異音の問題があるにもかかわらず、読み方をきっちりとつけている著者は、21人のうち12人である。

4. 同名異装、異名同装の考察

同名異装、異名同装の乱れの集約と分析の結果をもとに、同名異装、異名同装の乱れの考察を行う。

1) 文献を名称の根拠とする見解の考察

① 文献数の問題

検討するのに十分な文献数がない。和本の装訂名称に取り上げられた主な資料は10点である。表1に示した装訂名と同定するのに必要な詳細な記述のない文献もある。

また、名称の根拠とする文献の十分な検討がされていない著作も見られる。

「大和綴」の名称について、田中敬、山岸、中野は、望月三英の『三英随筆』を取り上げ検討を展開している。

- ・田中は、『駿府政事録』、望月三英『三英随筆』(文化二年)、浅野長祚『寒檠鑲綴』、ほかに『近聞寓筆卷三』吉田篁墩、『好古小録雑考』第二十二下 藤井貞幹、『難波江』岡本保孝、『米菴墨談』続編三 市川米菴、『通雅』方以智(明)、『疑耀』張萱(明)、『書林清話』葉德輝(清末～明國)、『烈女傳跋』阮福(清代)、『談録』王洙などの文献を取り上げ論述している<sup>230)</sup>。
- ・山岸は、三英随筆で紹介されている『千金翼方』、『揚子家藏方』の現存の現物を考察し、「皆おなじように、線装の袋綴になっている。そこで、三英随筆の記述が甚だ怪しく、信用できない。要するに、大和綴(綴帖装)は中国の本には、存在しない。日本独特のものとしてよい<sup>231)</sup>。」とし、三英随筆の「唐より初りて外国へも伝りたり」の記述が間違いであるとしている。
- ・藤森は、『和漢名数』貝原益軒(1695年刊)に「紫糸ムスビトヂ」という記述を根拠に「江戸時代には、こうした装訂は「ムスビトヂ」と称されていたことになり<sup>232)</sup>」とある。この一例をだけで、この装訂が江戸時代、ムスビトヂと呼ばれていたと断定するのは早計である。

② 和本と唐本の装訂名称の区別

書物は中国からもたらされてのものであり、装訂名も中国名を踏襲するのは当然であるが、「日本独自」の装訂が出現しているにもかかわらず、和本に唐本の装訂名称の根拠(文献)をそのまま当てはめて説明をしている。和本の装訂と唐本の装訂とをはっきりと区別して解説をしている筆者は少数である。区別して和本には和本の装訂名をつけることがふさわしいと考える。

③ 文献の製作年代の検討

装訂名称（呼称）の根拠としてとりあげた文献が、文献成立時において、人口に膾炙された（一般的に使用されていた）用語なのかどうかを検討されていない。そのためには多くの資料を見つけることが必要である。現段階では、根拠とする文献数が少ないことが致命的である。山岸が述べているように、「一犬が嘘に吠えたのを、百犬が事実として伝承したように、次々と誤って伝えていった。」ことも、検討すべきであり<sup>233</sup>、徒然草の一文に、「書きつければそのまま定まりぬ。」とあるように、書き残したものがたまたま現存して見つかっただけで、其の時代に一般に使用されていたとするのは早計である。また、特定の時代、特定の階層で使用されていたかの検証なしに、現代に使用すべき名称と断定するのには問題がある。

④ 現装と原装の検討

文献に残された資料が現存していて、文献と資料が一致・確定できる場<sup>234</sup>であっても、長い年月の間に、補修改装等の可能性もあり、間違いなく元装であるかどうかの判断は、外装だけでは無理があり、解体しても困難なこともある。

田中は粘葉考で次のように述べている。

私は吉澤博士が「余の記憶に誤りがなかったならば、写本に於いても刊本に於いても和漢の製本を通じて一ツカネにした粘葉に糊を以て縫綴したものは全くない一ツカネにしたものは皆糸を以て縫綴してある」といって居られるのを信ぜざるを得ない。私の見た所も亦まったく同様である。唯斯うして糸で綴じたものを表裏一統木の外表紙を以て糊着けにして包装してあるものが往々にしてあり、外観だけでは一見粘綴のように見える所から内部の構造を精細に調査せずして、粘葉装と誤認することがあったかと思はれる<sup>235</sup>。粘葉の仕立方を知らず後になって糊の脱落を慮りて副へた糸を最初から用ひてあったもの、の如く誤認せるもので<sup>236</sup>

昭和七（1932）年新刊書誌学関係書籍批判座談会速記録には次のような記述がある。

第一常識から考へて宋時代の装釘の本が今日まで元装の儘でどの位伝わってゐませう。北京図書館に宋代の装釘の儘だろうと言はれる本が極く少しある。それ以外は此処に拳がって居るものは皆改装ものです。中には冊子を蝴蝶装に直したものがある。又私共は耳一匡郭外の篇名題目等一と言っておりますが、その耳が附いて居る本は即ち皆蝴蝶装だったので、今冊子の本ならば全部後人が冊子に作り直したのだといふ説らしいです。これは極危い説です。静嘉堂にある本は一つとして宋の原装の儘の本はない。明らかに後に蝴蝶装に直したものもある<sup>237</sup>。古い本では所謂のどが廣いことが多いので、そこに書入があっても、又糸の通つてゐた孔の痕跡がなくても、もと蝴蝶装であったといふ証拠にはなりません。袋綴をしなほしてのどをつめればそうなります<sup>238</sup>。

山岸徳平は次のように述べている。

大和綴にあっては、胡蝶装とならない。胡蝶装はまた、決して糸を用いない。もし、

糸を用いたものがあるとしても、それは原装ではない。装幀が損傷した場合、紙が離ればなれになったのを、後で糸で綴ったにすぎないのである。けっして原装ではない<sup>239)</sup>。

橋本不美男も次のように言っている。「現存する鎌倉・室町期の列帖装にしても、原装そのままの物はほとんどなく、裂表紙の場合は大多数が消耗し、綴じ糸も何回か綴じ直された形跡を残すものが多い<sup>240)</sup>」

## 2) 各装訂名称の根拠の考察

### ① 胡(蝴)蝶装の名称

異なる装訂が同じ理由で同名になっている。(同名異装、異名同装の発生原因)「蝶が羽を広げたような感じ」という同一の理由で、装訂1、装訂2、装訂1と装訂2の総称を胡蝶装としている。実物を見みると装訂1も装訂2ともに、蝶が羽を広げたように見える。このため、「胡蝶装」という名称は、特定の装訂名称の根拠とすることできない。

### ② 列帖装の名称

列帖装の名称の根拠としては二つあげられているが、問題点はない。

- ・列を列ねるところからの命名
- ・粘葉の転訛

### ③ 「綴葉装」の装訂名称

- ・制定の問題点 (文献に基づいた装訂名称でない)

「綴葉装」の名称は、文献に基づかない(根拠のない)装訂名称である。日本書誌学会の新造語であること。

- ・日本書誌学会「日本の「列帖」とか何とか外の字は却っていやですから…<sup>241)</sup>」の学術的でない理由で、新造語「綴葉」が採用されている。
- ・国文の世界では、この装訂に「列帖装」という用語が使用されていることが知られていた<sup>242)</sup>のに、新造用語「綴葉装」を制定した根拠、理由が明らかにされていない。
- ・言葉の意味が十分に検討されていない。

「綴葉」は字面(字義)からは、「料紙をとじる」ということになるので、特定の装訂名称に使用されるのは不適當である。「綴」の意味は、「綴じる」であると解する。

- ・読ませ方が不適切

「てつようそう」、「てっちょうそう」と呼ぶように日本書誌学会で定めているが、此の用語(綴葉)を使用するなら「ていよう」と読ませたほうが既存の装訂名称との混乱が回避できたのではないか。

- ・既存の名称と紛らわしい名称、読み方がされる重複するが、装訂用語に、「でっちょう」、「れっちょう」があり、「てっちょう」は聞き取りにくく、聞き誤りやすい名称である。

以上の理由により、新造語「綴葉装」は、ふさわしくない用語である。



④ 大和綴の名称

- ・日本独自の装訂という同一の理由を根拠に、装訂2と装訂3の両方を「大和綴」と定義している。同じ装訂名称が、複数の装訂名称（装訂2、装訂3）該当するのでふさわ名称とはいえない。
- ・大和綴じを仮綴とする説
- ・袋綴を簡単にしたるものにして、いわゆる仮綴。表紙の上よりテープ・紙等にて綴じたるもの<sup>243</sup>。
- ・仮とじに近いが、わが国独得の装訂であるというのでできた称である<sup>244</sup>。

⑤ 結び綴・リボン結びの名称

装訂3の装訂名称について

「前後に表紙を添えて、右端を式箇所結び綴じにしたもの<sup>245</sup>。」「紐とか、数本の糸とかで飾り綴じをしたものである<sup>246</sup>。」「すべて合わせて飾り結びとする<sup>247</sup>」「表表紙の方で結び、飾りになるように、少し余して結び切りにしたものである<sup>248</sup>」「表紙の上から二ヵ所ほどを平打ちの紐か房紐のような紐で結び綴じにしたもの<sup>249</sup>」「紐または数本の糸で飾り綴じにする<sup>250</sup>」「リボン結びで綴じたもの・「リボン綴<sup>251</sup>」「リボン結び・リボン綴」という用語を使用しているのは、藤村だけである。説明に使用されている「リボン結び」、「飾り結び」がどのようなものを説明をしていない。「リボン結び」の用語は、広辞苑、学術用語辞典に記載のない用語である。リボンの結びかたには、多くあるので、どの結びをリボン結びと言っているのか特定できない。用語の説明に、定義されていない用語を使用している点で説明文として不適切である。リボンのむすびかた一般を指しているならば、この説明はじつにあいまいな説明になるので、より具体的な説明が必要である。「飾り結びにする」と動詞として使用している場合は、装飾的な結び方一般を指していることになる。山岸は、「紐とかリボンの類で、装飾的な綴じ方をした<sup>252</sup>」と説明しているが、このほうがよく特徴をとらえているといえる。

⑥ 大福帳装の名称

山岸は、装訂2の装訂名称として、「大和綴・大福帳仕立」として説明し、「漠然と大和綴と称せられている装幀のなかには、大福帳式のものもある」として、大和綴と称される装訂に二種類あることを説明している。

漠然と「大和綴」と称せられている装幀の中には、大福帳式のものもあるこの大福帳式のを、日本書誌学会では、かつて、「綴葉装」と、命名して、前記の如く、リボンや紐の類で、装飾的な綴じ方をした大和綴と、区別したこともあった。（中略）それにしても、卷子本とか粘葉装とか胡蝶装と言う名称に対立して、大福帳式の装幀にも、何らかの名称があつて然るべきと思う。わかりやすい名称としては、大福帳装などが最も適切かも知れない。（中略）「綴帖」や「列帖」が使い慣れなければ、わかり易いように、「大福帳装」と称してもよいかと思う<sup>253</sup>。

として、図版では、〔四ツ目大和〕・〔普通大和〕と並んで「判取帳」、「大福帳」の名



称を掲げて説明している<sup>254)</sup>。

・大福帳の名称についてはつぎのような記述がある。

- (1) 装訂名称として「大福帳」の名称は用していないが、料紙の処理の仕方と綴じ方の類似を吉澤義則は、第一種二を「丁度大福帳や洋書のように…<sup>255)</sup>」
- (2) 関西地方の商家に備付けてあった大福帳は全く此の綴方であった<sup>256)</sup>。
- (3) 袋帳綴：近世の商家の判取帳（受取帳）や大福帳にもっと、お多いものであるので、この装訂を「判取帳」という人もあり、また、「大福帳仕立」という人もある。だがこの装訂は判取帳だけでもなく、大福帳も多いし、大福帳葉また後述の長帳綴も多いので、何れにしても、判取帳や大福帳は装訂の名としては不適當と考える<sup>257)</sup>。
- (4) 上田は、「くさり（和装合本形式）」や「大福帳」・「判取帳」の帳面の綴じ方にも言及している<sup>258)</sup>。
- (5) 「大福帳装」という用語は、山岸の説明だけに見らる。

山岸徳平は「卷子本とか粘葉装とか胡蝶装と言う名称に対立して、大福帳式の装幀にも、何らかの名称があつて然るべきと思う。わかりやすい名称としては、大福帳装などが最も適切かも知れない<sup>259)</sup>。」と述べているが、書籍の装訂名と商人が使用する、「帳面」の装訂名称とを区別するのも一つの見解であるが、「和装資料の装訂名称」であれば、問題はないと考える<sup>260)</sup>。

⑦ 複合装訂之名称（装訂3のを装訂1、装訂2に加えて加工するとする見解）

装訂3の装訂方法について、橋本、櫛笥、藤本、杉浦の四氏はつぎのように述べている。

- (1) 橋本は、装訂1と装訂2の装訂名称を使用材料の糊綴じと糸綴じの別で区分しているのに対して、装訂3の名称説明に、「粘葉装・列帖装・袋綴の区別はなく、綴じられた上に表紙をつけ、表紙の右側約一センチぐらい内側のところを、立てに穴を二つずつ上下にあけ、紐とか、数本の糸とかで飾り綴じをしたものである<sup>261)</sup>。」と述べている。
- (2) 櫛笥は、結び綴（装訂3）について、「現在では大和綴と呼称されている装訂。料紙の折りに関係なく、即ち大和綴・粘葉装・袋綴のように折り、紙縫で下綴を行い、折った所を除いた三方を裁つ。（中略）表紙の右側に綴穴を上下に各二箇所開け、紐または数本の糸で飾り綴じにする。」と述べている<sup>262)</sup>。
- (3) 藤本は、「大和綴を装訂の種類と組み合わせると、大まかに次のようになる。〈綴葉装大和綴〉紙を重ね折利した括を重ねる綴葉装を大和綴にする。〈粘葉装大和綴〉一枚を半分に折り、折りの背のところ糊附する粘葉装を大和綴にする。〈列状装大和綴〉一枚ごとに重ねた列状装を大和綴にする。〈折紙装大和綴〉重ねた折紙を大和綴にする。〈折紙綴葉装大和綴〉折紙を重ね折利した括を重ね、大和綴にする。〈折紙装大和綴〉折本の折谷のところを大和綴とする。〈袋綴装大和綴〉袋綴装に大和綴をする。多くの写本に用いられている。大和綴はどの時代にもあり、どんな装訂でも利用できる<sup>263)</sup>。」と述べている。

(4) 杉浦は、「多くは他の方法を併用したり、あるいは他の方法で綴じた上に表紙を加える場合に用いたりする」と述べている<sup>264)</sup>。

橋本、櫛笥、藤本の三氏は、装訂3の装訂を装訂1、装訂2の装訂のうえにさらに装訂できる装訂方法であるとして、これまで、粘葉装、列帖装、結び綴（装訂1～3）が並列する別の装訂であるとの説明に対して新たらしい見解を示した。藤本孝一はさらに、ひとつの和本に複数の装訂がされている場合の装訂名称の混乱を「装」と「綴」に分けて名称を整理した。それまでは、装訂方法の説明と個々の和本の装訂名とが明確に区別されていなかった点を指摘している<sup>265)</sup>。

装訂3の装訂は複数の綴じ方がある。結ぶことは共通しているので、このことから「むすびとじ」という用語は妥当とも考えられる。

## 5. 説明の不備による混乱

装訂方法の不十分または適切でない説明により混乱が生じた。列挙すると次のようになる。

### 1) 仮綴じ・下綴じ・本綴じの区別

装訂3の説明に、「仮綴じの一種であるが<sup>266)</sup>」この説明にしたがえば、装訂3は、本綴じではなく仮綴じの一種になる。

### 2) 不十分な装訂方法の説明

料紙の処理方法（折り方、重ね方）と、綴じ方、綴じる場所まで、詳細に述べている説明が少ない。

装訂1は、加工材料が糊であることに特徴がある。[糊綴じ]

装訂2は、料紙の折り方、重ね方、糸とじの位置、糸のかけかた [綴じ方] に特徴がある。

装訂3は、料紙の折り方や重ね方には複数の方法がある。糸、紐、紙縫で綴じる装訂で、綴じる位置と綴じ方に特徴がある。

紙の折り方と、加工位置により、袋綴と単葉綴（藤本の列状）がある

表紙の付け方により、包み表紙、包背装と言われる装訂名称がある。

説明文に料紙の折り方、重ね方、加工材料、加工位置等の記述が省略（欠けている）されている記述が多いことが、複数の装訂方法に該当する乱れの原因にもなっている。

### 3) 言葉だけの説明や、示されている図（版）、写真の説明が適切でない説明が多い

藤本は、「百聞は一見に如かず」と云う諺を、書誌の場合で考えると、隔靴搔痒の感を伴って思い起こされる。現物を目の前にすれば一見してわかる世界を、文章のみによって説明しようとするのは至難の業である<sup>267)</sup>。といているが、その通りである。装訂3の綴じ方、糸のかがり方を詳細に載せているのは、三人だけである<sup>268)</sup>。「装訂方法」と「個々の和本の装訂名」の区別があいまいな説明がある。

装訂方法の説明に添えられている図版（サンプル図）は、出来上がった外形である。個々の和本には、複数の装訂方法がなされているのが普通である。それにも関わらず外形

を示す唯一の装訂名称の見本として示されていることが多い。このことは田中が『粘葉考』で指摘している<sup>269)</sup>。複数の装訂名称で制作されていることまで説明していない。特に装訂3の場合は、袋綴—結綴なのに、結綴としたり、はなはだしい場合の例では、装訂4の説明書きに、「線装本」や「四ツ目綴じ」や「袋綴じ」の装訂名称があるのにもかかわらず、ただ一つの装訂の例として、「袋綴」とし、別のところでは、「四ツ目手綴」の装訂図として使用している普通にみられる。別物と誤解されやすい記述もある。読者にとっては、同装異名ということがわかりにくい<sup>270)</sup>。

#### 4) 再現不可能な装訂方法の説明

著者が自分の手で製作し再現をして確認することなく、先人の説明文だけを引用し、間違った解釈が引き継がれたと判断される説明がある。説明に従って装訂を試みれば、再現不可能な説明であることが判明する記述である。実際に装訂に携わった人の説明文<sup>271)</sup>では、このような事はなく、実際に再現できる。田中敬は著書『粘葉考』の上巻を大和綴(装訂2)、下巻を粘葉綴(装訂1)で装訂をしている<sup>272)</sup>。このように実物標本といえるものを示している例は外にはみられない。

説明にしたがって装訂を再現(追体験することの意義)することの必要性。

- ・糊の濃薄、料紙の薄厚の差、糊代の幅、糊付箇所相違
- ・綴じ糸 種類(絹、木綿、麻)の別、太さ、色
- ・糸の長さ

綴じ糸の長さの説明で示される長さでは、実際に本を綴じることができない説明が多い。実際に綴じるときには、作業のため余分な長さを必要とする。説明文のなかには、解体した状態の糸の長さを示している場合が多い。この場合、本を綴じることができない。

- ・針

装訂2の製法に使用する針の数は、四本、二本、一本のいずれでもできるが、それを説明している記述は少ない。4本を使用する方法を唯一(特定)の方法しか説明していない著述が多い。

- ・切れ込み

装訂2の製法で、「穴をあける」、「切れ込みを入れる」二通りの説明があるが、切れ込みを入れるほうが、読書に便利(ページを広げやすい)だし、重ねた手前ほど切れ込みの幅が大きくなるので開きやすい。このような説明をしているのは藤井だけである<sup>273)</sup>。理屈にかなっており、装訂2の和本は多くは切れ込みになっている。「切れ込み」の項目だけでも各氏の説明に従って、装訂を再現してみると、他人の誤った記述があるにもかかわらず検証することもなく、借用している記述があることも判明する。この装訂は、針を2~4本使用し、複雑な綴じ方をする。糸が多く残されている一つの原因は、最後の糸を処理するとき、ゆとりがないと非常に綴じにくいのである。結果として装飾的に残されたと考えるのが妥当である。しかし、「いくらでもたせる

…<sup>274)</sup>「いくらでもたすことのできる大福帳」などの記述があるが、この綴じを再現してみればこのような見解は出ないはずである。

身近に和装本が存在した世代の人たちと、稀にしか手にしない世代では、予備知識に相違があり、出版された同時代の人たちには当然とされた知識も、時代を経ることにより十分に伝えられなくて正しくとらえられなかったことも考えられる。筆者（山中）が不十分な説明と判断している表現も、出版された同時代の人たちには当然とされる前提（予備知識）があったので、誤ってうけとられることがなかったとも推測できる。

#### 5) 読み方を示していない説明

読み方が複数あるのにもかかわらず、ルビをつけていない筆者が多いことも、混乱の一原因となった。「綴葉装」を「てつようそう」と読ませたり、「てっようそう」と読ませる。このような状態なのにルビがなくどう読ませるのか判別のつかない不十分・不親切な解説が多い<sup>275)</sup>。

#### 6) 用語使用上の問題

装訂名称を論じるのに、一般に使用されていない「用語」を執筆者が定義なしに、また、根拠を示すことなく、独自の名称を説明に使用している。例を挙げれば次のとおりである。打抜綴（田中）、房綴（田中）、リボン結び（藤森）、飾り結び（藤井）、結び切り（藤井）、飾り綴じ（櫛笥）、袋帳綴（藤井）、長帳綴（藤井）、列状装（藤森）、列丁（和田）、列帖（吉澤）、列葉装（長澤）

辞書にも記載のない用語を使用するのは問題であり、装訂名の説明に、定義もせずに別の装訂名を使用するという杜撰さもみられる。

山岸徳平は「卷子本とか粘葉装とか胡蝶装と言う名称に対立して、大福帳式の装幀にも、何らかの名称があつて然るべきと思う。わかりやすい名称としては、大福帳装などが最も適切かも知れない<sup>276)</sup>。」と述べているが、書籍の装訂名称と商人が使用する、「帳面」の装訂名称とを区別するのも一つの見解であるが、「和装資料の装訂名称」として論ずれば問題はないと考える。

装訂名称と個別の和本の装訂名称の説明が区分されないでなされている説明や、「装訂方法」と「個々の和本の装訂名」の区別があいまいな説明も見られる。



#### IV. 和装資料装訂名称の私案

##### 1. 現代の和本の装訂名称について提案

和本の装訂名称について、文献を個々に検討し、同種異名、異名同種、別称、異称、異名の整理を行った。その結果、装訂1～装訂3の装訂にふさわしい名称について、私案を示し①提案事項と②提案理由を述べる

###### 1) 用語「そうてい」の使用漢字

国立国会図書館の定義と同じ根拠で「装訂」を使用する<sup>277)</sup>。

###### 2) 和本と唐本の区分

和本と唐本の名称説明を区分することなく、説明されている場合が多い。混乱を招いてきた原因の一つであるので、和本の装訂名称と唐本の装訂名称を分け、和本には日本の装訂名称をつけ、唐本には中国式的名称を付与することによりこの混乱を避ける。このようにすると、我が国で考え出されたとする「装訂2」の装訂が中国で発見されたというが<sup>278)</sup>、唐本と和本の装訂を区別して論じれば装訂名称に何ら問題はおこらない。杉浦氏は「粘帖綴」のという用語を使用している<sup>279)</sup>。粘葉装の説明がない、唐本と和本の装訂を混同して説明しているのが原因である。杉浦氏は、粘葉装と同じものと考えますと答えている<sup>280)</sup>。和本と唐本の装訂名称の区別をしない説明をしているので、文脈からは、装訂2の和名が「粘帖綴」ということになる。「粘帖綴」の用語を使用しているのは、杉浦氏だけである<sup>281)</sup>。

つまり、和本の装訂名称は、装訂1の装訂名を「粘葉装」、装訂2の装訂名を「列帖装」、装訂3の装訂名を「結綴」とする。装訂1の装訂で、和本では、両面使用されているのが普通であるので、使用面の区別で装訂名の区別とする必要はない。(唐本の場合は、料紙が薄いので片面のみ印刷又は書写される。)。粘葉装と胡蝶装の区別を、書写されている面が片面か両面かにより区別をしている説<sup>282)</sup>については、使用面の区別は装訂方法とは無関係であるので、装訂方法の説明としてはふさわしくないから使用しない。このように定義すれば、用語「粘葉装」と「胡蝶装」の区別も明白になる。装訂1の装訂名について、糊付面が、全面糊付けか、数センチの幅で糊付されるのかの別、両面使用(書写・印刷)なのか片面使用なのかの区別は装訂名とは無関係である。

###### 3) 時代区分

時代により、使用する装訂名称を使い分けする。

過去の時代(平安・室町・江戸)に使用された装訂名称と現在使用する装訂名称を区別する。理由は①文献数が少ないこと②時代により名称が異となる、ことである。記述内容の解釈、記述された時代に人口に膾炙された名称であるかどうかの検証が抜けている。今後、より多くの文献を探索する必要がある。

洋装本の装訂方法と対比しなくてもよかった時代と現在では、事情が異なり、装訂の説明もそのことを前提として、文献の説明を考察しなければならない<sup>283)</sup>。記述された当時



(四ツ目綴、袋綴がごく手じかに存在した)では当たり前のことが、時代を経るに従い、十分に観察することなく、知識もないため誤ってとられた可能性もある。残存する資料が、江戸時代の四ツ目綴は袋綴が多いので、「袋綴」といえばこの四ツ目綴となる。装訂3の装訂も袋綴と同じ折り方をして綴じ方が異なるので袋綴の結綴としなければ、正しい装訂を表すことにならない。

#### 4) 不使用名称

同一の根拠で、複数の装訂名称になっている「胡蝶装」、「大和綴」の用語は、混乱を避けるために使用しない。

#### 5) 綴葉装の使用禁止

新造語「綴葉装」は、すでに述べた理由で、使用を止め、「列帖装」を使用する。

#### 6) 装と綴の区別使用<sup>284)</sup>

粘葉装は出来上がった和本の形体を示す装訂名であり、粘葉様式に作成(綴じる行為)が粘葉綴である。

#### 7) 表記を統一

複数ある表記は、装訂名称としては、体言止めにする。表記に、「大和綴」、「大和綴じ」、「大和とじ」の三種がある。これを「大和綴」に統一する。「とじ」は「綴」と書き「むすびとじ」は「結綴」と書くことにする<sup>285)</sup>。

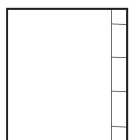
#### 8) 新用語の定義

当然のことであるが、説明に使用する適切な用語が無い場合には、定義をした上で訂名を説明する。藤本は、「一紙を一枚一枚重ねたもの。列状とは、一枚一枚を重ねた状態をいう。今までの書誌学で、一枚一枚重ねた状態を呼ぶ用語はみあたらない。」として、「列状装」という語を定めている<sup>286)</sup>。堀川貴司は、「紙を折らずに一枚のまま重ねて紙縫で綴じたもの。」を「単葉装」としている<sup>287)</sup>。

## 2. 図版サンプルの説明文について

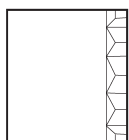
装訂名称の説明に示される和本が複数の装訂名称を持っているのに、そのうちの一つだけを付けている場合がほとんどである。

装訂4の図の説明に見られる装訂名の例



説明文：袋綴. 四ツ目綴. 線装本. 四針眼綴法 (これらの内の一つだけしか書かれていない。)

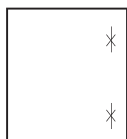
料紙の処理方法(袋訂)と綴じ方(四ツ目綴)の片方しか書かれていない例。  
和本の説明に唐本の名称を使用している例。(線装本. 四針眼綴法)



袋綴. 麻の葉綴. (どちらか一つだけしか書かれていない)

料紙の処理と綴じ方を別の装訂であるかのような誤解を招く例。

装訂3の図の説明に見られる装訂名の例



結び綴じ (これしか書かれていない)

併記してあれば、問題はないが、一つの名称のサンプルとして示している。

藤本は、「粘葉装・結び綴じ」と表示をして、「元装は粘葉装であったが、のちに結び綴じに改装した。」とか「列帖装・結綴」と表示をして、「列帖装にさらに結綴がほどこされている。」というように言っている<sup>288)</sup>。これらの説明は、外形だけの判断で結綴としないための措置として考えられたものであり正確で丁寧な説明である。

## V. 個別の和本の装訂名称付与についての私案

### 1. 「装」と「綴」の組合せ表記

藤本は和本の装訂名称を「装」と「綴」とを分け、この組み合わせで、装訂3を説明している。つまり、装訂3はどのような装訂にも使用されていることを装と綴の組み合わせで表記することを提案している<sup>289)</sup>。

筆者は、和資料の装訂名称には、「粘葉綴じ」、「列帖綴じ」、「結び綴じ」の名称を使用することを提案する。「粘葉装」は出来上がったものの装訂名であり、粘葉様式に作成（綴じる行為）が粘葉綴である。できあがった和本の形態が、粘葉装であり、その和本が「粘葉装本」となる。

### 2. 個別の和本の装訂名称解説文への提案

一つ一つ個別の和本の装訂名称の解説文はこれまで、「装訂方法」の名称説明と、「個々の和本」の解説につけられる装訂名称の区別が不十分であったので、筆者は、藤本の提案を発展させ、個別の和本の装訂解説には次のように「料紙の折り方」、「装訂材料」、「装訂方法」を記載することを提案する。

- ①料紙の加工方法 (料紙の折り方・重ね方・加工箇所)
- ②装訂材料 (糊・糸・紙 (紙縫り)・平紐など)
- ③装訂方法 (のりづけ、糸とじ、紐とじの方法)

この3項目を組み合わせた装訂名称にすることを提案する。

さらに、綴じ糸・紐の色別も加えればその和本の属性をよりくわしく明らかにすることができる。これまでの説明では、料紙の扱いについて詳しく言及している筆者は少ない。料紙の扱い (折り方、重ね方)、装訂 (加工) 材料、装訂 (加工) 位置、これらを組合せ該当する和装本 (和装資料) の名称を一覧表にしたのが表Yである。個々の和本の装訂名称は、これらを組合せた、装訂名称になる。

筆者の見解による表記としては、「粘葉装—糊綴—包表紙」（粘葉装の包表紙）、「粘葉装—糊・糸綴—四ツ目綴」、「粘葉装—糊・紐—結び綴」粘葉装の結綴）、「単葉—糸綴—四ツ目綴じ」、「袋綴—糸綴—四ツ目綴」、「袋綴—紐綴—結び綴」、「二つ折り重ね—糸綴—四ツ目綴じ」、「重ね折り—紐綴—結び綴」、「粘葉装—糊綴—結び綴」、「列帖装—紐綴じ—結び綴」、「袋綴—糸綴—麻の葉綴」、「袋綴—糸綴—康熙綴じ」、「袋綴—糸綴—亀甲綴じ」、「袋綴—糸綴—朝鮮綴じ」、「単葉装—糸綴—四ツ目綴じ」、「単葉装—紐綴—結び綴」などである。袋綴は糸綴じが普通であるから、「糸綴」を省略してもよい。単葉の場合や複葉の場合には、上記の組み合わせの表記が必要となる。

料紙を一枚一枚重ねないで（折って重ねないで）綴じる場合、藤本は列状装という語を使用し、堀川は単葉装という語を使用している。

さらに、「双葉列状装—紫糸綴—結び綴」本、「単葉装—紫紐—結び綴」本、四ツ目綴の場合、「袋綴—白糸綴—四ツ目綴」本、等の名称説明にすれば、個々の和本の属性を詳しく表記できる。

## VI. おわりに

和本の装訂名称について、同名異装、異名同装、通称、別名（称）、異称が非常に多いことは、長澤規矩也は「書誌学上の用語について<sup>292)</sup>」で次のように述べている。

書誌学という学問は、ごく最近に急速にお発達したものであるから、書誌学上語には曖昧なものが多く、使用する人によって、同一語の含む概念を異にすることが少なくない。

又、中には職人仲間の俗な言葉はあっても、我々が文章の中で用ゐるにはふさわしくなかつたり、甚しいものは、殆どなかつたりする。そこで、我が日本書誌学会では、先年来、用語の統一及び制定を図った。

これが書かれたのは1939年のことである。70年余年を経過した現在においても、和本の装訂名称に適切な用語が不足している状態が続いている。

和本資料の装訂用語（装訂名称、読み方、表記法）の問題点として、同名異装、異名同装の問題について、昭和期の論争を20件の執筆者の著作物を年代順にとりあげ、さらに、日本を代表する、国立国文学研究所、国立国会図書館の見解件のをとりあげ、和本装訂名称が混乱してきた現状と原因を各氏の見解について、管見により分析し、説明が十分でないところを序論で筆者が定義した装訂方法をもとに個々に論述した。①料紙の折り方、②重ね方、③加工材料、④加工位置を明確に記述していないため受け取り方によっては、複数の装訂名称に該当することになった、混乱の一原因となったことを明らかにした。次に解決策としての私案を提示した。問題点をとりあげ、解決策として試案を提示した。

### 1. 公的機関の見解

#### 1) 国文学研究資料館の解説文<sup>290)</sup>

平成2 (1990) 年に開催された、「国文学研究資料館 第44回常設展示 和書のさまざま」の解説を一覧表にすると次のようになる。

┌ ├ └	粘葉装 (でっちょうそう) 二つ折りにした料紙を重ね合わせ、折目の部分を糊付けしたもの	装訂 1
	列帖装 (れっちょうそう) 数枚の料紙を半分に折って一括りとし、数括りの折目の部分を糸で綴じ合わせたもの 綴葉装 (てっちょうそう) と呼ばれる	装訂 2
	大和綴 (やまととじ) 表紙の上から <u>結び綴じ</u> にしたもの。歌書などの装訂に見られる	装訂 3

装訂2の装訂方法を「列帖装」としており、括弧内に「綴葉装」とある。装訂3の装訂方法を「大和綴」としている。

平成15 (2003) 年に開催の、「国文学研究資料館 ヴァーチャル展示 和書のさまざま」の解説を一覧表にすると、次のようになる。

┌ ├ └	粘葉装 (でっちょうそう) 料紙を二つに折って重ね、その折目の外側どうしを糊付けして、背を表紙で覆った本。完全に開く見開きと、糊付け部分までしか開かない見開きとが、交互に現われます。	装訂 1
	列帖装 (れつじょうそう/れっちょうそう) 料紙を数枚〜10枚ほど重ねてから二つ折りにし、数くりを重ね、折り目の部分に穴をあけて糸で綴じ、表紙を付けた本。綴葉装ともよばれます。装訂 2	
	結び綴 (むすびとじ) 表紙の右端から一センチぐらいのところに穴を開け、紐や糸を通して結ぶ綴じ方。 <u>列帖装や袋綴本を綴じる方法の一つです</u> 。大和綴とも呼ばれます。	装訂 3

1990年の解説の、「大和綴」が2003年の解説では、「結び綴 (大和綴)」と変更になり、装訂3の資料が図示されている。説明には、「表紙の上から結び綴じにしたもの。」とあり、「結び綴じにした装訂」だから「結び綴じ」というようにとれる。装訂3の装訂に、装訂5や装訂6があることを説明していない。(四ツ目大和 仮綴じの参照図が必要)の区別がつかない。結び綴を「列帖装や袋綴本を綴じる方法の一つです。」として、装訂2や装訂4の装訂された本にさらに(二重)に装訂できることを説明している。別称を大和綴とも呼ばれますとしている。双葉列帖装 (そうようれつじょうそう)の説明として、料紙を二つに折り、さらに其の折り目を下端にしてふたつにおり、列帖装に仕立てた本。また、折紙列帖装・折紙綴葉装 (おりがみてつようそう)とも呼ばれます。とある。外形が装訂2であっても、料紙の折り方により、装訂名が異なることを示している。

2) 国立国会図書館の解説文<sup>291)</sup>

粘葉装	粘葉装 (でっちょうそう)	料紙を二つに折って重ね、その折り目の外側どうしを糊付けにして、背を表紙で覆った本。	装訂 1
	列帖装 (れつじょうそう/れっちょうそう)	料紙を数枚から十枚ほどを重ねてから二つ折りにして「一くくり」とし、これを数くくり重ねて、折り目の部分に穴を開けて糸で綴じ、表紙を付けた本。 綴葉装とも呼ばれる。	装訂 2
	結び綴 (むすびとじ)	表紙の右端から 1 c m位のところに穴を開け、紐や糸を通して結ぶ綴じ方を結び綴といいます。列帖装や袋綴本を綴じする方法の一つ。大和綴ともよばれます。	装訂 3
袋綴		二つ折りにした料紙を重ね、折目の反対側を綴じた本を袋綴といいます。	

粘葉装の説明で、「背を表紙だ覆った本」とあるが、これは「包背装」になるのではないか。「粘葉装の包背装」というべきである。列帖装の説明で穴の数、綴じ方についての説明が十分でない。結び綴では、「列帖装や袋綴本 綴じする方法の一つ」とあるが、列帖装や袋綴をした本にさらに装訂する方法にとれる。(料紙の折り方はそうなのであるが) 料紙の折り方、重ね方の説明が不足しており誤解を招きかねない記述である。どちらの見解も、綴葉装ではなく、列帖装としている。

最後に、国文学研究資料館と国立国会図書館の見解を挙げたが、20世紀これまで多くの研究が発表された。現段階では、装訂1の名称は、「粘葉装」、装訂2の名称は「列帖装」、装訂3の名称は「結び綴」がふさわしい考える。

## VII. 今後の課題

- 1) 装訂名称の根拠として取り上げられた文献の解説および、俎上にあげられた、原資料を、新たな視点、①料紙の折り方、重ね方 ②使用材料 ③加工箇所をもとに読み返し再検討すること。
- 2) 紙面の関係で、和本の装訂名称のうち同名異種、異名同種のものを取りあげた。  
和装資料の装綴には、名称のないものもある。これらを調査して、ふさわしい名称付与すること。
- 3) 平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代等の各時代に、和本の装訂がどのように呼ばれていたかを論究すること。

以上



注・引用文献

- 1) 「そうてい」の漢字には、「装丁」、「装幀」、「装訂」、「装釘」がある。  
「丁」は、釘を上または横から見た形であるという。  
「幀」は、絹地にかいた絵。それを貼り付けて、仕立てること。  
「訂」は、正当に議する意。ひいてただす意。  
「釘」は、くぎを意味している。「角川綴和中辞典」  
「丁」6 広辞苑掲載ページ「綴」849 「訂」1004 「釘」1121 常用漢字以外の漢字「幀」329 常用漢字以外の漢字  
そうてい 【装丁・装×釘・装×幀】×常用漢字以外の漢字(岩波 国語辞典 第6版 2005)  
本論では、「装(よそお)い訂(さだ)める」の意の「装訂」が正しい用字とする広辞苑第五版1551pに従い、「装訂」の字を使用する。  
ほかに、装潢という語を使用する人もいる。  
国立国会図書館のHPの解説では、「装丁」「装幀」と書かれることもありますが、「まとめる」「きちんとする」という意味の「訂」をを用い、「装訂」と表記するのが妥当とされます」とある。
- 2) 藤森馨「古典籍装訂用語の整理に関する試論」『図書館雑誌』Vol. 98, No. 2, 2004. p. 107.
- 3) 具体的な装訂方法(料紙の揃え方、重ね方、折り方)は、実際に装訂にたずさわった人の著書(いかに示す)の説明に従って、著者が実際に各装訂方法を実践した。  
上田徳三郎『製本乃輯』1941.  
山岸徳平『書誌学序説』岩波書店, 1977.  
池上幸二郎・倉田文夫『本の作り方』主婦と生活社, 1979.  
橋本不美男『原点をめざして 古典文学のための書誌』笠間書店, 1974.  
遠藤諱之輔『古文書補修六十年』汲古書店, 1987.  
中野三敏『書誌学談義 一江戸の版本一』岩波書店, 1995.  
吉野敏武『古典籍の装幀と造本』印刷学会出版部, 2006.
- 4) 参考文献一覧参照
- 5) 和田維四郎『訪書餘録』著者私刊本, 1918, p. 51-52.
- 6) 山岸徳平『書誌学序説』岩波書店, 1977, p. 99.
- 7) 吉澤義則「和漢書の装潢に就いて」『図書館雑誌』42号1920, p. 419-433.
- 8) 同上 p. 422.
- 9) 同上 p. 425.
- 10) 同上 p. 426.
- 11) 同上 p. 428.
- 12) 同上 p. 426.
- 13) 同上 p. 425.
- 14) 田中敬『粘葉考一蝴蝶装と大和綴一上下』早川書店, 1932.
- 15) 同上 p. 5 「第一図に蝴蝶装(粘葉)の構造」として装訂1が示されている。
- 16) 同上 p. 9.
- 17) 同上 p. 10.
- 18) 同上 p. 69.
- 19) 同上 p. 71.
- 20) 同上 p. 72.
- 21) 同上 p. 78.
- 22) 同上 p. 68.
- 23) 同上 p. 11.
- 24) 『書誌学』第参卷第五号 用語集1934, 9, p. 55-56 (1934(昭和9)年10月日本書誌学会例会で可決)  
「昭和七年新刊書誌学関係書籍批判座談會速記録(昭和8年1月28日)」書誌学 1巻2号 1933, 3, p. 27-58 『書誌学』第参卷第貳号1934, p. 58 『書誌学』三卷五号1934 p. 54-56, p. 55「本会(日本書誌学会)制定術語原案」『書誌学』昭和9年11月「日本書誌学会制定術語」『書誌学会』昭和14年2月。

- 25) 「書誌学 第壹卷 第弍号」 p. 57-58.
- 26) 「書誌学 第壹卷 第弍号」 p. 58.
- 27) 綴葉装 この装訂は、大和綴じとも胡蝶装とも呼ばれることがあったので、混乱を避けるため、日本書誌学会で定めた術語。『日本古典籍書誌学辞典』1999, p. 406.
- 28) 『書誌学第参卷第五号』 p. 52.
- 29) 同上
- 30) 上田徳三郎著；武井武雄図解『書窓 製本乃輯』『製本乃輯』アオイ書房, 1941, 40丁「書窓」第11卷2号
- 31) 同上 p. 31. 図
- 32) 同上 p. 29. 図
- 33) 同上 p. 38. 図
- 34) 同上 p. 31.
- 35) 同上 p. 34.
- 36) 同上 p. 40.
- 37) 田中敬『粘葉考—胡蝶装と大和綴—』（復刻版）早川書店, 1932, p. 11.
- 38) 長澤規矩也『書誌学序説』増補再販 吉川弘文館, 1970.  
『図解図書学 図書学参考図録入門編1』汲古書院, 1974.  
『古書のはなし—書誌学入門—』富山房, 1976.
- 39) 『書誌学序説』 p. 47.
- 40) 同上 p. 49.
- 41) 同上 p. 57.
- 42) 長澤規矩也『図解図書学』 p. 52.
- 43) 長澤規矩也『図解図書学 図書学参考図録入門編1』汲古書院, 1974, p. 54.
- 44) 長澤規矩也『図解書誌学入門（図書学図録入門編4）』 p. 6.
- 45) 長澤規矩也『古書のはなし』 p. 19.
- 46) 同上 p. 20.
- 47) 同上 p. 23.
- 48) 長澤規矩也『書誌学序説』吉川弘文館, 1960, p. 58.
- 49) 『図解図書学』 p. 7. p. 60.
- 50) 『図解書誌学入門』 p. 8.
- 51) 長澤規矩也『古書のはなし—書誌学入門—』富山房, 1976, p. 20.
- 52) 同上 p. 23.
- 53) 同上 p. 23.
- 54) 『図解 書誌学入門』 大和とじ（結びとじ） p. 8.
- 55) 『書誌学序説』では、大和綴、結び綴 p. 58.
- 56) 『図解図書学 図書学参考図録入門編』 p. 60.
- 57) 川瀬一馬『日本書誌学概説増訂版』凸印刷, 1972.
- 58) 同上 p. 111.
- 59) 同上 p. 111.
- 60) 同上 p. 112.
- 61) 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』雄松堂, 1982.
- 62) 同上 p. 198.
- 63) 同上 p. 197.
- 64) 同上 p. 272.
- 65) 同上 p. 282.
- 66) 橋本不美男『原典をめざして—古典文学のための書誌—』笠間書店, 1974.
- 67) 同上 p. 73.
- 68) 同上 p. 93-94.
- 69) 同上 p. 95. 『通雅』中国明時代の方以智の著作

- 70) 同上 p. 96.
- 71) 同上 p. 96.
- 72) 山岸徳平が提唱されたテクニカル・タームであると記述があるが、長澤規矩也が『古書の話—書誌学入門—』p. 20で、「国文の人たちの中には、列帖装又は列葉装と呼ぶ人がある」と記載がある。それについての論述はない。
- 73) 同上 p. 97.
- 74) 同上 p. 105.
- 75) 山岸徳平『書誌学序説』岩波書店, 1977.
- 76) 同上 p. 82.
- 77) 同上 p. 83.
- 78) 同上 p. 83.
- 79) 同上 p. 84.
- 80) 同上 p. 102.
- 81) 同上 p. 102.
- 82) 同上 p. 104.
- 83) 同上 p. 104.
- 84) 同上 p. 103.
- 85) 池上幸二郎・倉田文夫『本の作り方』東京主婦と生活社, 1979.
- 86) 同上 p. 59.
- 87) 同上 p. 61.
- 88) 同上 p. 44.
- 89) 遠藤諦之輔『古文書補修六十年』汲古書店, 1987.
- 90) 同上 p. 75.
- 91) 同上 p. 192.
- 92) 同上 口絵 p. 10.
- 93) 同上 p. 77.
- 94) 同上 p. 192.
- 95) 同上 口絵 p. 11.
- 96) 同上 p. 192-193.
- 97) 同上 p. 119-120.
- 98) 同上 p. 120.
- 99) 同上 p. 75-84.
- 100) 同上 p. 194.
- 101) 藤井隆『日本古典書誌学総説』和泉書院, 1991.
- 102) 同上 p. 60.
- 103) 同上 p. 61.
- 104) 同上 p. 63.
- 105) 同上 p. 64.
- 106) 同上 p. 64.
- 107) 同上 p. 69.
- 108) 同上 p. 63.
- 109) 中野三敏『書誌学談義—江戸の版本—』岩波書店, 1995.
- 110) 同上 p. 83.
- 111) 同上 p. 83.
- 112) 同上 p. 84-87.
- 113) 同上 p. 96.
- 114) 同上 p. 86.
- 115) 同上 p. 87.

- 116) 榊節男「大和綴について—歴史資料からの検証—」『書陵部紀要』第48号, 1996, p. 64.
- 117) 榊節男『書庫渉獵』おうふう, 2006.
- 118) 榊節男「大和綴について—歴史資料からの検証—」『書陵部紀要』第48号, p. 80.
- 119) 同上 p. 80.
- 120) 同上 p. 80.
- 121) 吉澤は、装訂3については述べていない。
- 122) 榊節男『書庫渉獵』おうふう, 2006, p. 27.
- 123) 同上 p. 31.
- 124) 同上 p. 30.
- 125) 榊節男「大和綴について—歴史資料からの検証—」『書陵部紀要』書陵部1996, p. 80.
- 126) 廣庭基介、長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』世界思想社, 1998.
- 127) 同上 p. 63-65.
- 128) 同上 p. 65.
- 129) 同上 p. 69-71.
- 130) 同上 p. 56. 図参照
- 131) 中藤靖之『古文書の補修と取り扱い』雄山閣, 1998.
- 132) 同上 p. 28.
- 133) 同上 p. 28.
- 134) 同上 p. 33.
- 135) 同上 p. 33.
- 136) 藤本孝一『日本の美術9』No. 436, 2002.
- 137) 同上 p. 51.
- 138) 同上 p. 51.
- 139) 同上 p. 54.
- 140) 同上 p. 54.
- 141) 同上 p. 57.
- 142) 同上 p. 57-58.
- 143) 同上 p. 59の図から一部抜出作成した。
- 144) 同上 p. 59欄外説明文
- 145) 同上 p. 54.
- 146) 同上 p. 57.
- 147) 同上 p. 54.
- 148) 同上 p. 58.
- 149) 同上 p. 50.
- 150) 同上 p. 59.
- 151) 杉浦克己『改訂版書誌学』放送大学教育振興会, 2003.
- 152) 同上 p. 35.
- 153) 同上 p. 36.
- 154) 同上 p. 36.
- 155) 同上 p. 37.
- 156) 「書記面を内側にして料紙を半分に折り、外側面の全面または一部分をのり付けにした装丁を指す用語としては、「粘帖装」の語は、中国の書籍装丁を表す用語として比較的ポピュラーであり、我邦での用例もさほど希有なものではないと理解しております。」2005, 2 h170219 杉浦
- 157) 長澤規矩也『書誌学序説』p. 57.
- 158) 藤森馨「古典籍装訂用語の整理に関する試論」『図書館雑誌』Vol. 98. No. 2. 2004, 2. p. 106-108.
- 159) 同上 p. 107-108.
- 160) 同上 p. 106-107.
- 161) 同上 p. 107.

- 162) 同上 p. 107.  
 163) 同上 p. 107.  
 164) 吉野敏武『古典籍の装幀と造本』印刷学会出版部, 2006.  
 165) 同上 p. 62.  
 166) 同上 p. 66.  
 167) 同上 p. 83.  
 168) 同上 p. 118.  
 169) 堀川貴司『書誌学入門—古典を見る・知る・読む—』勉誠社, 2010.  
 170) 同上 p. 30. 粘葉装 p. 30. 列帖装 p. 32. 折紙列帖装 p. 35. 長帳綴 p. 35. 大和綴 p. 35. 単葉装. p. 32. 袋綴  
 171) 『通雅』中国明時代の方以智雲の著作「粘葉 謂蝴蝶装」と記している。  
 172) 『王氏談録』王洙 中国宋時代  
 173) 『書林清話』  
 174) 『烈女傳跋』阮福 (清代)  
 175) 『疑耀』卷五張萱 (明)  
 176) 『書林清話』葉德輝 (清末～明國)  
 177) 『三英隨筆』(文化2年) 望月三英著 (明和六 (1769) 年没)  
 大和とちと言書物有之 先は歌書古へ多く有り、町人の覚帳も大和とち也。さては和法かと思ふに、左に非ず。阿蘭陀本草、大和とち也。又、宋板の千金翼方と揚子家藏方と、御文庫に有之御本は、唐本の大和とちなり。扱は、唐より初りて外国へも伝たりと見えたり、此のとち様の名目、阿蘭陀にても何とちとか云成べし。中華の名目を博識人に数人聞たれど考無之由、名物六帖などにも出づとやらん、申人も有云々。」山岸徳平『書誌学序説』 p. 104.  
 「町人の覚帖」といふは多分商家の賣上を記しておく臺帳のことであろうが關西地方の商家に備附けてあった大福帳は全く此の綴方であった。田中敬『粘葉考』 p. 11.  
 「大和とちと言書物有之 先は歌書古へ多く有り、町人の覚帖も大和とち也」とあるのが初例であるらしい。中野三敏『書誌学談議—江戸の版本—』 p. 86.  
 178) 『好古抄録下』「粘葉は胡蝶装也」  
 江戸時代には、「粘葉は胡蝶装也」という、中国での理解もそのまま行われていた。廣庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』 p. 65.  
 179) 『好古小録雜考第二十二』藤井貞幹は、明の方以智の著「通雅」を拠って粘葉は蝴蝶装也とって居る。田中敬『粘葉考』 p. 21.  
 180) 『駿府政事録』  
 181) 『寒檠鑲綴』浅野長祚  
 182) 『近聞寓筆卷三』吉田篁墩 田中敬『粘葉考』 p. 122.  
 183) 『難波江』岡本保孝 田中敬『粘葉考』 p. 22.  
 184) 『米菴墨談』続編三 市川米菴 田中敬『粘葉考』 p. 23.  
 185) 『守武千句』荒木田守武 (室町末期の人)  
 この名称、「大和綴」は荒木田守武 (室町末期の人) の「守武千句」のうち第六唐何に記されているが、どのような綴じ方かはっきりしない。橋本不美男『原典をめざして』 p. 104.  
 186) 『和漢名数』貝原益軒 (1695年刊) 此の中に「紫糸ムスビトヂ」という記述がある。藤村馨「図書館雑誌」 Vol. 98. No. 2. p. 107.  
 187) 山岸徳平『書誌学序説』 p. 82.  
 188) 池上幸二郎・倉田文夫『本のつくりかた』 p. 59.  
 189) 『本の作り方』池上幸二郎、倉田文夫 p. 59.  
 190) 橋本不美男『原点をめざして—古典文学のための書誌—』 p. 93.  
 191) 長澤規矩也『書誌学序説』 p. 47.  
 192) 川瀬一馬『日本書誌学概説』 p. 111.  
 193) 山岸徳平『書誌学序説』 p. 83.



- 194) 池上幸次郎・倉田文夫『本の作り方』 p. 59.
- 195) 橋本不美男『原点をめざして—古典文学のための書誌—』 p. 96.
- 196) 遠藤諦之輔『古文書補修六十年』 p. 10.
- 197) 櫛笥節男『書庫渉猟』 p. 27.
- 198) 広庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』 p. 65.
- 199) 同上
- 200) 杉浦克己『改訂版書誌学』 p. 35.
- 201) 遠藤諦之輔『古文書修補六十年』 p. 192.
- 202) 杉浦克己『改訂版書誌学』 p. 36.
- 203) 長澤規矩也『古書のはなし—書誌学入門』 p. 20.
- 204) 長澤規矩也『図解書誌学入門』 p. 6.
- 205) 遠藤諦之輔『古文書修補六十年』 p. 192.
- 206) 同上
- 207) 吉澤義則『和漢書の装潢に就いて』 p. 425.
- 208) 長沢規矩也『古書の話』 p. 20.
- 209) 川瀬一馬『日本書誌学概説』 p. 111.
- 210) 川瀬一馬『日本書誌学辞典』 p. 197.
- 211) 川瀬一馬『日本書誌学辞典』 p. 197.
- 212) 藤井隆『日本古典書誌学総説』 p. 61.
- 213) 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』 p. 198.
- 214) 田中敬『粘葉考』 p. 71.
- 215) 山岸徳平『書誌学序説』 p. 103.
- 216) 橋本不美男『原典をめざして—古典文学のための書誌—』 笠間書店, 1974.
- 217) 櫛笥節男『大和綴について—歴史資料からの検証—』 p. 31.
- 218) 櫛笥節男『書庫渉猟』 p. 31.
- 219) 吉澤義則『和漢書の装潢について』『図書館雑誌』 42号, p. 426.
- 220) 田中敬『粘葉考 上下 (復刻版)』 早川書店, 1932, p. 10.
- 221) 中野三敏『書誌学談議—江戸の版本—』 岩波書店, 1995, p. 96.
- 222) 同上
- 223) 長澤規矩也『古書のはなし—書誌学入門—』 p. 23.
- 224) 川瀬一馬『日本書誌学概説』 p. 112.
- 225) 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』 p. 282.
- 226) 廣庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』 pp. 69-71.
- 227) 長澤規矩也『図解書誌学入門』 p. 8.
- 228) 中野三敏『書誌学談議—江戸の版本—』 p. 86.
- 229) 藤井隆『日本古典書誌学総説』 p. 64.
- 230) 田中敬『粘葉考』 p. 52-54.
- 231) 山岸徳平『書誌学序説』 p. 105.
- 232) 藤森馨『古典籍装訂用語の整理に関する試論』『図書館雑誌』 Vol. 98, No. 2, p. 107.
- 233) 山岸徳平『書誌学序説』 p. 91.
- 234) 藤森馨『古典籍装訂用語の整理に関する試論』『図書館雑誌』 Vol. 98, No. 2, p. 107.
- 235) 田中敬『粘葉考』 p. 12.
- 236) 同上 p. 66.
- 237) 書誌学一卷二号 p. 40.
- 238) 同上 p. 41.
- 239) 山岸徳平『書誌学序説』 p. 102.
- 240) 橋本不美男『原典をめざして』 p. 107.
- 241) 『日本書誌学会』 第壹卷第貳号, p. 57.

- 242) 長澤規矩也『古書のはなし—書誌学入門—』p. 20.  
 国文の人たちの中には、列帖装又は列葉装と呼ぶ人がある。この場合、用紙は厚く、両面に書かれたり、刷られたりしている。
- 243) 日本書誌学会制定術語「書誌学」第拾貳卷第貳号, p. 13.
- 244) 長澤規矩也『古書のはなし—書誌学入門—』p. 23.
- 245) 川瀬一馬『日本書誌学概説』p. 112.
- 246) 橋本不美男『原典をめざして』p. 105.
- 247) 藤井隆『日本古典書誌学総説』p. 61.
- 248) 同上 p. 64.
- 249) 中野三敏『書誌学談義—江戸の版本—』岩波書店, 1995, p. 96.
- 250) 櫛笥節男『大和綴について—歴史資料からの検証—』p. 86.
- 151) 藤村馨「古典籍装訂用語の整理に関する試論」『図書館雑誌』Vol. 98, No. 2, p. 107.
- 252) 山岸徳平『書誌学序説』p. 102.
- 253) 同上 p. 103.
- 254) 同上 p. 287.
- 255) 吉澤義則『和漢書の装潢について』p. 425.
- 256) 田中敬『粘葉考』p. 11.
- 257) 藤井隆『日本古典書誌学総説』p. 64.
- 258) 上田徳三郎『製本乃輯』p. 38-91.
- 259) 山岸徳平『書誌学序説』p. 103.
- 260) 「町人の覚帖」というのは多分商家の売上を記しておく台帳のことであらうが、関西地方の商家に備付けてあった大福帳は全く此の綴方であった。田中敬『粘葉考』p. 10.
- 261) 橋本不美男『原典をめざして—古典文学のための書誌—』p. 105.
- 262) 櫛笥節男『書庫渉猟』p. 30.
- 263) 藤本孝一『日本の美術9』p. 57.
- 264) 杉浦克己『改訂版書誌学』p. 37.
- 265) 藤本孝一『日本の美術9』p. 48.
- 266) 広庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』p. 69.
- 267) 藤本孝一『日本の美術9』p. 48.
- 268) 橋本不美男『原典をめざして—古典文学のための書誌』池上幸二郎・倉田文夫『本の作り方』遠藤諦之輔『古文書補修六十年』
- 269) 田中敬『粘葉考』p. 12. 「唯斯うして糸で綴じたものを表裏—続きの外表紙を以て糊着けにして包装してあるものが往々にしてあり、外観だけでは一見粘葉綴のように見える所から、内部の構造を精細に調査せずして、粘葉装と誤認することがあったと思はれる。」
- 270) 美術館、博物館の展示の解説でも一冊の和本に複数の装訂名を併記している例を寡聞にして知らない。
- 271) 複雑な糸のかがり方をする装訂2の解説は、橋本・倉田『本の作り方』は写真が添えられている。遠藤『古文書補修六十年』もわかりやすい。
- 272) 田中敬『粘葉考』「本書の装綴は、上巻は大和綴、下巻は粘葉装で、下巻の末の方は純然たる胡蝶装である」田中敬『粘葉考』凡例
- 273) 藤井隆「各折の折目に外側から、三ミリ程刃物で切込んで（錐の丸い穴のものもあるが綴葉装（装訂2）は鳥の子のような厚手の斐紙が原則なので、本を開いた時、切込みの穴であると外側程大きく綴糸が動くことが可能で、開き易い為である。『日本古典書誌学総説』p. 61.
- 274) この一折りずつ幾らでも継ぎ足すことが可能な型式というものは、要するに最初から全体の分量が決定しておらず、どんどん増殖していく可能性のある書物の場合にきわめて有効性を発揮する。中野三敏『江戸の版本』p. 89.
- 275) とりあげた21点のうち、ルビのついているのは13点であった。
- 276) 山岸徳平『書誌学序説』p. 103.
- 277) 国立国会図書館HP 2012. 12. 16.

- 書物の製本の仕方を装訂といいます。「装丁」「装幀」と書かれることもあります。「まとめる」「きちんとする」という意味の「訂」を用い「装訂」と表記するのが妥当とされています。
- 278) 「日本で考案されたので列帖装を大和綴じともいってきたが、最近是中国宋初の敦煌出土経にこの形があることがわかり、やはり中国伝来ということになってきた」橋口侯之介『和本入門』2005, p. 33.  
「日本固有の装訂と言われていましたが、中国に古い遺品があります」堀川貴司『書誌学入門』2010, p. 30.
- 279) 杉浦克己『改訂版書誌学』p. 35.
- 280) 杉浦氏からの回答による。
- 281) 杉浦克己『改訂版 書誌学』p. 35.
- 282) 料紙の厚さを根拠に、唐本では片面使用、和本では両面使用が多い。
- 283) 「今のノートブックのような綴じ方」、「洋書のかかりに似て」と説明文にあるが、現代の若者にどれだけ理解できるかを考えれば明白である。
- 284) 藤本孝一『日本の美術9』No. 436, p. 59.
- 285) 装訂名称は「名詞」として、送り仮名をつけない表記にした。
- 286) 藤本孝一『日本の美術9』No. 436, p. 54.  
藤本が言うように、「列帖装」と紛らわしい用語であるが。
- 287) 堀川貴司『書誌学入門—古典籍を見る・知る・読む—』勉誠出版社, 2010, p. 35.
- 288) 藤本孝一『日本の美術9』No. 436, p. 57. この説に賛同する。
- 289) 藤本孝一『日本の美術9』p. 57.
- 290) 国文学研究資料館の解説文HP  
第61回常設展示（平成7年6月12日～9月8日）「和書のさまざま」の解説には上部以外に、折紙列帖（おりがみれっちょう）：料紙を先ず二つに折り、其の折り目を下端にした列帖装の解説が加わっている。1995.
- 291) 国立国会図書館HP 2012. 11. 20.
- 292) 『書誌学第12巻2号』1939. 2, p. 1.

#### 参考文献（刊行年順）

1. 1918 和田維四郎『訪書余録』著者私刊本1918（薪装複製版 臨川書店 1978）
2. 1920 吉澤義則『和漢書の装潢について』図書館雑誌42, 1920. 7. p. 1-14.
3. 1932 田中敬『粘葉考 上下』1932, 覆刻版 早川書店
4. 1933 『書誌学』第壹卷第貳号「昭和七年新刊書誌學関係書籍批判座談會速記録（昭和8年1月28日）」
5. 1933 『書誌学』第壹卷第參号
6. 1934 『書誌学』第參卷第五号
7. 1939 『書誌学』第12巻1号  
「本会（日本書誌学会）制定術語原案」『書誌学』昭和9年11月  
「日本書誌学会制定術語」『書誌学会』昭和14年2月
8. 1941 上田徳三郎『製本乃輯』
9. 1955 広辞苑 第一版 新村出 岩波書店
10. 1960 長澤規矩也『書誌学序説』吉川弘文館
11. 1966 伊地知鐵男『日本古文書学提要』新生社
12. 1967. 1 『書誌学』復刊 新七号
13. 1967 植村長三郎『図書館学・書誌学辞典』東京有隣堂
14. 1969 広辞苑 第二版 新村出 岩波書店
15. 1972 川瀬一馬『日本書誌学概説—増訂版—』東京 凸版印刷
16. 1974 長澤規矩也『図解図書館学 図書館参考図録 入門編1』汲古書院
17. 1974 藤原覚一『図説 日本の結び』築地書館
18. 1974 橋本不美男『原典をめざして 古典文学のための書誌』笠間書店
19. 1976 長澤規矩也『古書のはなし—書誌学入門—』富山房

20. 1976 『国宝事典』 新增補改訂版 文化庁編 便利堂
21. 1976 長澤規矩也『図解 書誌学入門 図書館学参考図録入門編4』長澤規矩也
22. 1977 山岸徳平『書誌学序説』東京 岩波書店
23. 1979 池上幸二郎・倉田文夫『本の作り方』東京 主婦と生活社
24. 1979 『古筆大辞典』春名好重編著 淡交社
25. 1979 『本のつくり方』池上幸二郎、倉田文夫著 主婦と生活社
26. 1982 『日本書誌学用語辞典』川瀬一馬著 雄松堂出版
27. 1983 『広辞苑 第三版』新村出 岩波書店
28. 1987 津金幹彦「古典籍目録(国書)の要件」大学図書館研究30 p.76-81.
29. 1987 遠藤諦之輔『古文書補修六十年』東京 汲古書店
30. 1987 仲井徳「図書装訂史について—粘葉装と綴葉装を中心に—」p.78-65.
31. 1989 関靖「金沢文庫書誌論考」金沢文庫研究紀要第二号 臨川書店
32. 私学図書館協会会報 90
33. 1990 「国文学研究資料館 第44回常設展示」解説1
34. 1990 森縣「書籍装幀の歴史における折本の位置」汲古 第16号 p.410.
35. 1991 藤井隆『日本古典書誌学総説』大阪 和泉書院
36. 1991 『広辞苑 第四版』新村出 岩波書店
37. 1993 大内田貞原著「東洋における書物装訂について」ビブリア p.136-147.
38. 1995 中野三敏『書誌学談義—江戸の版本—』東京 岩波書店
39. 1995 「国文学研究資料館第61回常設展示」解説
40. 1995 出久根達郎「装幀・装釘・アラ?装訂」本の話 pp.44-47.
41. 1995 藤森馨「和図書装訂研究史の諸問題—大和綴を中心に—」國學院雑誌 平成七年一月 p.106-123.
42. 1996 長澤規矩也『古書のはなし—書誌学入門—』東京 富山房
43. 1996.11 櫛笥節男「綴葉装及び粘葉装本の装訂の前後関係について」汲古 古典研究会編
44. 1996 櫛笥節男『大和綴について—歴史史料からの検—』書陵紀要 第48号 p.80.
45. 1998 広庭基介、長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』京都 世界思想社
46. 1998 『広辞苑 第五版』新村出 岩波書店
47. 1998 中藤靖之『古文書の補修と取り扱い』東京 雄山閣
48. 1998 吉岡眞之「折本のヴァリエーション—田中本『春秋』の旧装訂—」日本歴史 第600号 p.47-51.
49. 1998 森縣「書物の構造について」汲古 第32巻 p.10-17.
50. 1999 八嶋正治「列帖装」の実体と名称 汲古 第34号 p.17-27.
51. 1999 櫛笥節男「列帖装について」汲古 第34号 p.14-16.
52. 1999 三浦勝己「大和綴」雑感 図書館雑誌 93(1) p.50-52.
53. 1999 『日本古典籍 書誌学辞典』p.406 p.559 p.582 岩波書店
54. 2000 三澤克己「装訂用語としての「大和綴」」漢籍：整理と研究 No.9 p.1-14. 漢籍研究会
55. 2002 藤本孝一『日本の美術9』No.436 p.57.
56. 2002 『図書館情報学用語辞典 2版』丸善 p.154. p.155. p.232.
57. 2003 国文学研究資料館 展示解説
58. 2003 『図書館用語集 三訂版』日本図書館協会 2003 p.93. p.179. p.311. p.338.
59. 2003 八嶋正治 宮内庁書陵部高齢展示会「書写と装訂—写す 裁つ 綴じる」汲古第44号 p.23-29.
60. 2003 谷沢永一『日本近代書誌学細見』和泉書院
61. 2003 杉浦克己『改訂版書誌学』東京 財団放送大学教育振興会
62. 2004 藤森馨『古典籍装訂用語の整理に関する試論』図書館雑誌Vol.98 NO.2.
63. 2004 『最新図書館学用語大辞典』柏書房
64. 2005 「国文学研究資料館 ヴァーチャル展示」解説
65. 2005 橋口侯之介『和本入門』平凡社
66. 2005 大貫伸樹『製本探索』印刷学会出版部
67. 2006 吉野敏武『古典籍の装幀と造本』印刷学会出版部

68. 2006 櫛笥節男『書庫渉獵』東京 おうふう
69. 2007 日本古書通信 日本古書数新社 藤本孝一「冊子本の成立」  
第935号 2007年6月号 p. 16-17. 第936号 2007年7月号 p. 7-9.  
第937号 2007年8月号 p. 12-13. 第938号 2007年9月号 p. 14-15.  
第939号 2007年10月号 p. 12-13. 第940号 2007年11月号 p. 24-25.  
第941号 2007年12月号 p. 14-15.
70. 2008 『広辞苑 第六版』新村出 岩波書店
71. 2008 中野三敏「和本教室」岩波書店『図書』  
2008. 6, p. 44-47. 7, p. 54-57. 8, p. 48-51. 9, p. 60-63. 10, p. 60-63. 11, p. 60-63. 12,  
p. 38-41. 2009. 1, p. 35-39. 2, p. 38-45. 3, p. 38-40. 4, p. 43-45. p. 45-47. p. 45-47.  
7, p. 36-38. 8, p. 39-41. 9, p. 39-41. 10, p. 42-45. 11, p. 30-34. 12, p. 32-34. 2010. 1,  
p. 34-37. 2, p. 43-45. 3, p. 35-37. 4, p. 43-45. 5, p. 41-43. 6, p. 48-50. 7, p. 48-50.  
8, p. 51-53. 9, p. 40-42. 10, p. 40-42. 11, p. 32-34.
72. 2010 堀川貴司『書誌学入門—古典を見る・知る・読む—』勉誠社